

# 坑夫

夏目漱石



一冊堂青安文庫



坑夫

夏目漱石

さつきから松原を通つてゐるんだが、松原と云うものは絵で見たよりもよっぽど長いもんだ。いつまで行つても松ばかり生えていていつこう要領を得ない。こつちがいくら歩行たつて松の方で發展してくれなければ駄目な事だ。いつそ始めから突つ立つたまま松と睨めつ子をしてゐる方が増した。

東京を立つたのは昨夕の九時頃で、夜通しむちやくちやに北の方へ歩いて来たら草臥れて眠くなつた。泊る宿もなし金もないから暗闇の神樂堂へ上つてちよつと寝た。何でも八幡様らしい。寒くて目が覚めたら、まだ夜は明け離れていなかった。それからのべつ平押しにここまでやつて来たやうなもの、こゝろやたらに松ばかり並んでいては歩く精がない。

足はだいぶ重くなつてゐる。膨ら脛に小さい鉄の才槌を縛り附けたやうに足搔に骨が折れる。袷の尻は無論端折つてある。その上洋袴下さえ穿いていないのだから不断なら競走でもできる。が、こゝろ松ばかりじゃ所詮敵わない。

掛茶屋がある。葭簀よしずの影から見ると粘土ねぼつちのへつ・ついに、錆た茶釜ちやがまが掛かっている。床しよ几うぎが二尺ばかり往来へ食はみ出した上から、二三足草鞋わらじがぶら下がって、袈裟はてんだか、どてら・だか分らない着物を着た男が背中をこちらへ向けて腰を掛けている。

休ちゆうもうかな、廃よそうかなと、通り掛りに横目で覗のぞき込んで見たら、例の袈裟くわしとどてら・の中うちを行く男が突然こつちを向いた。煙草たばこの脂やにで黒くなった齒を、厚い唇くちびるの間から出して笑っている。これはと少し気味が悪くなり掛ける途端とたんに、向うの顔は急に真面目まじめになった。今まで茶店の婆さんとさる面白い話をしていて、何の気もつかずに、ついそのままの顔を往来へ向けた時に、ふと自分の面相に出でっ喰くわしたものと見える。ともかく向うが真面目になったのでようやく安心した。安心したと思う間まもなくまた気味が悪くなった。男は真面目になった顔を真面目な場所に据すえたまま、白眼しろめの運動が氣に掛かるほどの勢いで自分の口から鼻、鼻から額ひたいとじりじり頭の上へ登って行く。烏打帽ひさしの廂ひさしを跨またいで、脳天まで届いたと思う頃また白眼がじりじり下へ降さがって来た。今度は顔を素通りへそにして胸から臍へそのあたりまで来るとちよつと留まった。臍へその所には墓口がまぐちがある。三十二銭はい這入はいっている。白い眼は久留米くるめが緋すりの上からこの墓口ねらを覗ねらったまま、木綿もめんの兵児帯へこおびを乗またぐり越してやつと股倉またぐらへ出た。股倉またぐらから下にあるものは空脛からすねばかりだ。いくら見たつ

て、見られるようなものは食ッ附いちやいない。ただ不断より少々重たくなっている。白い眼はその重たくなっている所を、わざと、じりじり見て、とうとう親指の痕が黒くついた俎下駄の台まで降くだつて行つた。

こう書くと、何だか、長く一所に立よつてつていて、さあ御覧下さいと云わないばかりに振舞つたように思われるがそうじゃない。実は白い眼の運動が始まるや否いなや急に茶店へ休むのが厭いやになったから、すたすた歩き出したつもりである。にもかかわらず、このつもりが少々覚束おぼつかなかつたと見えて、自分が親指にまむしを拵こしらえて、俎下駄を振ねる間際まぎわには、もう白い眼の運動は済んでいた。残念ながら向うは早いものである。じりじり見るんだから定めし手間が掛かるだろうと思つたら大間違い。じりじりには相違ない、どこまでも落ちついている。がそれで滅法めつぱう早い。茶屋の前を通り越しながら、世の中には、妙な作用を持つてゐる眼があるものだと思つたくらいである。それにしても、ああ緩ゆるくり見られないうちに、早く向き直る工夫はなかつたもんだろうか。さんざつ腹冷ばらひやかされて、さあ御帰り、用はないからと云う段になつて、もう御免蒙ごめんこうむりますと立ち上つたようなものだ。こつちは馬鹿ばか氣げている。あつちは何意である。

歩き出してから五六間の間は変に腹が立つた。しかし不愉快は五六間ですぐ消えてし

まった。と思うとまた足が重くなった。——この足だもの。何しろ鉄の才槌さいづちを双方の足へ縛りしば附けて歩いてるんだから、敏活の行動は出来ないはずだ。あの白い眼にじりじりやられたのも、満更まんぜら持前の半間はんまからばかり来たとも云えまい。こう思い直して見ると下らない。

その上こんな事を気にしていられる身分じゃない。いったん飛び出したからは、もうどうあつても家へうち戻るりようけん了簡はない。東京にさえ居り切れない身体からだだ。たとい田舎いなかでも落ちつく気はない。休むと後から追うしろつ掛けられる。昨日きのうまでのいさくさが頭の中を切つて廻めぐった日にはどんな田舎だつてやり切れない。だからただ歩くのである。けれども別段に目的めあてもない歩き方だから、顔の先一間四方がぼうとして何だか焼き損そくなつた写真のよめあてうに曇っている。しかもこの曇つたものが、いつ晴れると云う的あてもなく、ただ漠然ばくぜんと際限もなく行手に広がっている。いやしくも自分が生きている間は五十年でも六十年でも、いくら歩いても走かけても依然として広がっているに違いない。ああ、つまらない。歩くのはいたたまれないから歩くので、このぼんやりした前途を拔出するために歩くのではない。抜け出そうとしたつて抜け出せないのは知れ切っている。

東京を立つた昨夜ゆうべの九時から、こう諦あきらめはつけてはいるが、さて歩き出して見ると、歩

きながら気が気でない。足も重い、松が厭あきるほど行列している。しかし足よりも松よりも腹の中が一番苦しい。何のために歩いているんだか分らなくって、しかも歩かなくっては一刻も生きていられないほどの苦痛は滅多めったにない。

のみならず歩けば歩くほどとうてい抜ける事のできない曇った世界の中へだんだん深く潜もぐり込んで行くような気がする。振り返ると日の照っている東京はもう代よが違っている。手を出しても足を伸ばしても、この世では届かない。まるで娑婆しやばが違う。そのくせ暖かな朗ほがとかな東京は、依然として眼先にありありと写っている。おういと日蔭ひかげから呼びたくなるくらい明かに見える。と同時に足の向いてる先は漠々ばくばくたるものだ。この漠々のうちへ——命のあらん限り広がっているこの漠々のうちへ——自分はふらふら迷い込むのだから心細い。

この曇った世界が曇ったなりはびこって、定業じようごうの尽きるまで行く手を塞ふさいでいてはたまらない。留とどまった片足を不安の念に駆かられて一步前へ出すと、一步不安の中へ踏み込んだ訳わけになる。不安に迫い懸けられ、不安に引つ張られて、やむを得ず動いては、いくら歩いてもいくら歩いても埒らちが明くはずがない。生涯しやうがいの片づかない不安の中を歩いて行くんだ。とても事の曇ったものが、いつそだんだん暗くなってくれればいい。暗くなっ

た所をまた暗い方へと踏み出して行ったら、遠からず世界が闇になつて、自分の眼で自分の身体が見えなくなるだろう。そうなれば気楽なものだ。

意地の悪い事に自分の行く路は明るくもなつてくれず、と云つて暗くもなつてくれない。どこまでも半陰半晴の姿で、どこまでも片づかぬ不安が立て罩めてゐる。これでは生甲斐がない、さればと云つて死に切れない。何でも人のいない所へ行つて、たった一人で住んでいたい。それが出来なければいつその事……

不思議な事にいつその事と観念して見たが別にどきんもしなかつた。今まで東京にいた時分いつその事と無分別を起しかけた事もたびたびあるが、そのたびたびにどきんとしない事はなかつた。後からぞつととして、まあ善かつたと思わない事もなかつた。ところが今度は天からどきんともぞつともしない。どきんともぞつともでも勝手にするが善いと云うくらいに、不安の念が胸一杯に広がつていたんだらう。その上いつその事を断行するのが今ではないと云う安心がどこかにあるらしい。明日になるか明後日になるか、ことに由つたら一週間も掛るか、まかり間違えば無期限に延ばしても差支ない和高を括つていたせいかも知れない。華嚴の瀑にしても浅間の噴火口にしても道程はまだだいぶあるくらいは知らぬ間に感じていたんだらう。行き着いていよいよとならなけ



れば誰がどきんとするものじゃない。したがっていつその事を断行して見ようと云う気にもなる。この一面に曇った世界が苦痛であつて、この苦痛をどきんとしない程度において免れる望があると思えば重い足も前に出し甲斐がある。まずこのくらの決心であつたらしい。しかしこれはあとから考えた心理状態の解剖である。その当時はただ暗い所へ出ればいい。何でも暗い所へ行かなければならないと、ひたすら暗い所を目的に歩き出したばかりである。今考えると馬鹿馬鹿しいが、ある場合になると吾々は死を目的にして進むのを責<sup>せめ</sup>てもの慰藉<sup>いしや</sup>と心得るようになって来る。ただし目指す死は必ず遠方になければならないと云う事も事実だろうと思う。少くとも自分はそう考える。あまり近過ぎると慰藉になりかねるのは死と云う因果である。

ただ暗い所へ行きたい、行かなくっちゃならないと思ひながら、雲を攫<sup>つか</sup>むような料簡<sup>りょうけん</sup>で歩いて来ると、後<sup>うしろ</sup>からおいおい呼ぶものがある。どんなに魂がうろついてる時でも呼ばれて見ると性根<sup>しょうね</sup>があるのは不思議なものだ。自分は何の気もなく振り向いた。応ずるためと云う意識さえ持たなかったのは事実である。しかし振り向いて見て始めて気がついた。自分はさっきの茶店からまだ二十間とは離れていない。その茶店の前の往来へ、例の袈<sup>はんでん</sup>天<sup>てん</sup>とどてらの合<sup>あい</sup>の子<sup>こ</sup>が出て、脂<sup>やに</sup>だらけの齒<sup>さくら</sup>をあらわに曝<sup>さら</sup>しながらしきりに自分を

呼んでゐる。

昨夕東京を立てってから、まだ人間に口を利いた事がない。人から言葉を掛けられようなどとは夢にも予期していなかった。言葉を掛けられる資格などはまるで無いものと自信し切っていた。ところへ突然呼び懸けられたのだから——粗末な歯並びだが向き出しに笑顔を見せてしきりに手招きをしているのだから、ぼんやり振り返った時の心持が、自然と判然すると共に、自分の足はいつの間にか、その男の方へ動き出した。

実を云うとこの男の顔も服装も動作もあんまり気に入っちゃいない。ことにさつき白い眼でじろじろやられた時などは、何となく嫌悪の念が胸の裡に萌し掛けたくらいである。それがものの二十間とも歩かないうちに以前の感情はどこかへ消えてしまつて、打つて變つた一種の温味を帯びた心持で後歸りをしたのはなぜだか分らない。自分は暗い所へ行かなければならないと思つてゐた。だから茶店の方へ逆戻りをし始めると自分の目的とは反対の見当に取つて返す事になる。暗い所から一步立ち退いた意味になる。ところがこの立退が何となく嬉しかった。その後いろいろ経験をして見たが、こんな矛盾は到る所に転がっている。けつして自分ばかりじゃあるまいと思う。近頃ではてんで性格なんてものはないものだと考えてゐる。よく小説家がこんな性格を書くの、あんな

性格をこしらえるのと云つて得意がつている。読者もあの性格がこうだの、ああだのと分つたような事を云つてゐるが、ありや、みんな嘘うそをかいて楽しんで嬉しがつてゐるんだろう。本当の事を云うと性格なんて纏まとつたものはありやしない。本当の事が小説家などにかけるものじゃなし、書いたつて、小説になる氣づかいはあるまい。本当の人間は妙に纏まとめにくいものだ。神さまでも手古てこずるくらい纏まとまらない物体だ。しかし自分だけがどうあつても纏まとまらなく出来上つてゐるから、他人ひとも自分同様しな締しまりのない人間に違ちがひないと早合点はやがてんをしているのかも知れない。それでは失礼に當る。

とにかく引き返して目倉めくら縞しまの傍そばまで行くと、どてらはさも馴なれ馴なれしい声で

「若い衆しゅさん」

と云いながら、大きな顎あごを心持襟えりの中へ引きながら自分の額のあたりを見詰めてゐる。自分は好加減いいかげんなところで、茶色の足を二本立てたまま、

「何か用ですか」

と叮嚀ていねいに聞いた。これが平生へいぜいならこんなどてらから若い衆さんなんて云われて快よく返辞へんじをする自分じゃない。返辞へんじをするにしてもうんとか何だとかで済すしたろうと思う。ところがこの時に限つて、人相にさうのよくないどてらと自分とは全く同等の人間のような氣持

がした。別に利害の関係からしてわざと腰を低く出たんじゃ、けっしてない。するとど  
てらの方でも自分を同程度の人間と見倣みなしたような語気で、

「御前おまえさん、働りようけんく了簡はないかね」

と云った。自分は今が今まで暗い所へ行くよりほかに用のない身と覚悟していたんだか  
ら、藪やぶから棒ぼうに働はたらく了簡はないかねと聞かれた時には、何と答えて善いいか、さっぱり訳わけ  
が分らずに、空脛からすねを突つ張つたまま、馬鹿見たような口を開けて、ぼんやり相手を眺ながめ  
ていた。

「御前さん、働はたらく了簡はないかね。どうせ働かなくっちゃならないんだろう」

とどてらがまた問い返した。問い返された時分にはこっちの腹も、どうか、こうか、受  
け答の出来るくらいに眼前の事況じきようを会得えとくするようになった。

「働はたらいても善いいですが」

これは自分の答である。しかしこの答がいやしくも口に出て来るほどに、自分の頭が  
間に合せの工面にせよ、やつと片づいたと云うものは、単純ながら一順の過程を通つて  
おる。

自分はどこへ行くんだか分らないが、なにしろ人のいないところへ行く気でいた。の

に振り向いてどてらの方へあるき出したのだから、歩き出しながら何となく自分に対して憫然びんぜんな感がある。と云うものはいくらどてらでも人間である。人間のいない方へ行くべきものが、人間の方へ引き戻されたんだから、ことほさように人間の引力が強いと云う事を証拠立てると同時に、自分の所志にもう背かねばならぬほどに自分は薄弱なものであったと云う事をも証拠立てている。手短てみじかに云うと、自分は暗い所へ行く気でいるんだが、実のところはやむを得ず行くんで、何か引っかけが出来れば、得たり賢かしこしと普通の娑婆しやばに留まる了簡なんだろうと思われる。幸いに、どてらが向うから引っかけたんで、何の気なしに足が後向うしろむきに歩き出してしまったのだ。云わば自分の大目的に申し訳のない裏切りをちよつとして見た訳になる。だからどてらが働く気はないかねと出てくれずに、御前さん野にするかね、それとも山にするかねとでも切り出したら、しばらく安心して忘れかけた目的を、ぎよつと思ひ出させられて、急に暗い所や、人のいない所が怖こわくなつてぞつとしたに違ない。それほど娑婆しやば気が、戻り掛ける途端とたんにもう萌もぎしていたのである。そうしてどてらに呼ばれば呼ばれるほど、どてらの方へ近寄れば近寄るほど、この娑婆気は一步ごとに増長したものと見える。最後に空脛からすねを二本、棒のようにどてらの真向うに突つ立てた時は、この娑婆気が最高潮に達した瞬間で

ある。その瞬間に働く気はないかねと来た。御粗末などてらだが非常に旨く自分の心理状態を利用した勧誘である。だし抜けの質問に一時はぼんやりしたようなものの、ぼんやりから覚めて見れば、自分はいつか娑婆の人間になっている。娑婆の人間である以上は食わなければならない。食うには働かなくっちゃ駄目だ。

「働いても、いいですが」

答は何の苦もなく自分の口から滑り出してしまった。するとどてらはそうだろうそのはずさと云うような顔つきをした。自分は不思議にもこの顔つきをもっともだと首肯した。

「働いても、いいですが、全体どんな事をするんですか」

と自分はここで再び聞き直して見た。

「大変儲かるんだが、やって見る気はあるかい。儲かる事は受合なんだ」

どてらは上機嫌の体で、にこにこ笑いながら、自分の返事を待っている。どうせどてらの笑うんだから、愛嬌にもなんにもなつちやいない。元来笑うだけ損になるようにでき上がってる顔だ。ところがその笑い方が妙になつかしく思われて

「ええやつて見ましよう」

と受けてしまった。

「やって見る？ そいつあ結構だ。君儲もつかるよ」

「そんなに儲けなくつても、いいですが……」

「え？」

どてらはこの時妙な声を出した。

「全体どんな仕事なんですか」

「やるなら話すが、やるだろうね、お前さん。話した後で厭いやだなんて云われちゃ困るが。きつとやるだろうね」

どてらはむやみに念を押す。自分はそこで、

「やる気です」

と答えた。しかしこの答は前のように自然天然には出なかった。云わばいきみ出した答である。大抵の事ならやって退けるが、万一の場合には逃げを張る気と見えた。だからやりますと云わずにやる気ですと云ったんだろう。——こう自分の事を人の事のように書くのは何となく変だが、元来人間は締りのないものだから、はつきりした事はいくら自分の身の上だって、こうだとは云い切れない。まして過去の事になると自分も人も区

別はありやしない。すべてがだろ・うに變化してしまふ。無責任だと云われるかも知れないが本當だから仕方がない。これからさきも危<sup>あや</sup>しいところはいつでもこの式で行くつもりだ。

そこでどてらは略<sup>はば</sup>話が纏<sup>まと</sup>つたものと呑<sup>の</sup>み込んで

「じゃ、まあ御<sup>お</sup>這<sup>はい</sup>入り。緩<sup>ゆつ</sup>くり御茶でも呑<sup>の</sup>んで話すから」

と云う。別に異存もないから、茶店に這入つてどてらの隣りに腰をおろしたら、口のゆがんだ四十ばかりの神<sup>かみ</sup>さんが妙な臭<sup>にお</sup>いのする茶を汲<sup>くみ</sup>んで出した。茶を飲んだら、急に思ひ出したように腹が減つて來た。減つて來たのか、減つていたのに氣がついたのか分らない。墓<sup>がまぐち</sup>口には三十二錢這入っている、何か食おうかしらと考えていると

「君、煙<sup>たばこ</sup>草を呑むかい」

と、どてらが「朝日」の袋を横から差し出した。なかなか御世辞がいい。袋の角<sup>かど</sup>が裂けてるのは仕方がないが、何だか薄穢<sup>うすぎた</sup>なく垢<sup>あか</sup>づいた上に、びしゃりと押し潰<sup>つぶ</sup>されて、中にある煙草がかたまつて、一本になつてるように思われる。袖<sup>そで</sup>のないどてらだから、入れ所に窮<sup>はら</sup>して腹掛<sup>はらがけ</sup>の隠しへでも振<sup>ね</sup>じ込んで置くものと見える。

「ありがたい、たくさんです」



と断ると、どてらは別に失望の体もなく、自分でかたまつたうちの一本を、爪垢のたまつた指先で引つ張り出した。はたせるかな煙草は皺だらけになって、太刀のように反っている。それでも破けた所もないと見えて、すばすば吸うと鼻から煙が出る。際どいところで煙草の用を足しているから不思議だ。

「御前さん、幾年になんなさる」

どてらは自分の事を御前さんと云ったり君と云ったりするようだが、何で区別するんだか要領を得ない。今までのところで察して見ると、儲かるときには君になって、不断の時には御前さんに復するようにも見える。何でも儲かる事がだいぶん気になっているらしい。

「十九です」

と答えた。実際その時は十九に違なかつたのである。

「まだ若いんだね」

と口のゆがんだ神さんが、後向になつて盆を拭きながら云つた。後向きだから、どんな顔つきをしているか見えない。独り言だからどてらに話しかけてるんだか、それとも自分を相手にする気なんだか分らなかつた。するとどてらは、さも調子づいた様子で、

「そうさ、十九じゃ若いもんだ。働き盛りだ」

と、どうしても働かなくっちゃならないような語気である。自分はだまって床几しょうぎを離れた。

正面に駄菓子だがしを載せる台があつて、縁ふちの毀れた菓子箱の傍そばに、大きな皿がある。上に青い布巾ふきんがかかっている下から、丸い揚饅頭あげまんじゅうが食はみ出している。自分はこの饅頭が喰くひたくなつたから、腰を浮かして菓子台の前まで来たのだが、傍そばへ来て、つらつら饅頭まんじゅうの皿のぞを覗き込んで見ると、恐ろしい蠅だ。しかもそれが皿の前で自分が留まるや否いなや足音にパツと四方に散つたんで、おやと思ひながら、気を落ちつけて少しく揚饅頭を物色している、散らばつた蠅は、もう大風が通り越したから大丈夫だよと申し合せたように、再びぱつと饅頭の上へ飛び着いて来た。黄色い油切った皮の上に、黒いぼちぼちが出鱈目でたらめにできる。手を出そうかなと思う矢先へもつて来て、急に黒い斑点はんでんが、晴夜せいやの星宿せいきうのごとく、縦横に行列するんだから、少し辟易へきえきしてしまつて、ぼんやり皿を見下みおろしていた。

「御饅頭を上がんなさるかね。まだ新しい。一昨日おととい揚げたばかりだから」

かみさんは、いつの間にか盆を拭ふいてしまつて、菓子台の向側むこうがわに立っている。自分は

不意と眼を上げて神さんを見た。すると神さんは何と思つたか、いきなり、節太ふしぎの手を皿の上に翳かきして、

「まあ、大変な蠅はだ事」

と云いながら、翳した手を豎たてに切つて、二三度左右へ振つた。

「上がるんなら取つて上げよう」

神さんはたちまち棚の上から木皿を一枚おろして、長い竹の箸はしで、饅頭をぼんぼんぼんと七つほど挟はさみ込んで、

「こつちがいいでしょう」

と木皿を、自分の腰を掛けていた床几しょうぎの上へ持つて行つた。自分は仕方がないからまたもとの席へ歸つて、木皿の隣へ腰を掛けた。見ると、もう蠅が飛んで来ている。自分は蠅と饅頭と木皿を眺ながめながら、どてらに向つて

「一つどうです」

と云つて見た。これはあながち「朝日」の御礼のためばかりではない。幾分かはどてらが一昨日揚げた蠅だらけの饅頭を食うだろうか食わないだろうか試して見る腹もあつたらしい。するとどてらは

「や、すまない」

と云いながら、何の苦もなく一番上の奴を取って頬張っちゃった。唇の厚い口をもごつかせているところを観察すると、満更でもなさそうに見えた。そこで自分も思い切つて、こちら側の下から、比較的奇麗なのを摘み出して、あんぐりやった。油の味が舌の上へ流れ出したと思う間もなく、その中から苦い餡が卒然として味覚を冒して来た。しかしこの際だから別にしまったとも思わなかった。難なく餡も皮も油もぐいと胃の腑へ呑み下してしまつたら、自然と手がまた木皿の方へ出たから不思議なものだ。どてらはこの時もう第二の饅頭を平らげて、第三に移っている。自分に比較すると大変速力が早い。そうして食つてゐる間は口を利かない。働く事も儲かる事もまるで忘れてゐるらしい。したがって七つの饅頭は呼吸を二三度するうちに無くなつてしまつた。しかも自分はたった二つしか食わない。残る五つは瞬く間にどてらのためにしてやられたのである。

いかに逡巡をするほどの汚らしいものでも、一度皮切りをやると、あとはそれほど神経に障らずに食えるものだ。これはあとで山へ行つてしみじみ経験した事で、今では何でもない陳腐の真理になつてしまつたが、その時は饅頭を食いながら少々呆れたくら

い後が食いたくなつた。それに腹は減っている。その上相手がどてらである。このどてらが事もなげに、砂のついた鰻頭をばくつくところを見ると、多少は競争の気味にもなつて、神経などは有つても役に立たない、起すだけが損だと云う心持になる。そこで自分はとうとう神さんにたのんで鰻頭の御代りを貰つた。

今度は「一つ、どうです」とも何とも云わずに、木皿が床几の上に乗るや否や、自分の方でまず一つ頬張つた。するとどてらも、「や、すまない」とも何とも云わずに、だまつて一つ頬張つた。次に自分がまた一つ頬張る。次にどてらがまた一つ頬張る。互違に頬張りつ子をして六つ目まで来た時、たった一つ残つた。これが幸い自分の番に当たっているの、どてらが手を出さないうちに、自分が頬張つてしまった。それからまた御代りを貰つた。

「君だいぶやるね」

とどてらが云つた。自分はだいぶやる気も何もなかったが、云われて見るとだいぶやるに違ない。しかしこれは初手にどてらの方で自分の食いたくないものを、むしろむしろ食つて見せて、自分の食欲を誘致した結果が与つて力あるようだ。ところがどてらの方では全然こつちの責任でだいぶやつてゐるような口氣であつた。だから自分は何だかどて

らに對して弁解して見たい氣がしたが、弁解する言葉がちよつと出て来なかつた。ただ雲を攫つかむようにどてらにも責任があるんだらうと思うだけで、どこが責任なんだか分らなかつたから黙っていた。すると

「君、揚饅頭がよつぽど好きと見えるね」

と今度は云つた。饅頭にも寄り切りで、一昨日おととい揚げた砂だらけの蠅だらけの饅頭が好きは訳はない。と云つて現に三皿まで代えて食うものを嫌きらだとは無論云われない。だから今度も黙っていた。そこへ茶店の神さんが突然口を出した。――

「うちの御饅おまんは名代の御饅だから、みんなが旨うまがつて食べるだよ」

神さんの言葉を聞いた時自分は何だか馬鹿にされてるような氣がした。そこでますます黙ってしまった。黙つて聞いてると、

「旨い事この上なしだ」

とどてらが云つてる。本当なんだか御世辞なんだかちよつと見當けんとうがつかなかつた。とにかく饅頭はどうでも構わないから、肝心かんじんの労働問題を聞糾きぎだして見ようと思つて、

「先刻さつきの御話ですがね。実は僕もいろいろの事情があつて、働いて飯を食わなくっちゃならない身分なんですが、いったいどんな事をやるんですか」

とこつちから口を切つて見た。どてらは正面の菓子台を眺めていたが、この時急に顔だけ自分の方へ向けて

「君、儲かるんだぜ。嘘じゃない、本当に儲かる話なんだから是非やりたまえ」

と、またぞろ自分を君呼わりにして、しきりに儲けさせたがつている。こつちへ向き直つて、自分を誘い出そうと力める顔つきを見ると、頬骨の下が自然と落ち込んで、落ち込んだ肉が再び顎の枠で角張っている。そこへ表から射し込む日の加減で、小鼻の下から弓形にでき上つた皺が深く映っている。この様子を見た自分は何となく儲けるのが恐ろしくなつた。

「僕はそんなに儲けなくつても、いいです。しかし働く事は働くです。神聖な労働なら何でもやるです」

どてらの頬の辺には、はてなと云う景色がちよつと見えたが、やがて、かの弓形の皺を左右に開いて、脂だらけの歯を遠慮なく剥き出して、そうして一種特別な笑い方をした。あとから考えるとどてらには神聖な労働と云う意味が通じなかつたらしい。いやしくも人間たるものが金儲の意味さえ知らないで、こむずかしい口巧者な事を云うから、気の毒だと云うのでどてらは笑つたのである。自分は今は今まで死ぬ気でいた。死なな

いまでも人間のいない所へ行く気でいた。それができ損そったから、生きるために働く気になったまでである。儲もかるとか儲もからないとか云う問題は、てんで頭の中にはない。今ないばかりじゃない、東京にいて親の厄介やつかいになつてゐる時分からなかった。どころじゃない儲もうけしゅぎ主義は大いに輕蔑けいべつしてゐた。日本中どこへ行つてもそのくらいな考えは誰にもあるだろうくらいに信じてゐた。だからどてらがさつきから儲かる儲かると云うのを聞くたんびに何のためだろうと不思議に思つてゐた。無論癪しゃへには障さわらない。癪に障るような身分でもなし、境遇でもないから、いつかう平氣ではいたが、これが人間に対する至大の甘言で、勧誘の方法として、もっとも利目ききめのあるものだと夢にも想おもい至らなかつた。そこで、どてらから笑われちまつた。笑われてさえいつかう通じなかつた。今考えると馬鹿馬鹿しい。

一種特別な笑い方をしたどてらは、その笑いの収まりかけに、  
「お前さん、全体今まで働いた事があんなさるのかね」

と少し真面目な調子で聞いた。働くにも働かないにも、昨日自宅を逃げ出したばかりである。自分の経験で働いた試しは撃剣げっけんの稽古けいこと野球の練習ぐらいなもので、稼かせいで食つた事はまだ一日もない。



「働いた事はないです。しかしこれから働かなくっちゃあならない身分です」

「そうだろう。働いた事がなくっちゃ……じゃ、君、まだ儲けた事もないんだね」

と当り前の事を聞いた。自分は返事をする必要がないから、黙っていると、茶店のかみさんが、菓子台の後うしろから、

「働くからにや、儲けなくっちゃあね」

と云いながら、立ち上がった。どてらが、

「全くだ。儲けようったって、今時そう儲け口が転がつてるもんじゃない」

と幾分か自分に対して恩に被きせるように答えるのを、

「そうさ」

と幾分かさげすむように聞き流して、裏へ出て行つた。このそうさが妙に氣になつて、ことによると、まだその後あとがあるかも知れないと思つたせいか、何気なく後姿うしろかたを見送つていると、大きな黒松の根方ねがたのところへ行つて、立小便たちしょうべんをし始めたから、急に顔を背そむけて、どてらの方を向いた。どてらはすぐ、

「私わたしだから、お前さん、見ず知らずの他人にこんな旨い話うまいをするんだ。これがほかのものだったら、受合うあつてただじゃ話わしつこない旨い口なんだからね」

とまた恩に被<sup>き</sup>せる。自分は、面倒くさいからおとなしく、

「ありがたいです」

と四角張<sup>しかく</sup>つて答えて置いた。

「実はこう云う口なんだがね」

と、どてらが、すぐに云う。自分は黙<sup>もく</sup>つて聞いていた。

「実はこう云う口なんだがね。銅<sup>やま</sup>山へ行<sup>い</sup>つて仕事をするんだが、私が周旋<sup>しゆせん</sup>さえすれば、すぐ坑夫になれる。すぐ坑夫になれりや大したもんじゃないか」

自分は何か返事<sup>うたが</sup>を促<sup>うなが</sup>されるような気がしたけれども、どうもどてらの調子に載<sup>の</sup>せられて、そうですとは答える訳に行<sup>い</sup>かなかった。坑夫と云えば鉋<sup>くわ</sup>山の穴の中で働く労働者に違<sup>ちが</sup>ない。世の中に労働者の種類はだいぶんあるだろうが、そのうちでもっとも苦しくつて、もっとも下等なものが坑夫だとばかり考えていた矢先へ、すぐ坑夫になれりや大したものだと云われたのだから、調子を合<sup>あ</sup>すどころの騒<sup>さわ</sup>ぎじゃない、おやと思うくらい内心では少<sup>お</sup>からず驚<sup>おど</sup>いた。坑夫の下にはまだまだ坑夫より下等な種<sup>しゆ</sup>属<sup>ぶく</sup>があると云うのは、大晦<sup>おおみそ</sup>日の後<sup>あと</sup>にまだたくさん日<sup>ひ</sup>が余<sup>あ</sup>つてると云うのと同じ事で、自分にはほとんど想像<sup>さうぞう</sup>がつか<sup>つか</sup>なかった。実<sup>じ</sup>を云うとどてらがこんな事を饒<sup>しやべ</sup>舌<sup>ぜつ</sup>るのは、自分<sup>じやくねん</sup>を若<sup>あなど</sup>年<sup>ねん</sup>と侮<sup>あなど</sup>つて、好<sup>こ</sup>い

加減に人を瞞すのではないかと考えた。ところが相手は存外真面目である。

「何しろ、取附とつつけからすぐに坑夫なんだからね。坑夫なら楽なもんさ。たちまちのうちに金がうんと溜たまたつちまつて、好きな事が出来らあね。なに銀行もあるんだから、預けようと思やあ、いつでも預けられるしさ。ねえ、御かみさん、初めっから坑夫になれりや、結構なもんだね」

とかみさんの方へ話の向むきを持って行くとかみさんは、さつき裏で、立ちながら用を足したままの顔をして、

「そうとも、今からすぐ坑夫になつて置きやあ四五年立つうちにや、唸うなるほど溜るばかりだ。——何しろ十九だ。——働き盛りだ。——今のうち儲けなくっちゃ損だ」  
と一句、一句間あいだを置いて独り言ひとりごとのように述べている。

要するにこのかみさんも是非坑夫になれと云わぬばかりの口占くちうらで、全然どてらと同意見を持っているように思われた。無論それでよろしい。またそれでもいつこう構わない。妙な事にこの時ほどおとなしい気分になれた事は自分が生れて以来始めてであつた。相手がどんな間違を主張しても自分はただはいはいと云つて聞いていたろうと思う。実を云うと過去一年間において仕出しでかした不都合やら義理やら人情やら煩悶はんもんやら

が破裂して大衝突を引き起した結果、あてどもなくここまで落ちて来たのだから、昨日までの自分の事を考えると、どうしたって、こんなに温和おとなしくなれる訳がないのだが、実際この時は人に逆さかうような気分は薬にしたくつても出て来なかった。そうしてまたそれを矛盾とも不思議とも考えなかった。おそらく考える余裕がなかったんだろう。人間のうちで纏まとったものは身体からだだけである。身体が纏まとってるもんだから、心も同様に片づいたものだと思って、昨日と今日とまるで反対の事をしながらも、やはりもとの通りの自分だと平気で済すましているものがだいぶある。のみならずいったん責任問題が持ち上がった、自分の反覆はんぷくを詰なじられた時ですら、いや私の心は記憶があるばかりで、実はばらばらなんですからと答えるものがないのはなぜだろう。こう云う矛盾をしばしば経験した自分ですら、無理と思いつながら、いささか責任を感じるようだ。して見ると人間はなかなか重宝ちゆうほうに社会の犠牲になるように出来上ったものだ。

同時に自分のばらばらな魂がふらふら不規則に活動する現状を目撃して、自分を他人扱いに観察した最眞ひいきめ目なしの真相から割り出して考えると、人間ほど的にあてならないものはない。約束とか契ちがいとか云うものは自分の魂を自覚した人にはとても出来ない話だ。またその約束を楯たてにとって相手をぎゅぎゅ押しつけるなんて蛮行やばは野暮ぼの至りである。大

抵の約束を実行する場合を、よく注意して調べて見ると、どこかに無理があるにもかかわらず、その無理を強て<sup>しい</sup>圧<sup>お</sup>しかくして、知らぬ顔でやって退<sup>の</sup>けるまでである。決して魂の自由行動じゃない。はやくから、ここに気がついたなら、むやみに人を恨<sup>うら</sup>んだり、悶<sup>もた</sup>えたり、苦しまぎれに自宅<sup>うち</sup>を飛び出したりしなくっても済んだかも知れない。たとい飛び出してもこの茶店まで来て、どてらと神さんに対する自分の態度が、昨日までの自分とは打って変ったところを、他人扱いに落ち着き払って比較するだけの余裕があつたら、少しは悟れたらう。

惜しい事に当時の自分には自分に対する研究心と云うものがまるでなかった。ただ口<sup>く</sup>惜しくって、苦しくって、悲しくって、腹立たしくって、そうして気の毒で、済<sup>す</sup>まないで、世の中が厭<sup>いや</sup>になつて、人間が棄<sup>す</sup>て切れないで、いても立つても、いたたまれないで、むちゃくちゃに歩いて、どてらに引<sup>ひ</sup>つ掛<sup>か</sup>つて、揚<sup>あげ</sup>饅<sup>まん</sup>頭<sup>じゅう</sup>を喰<sup>く</sup>つたばかりである。昨日は昨日、今日は今日、一時間前は一時間前、三十分後は三十分後、ただ眼前の心よりほかに心と云うものがまるでなくなつちまつて、平生から繫<sup>つ</sup>続<sup>な</sup>ぎの取れない魂がいとどふわつき出して、実際あるんだか、ないんだかすこぶる明瞭<sup>めいりょう</sup>でない上に、過去一年間の大きな記憶が、悲劇の夢のように、朦朧<sup>もうろう</sup>と一団<sup>いっ団</sup>の妖氛<sup>ようふん</sup>となつて、虚空<sup>こくう</sup>遥<sup>はるか</sup>に際限もなく立て

罩めてるような心持ちであつた。

そこで平生の自分なら、なぜ坑夫になれば結構なんだとか、どうして坑夫より下等なものがあるんだとか、自分は儲ける事ばかりを目的に働く人間じゃないとか、儲けさえすりゃどこがいいんだとか、何とかかとか理窟を捏ねて、出来るだけ自己を主張しなければ勘弁しないところを、ただおとなしく控えていた。口だけおとなしいのではない、腹の中からまるで抵抗する氣が出なかつたのである。

何でもこの時の自分は、単に働けばいいと云う事だけを考えていたらしい。いやしくも働きさえすれば、——いやしくもこのふわふわの魂が五体のうちに、うろつきながらもいられさえすれば、——要するに死に切れないものを、強て殺してしまうほどの無理を冒さない以上は、坑夫以上だろうが、坑夫以下だろうが、儲かろうが、儲かるまいが、とんと問題にならなかつたものと見える。ただ働く口さえ出来ればそれで結構であるから、働き方の等級や、性質や、結果について、いかに自分の意見と相容れぬ法螺を吹かれても、またその法螺が、単に自分を誘致するためにする打算的の法螺であつても、またその法螺に乗る以上は理知の人間として自分の人格に尠からぬ汚点を貽す恐れがあつても、まるで氣にならなかつたんだろう。こんな時には複雑な人間が非情に單純

になるもんだ。

その上坑夫と聞いた時、何となく嬉しい心持がした。自分は第一に死ぬかも知れないと云う決心で自宅を飛出したのである。それが第二には死ななくとも好いから人のいない所へ行きたいと移つて来た。それがまたいつの間にか移つて、第三にはともかくも働こうと変化しちまつた。ところで、さて働くとなると、並の働き方よりも第二に近い方がよい、一歩進めて云えば第一に縁故のある方が望ましい。第一、第二、第三と知らぬ間に心変りがしたようなものの、変りつつ進んで来た、心の状態は、うやむやの間に縁を引いて、擦れ落ちながらも、振り返つて、もとの所を慕いつつ押されて行くのである。単に働くと云う決心が、第二を振り切るほど突飛でもなかったし、第一と交渉を絶つほど遠くにもいかなかったと見える。働きながら、人のいない所にいて、もつとも死に近い状態で作業が出来れば、最後の決心は意のごとくに運びながら、幾分か当初の目的にも叶う訳になる。坑夫と云えば名前の示すごとく、坑の中で、日の目を見ない家業である。娑婆にいながら、娑婆から下へ潜り込んで、暗い所で、鉤塊土塊を相手に、浮世の声を聞かないで済む。定めて陰気だろう。そこが今の自分には何よりだ。世の中に人間はごてごているが、自分ほど坑夫に適したものはけつしてないに違ない。坑夫は自分

に取つて天職である。——とここまで明瞭には無論考えなかったが、ただ坑夫と聞いた時、何となく陰気な心持ちがして、その陰気がまた何となく嬉しかった。今思い出して見ると、やっぱりどうあつても他人の事としか受け取れない。

そこで自分はどてらに向つてこう云つた。

「僕は一生懸命に働くつもりですが、坑夫にしてくれるでしょうか」  
するとどてらはなかなか鷹揚な態度で、

「すぐ坑夫になるのはなかなかむずかしいんだが、私が周旋さえすりゃきつとできる」と云うから自分もそんなものかなと考えて、しばらく黙っていると、茶店のかみさんがまた口を出した。

「長蔵さんが口を利きさえすりゃ、坑夫は受合だ」

自分はこの時始めてどてらの名前が長蔵だと云う事を知った。それからいつしよに汽車に乗ったり、下りたりする時に、自分もこの男を捕えて二三度長蔵さんと呼んだ事がある。しかし長蔵とはどう書くのか今もって知らない。ここに書いたのはもちろん当字である。始めて家庭を飛出した鼻をいきなり引つ張つて、思いも寄らない見当に向けた、云わば自分の生活状態に一転化を与えた人の名前を口で覚えていながら、筆に書け



ないのは異な事だ。

さてこの長蔵さんと、茶店のかみさんがきつと坑夫になれると受合うから、自分もなれるんだろうと思つて、

「じゃ、どうか何分願います」

と頼んだ。しかしこの茶店に腰を掛けているものが、どうして、どこへ行つて、どんな手続で坑夫になるんだかその辺はさっぱり分らなかった。

何しろ先方でこのくらい勧めるものだから、何分願いますと云つたら、長蔵さんがどうかするに違ないと思つて、あとは聞かずに黙っていた。すると長蔵さんは、勢いよくどてらの尻を床几しょうぎから立てて、

「それじゃこれから、すぐに出掛けよう。御前さん、支度したくはいいかい。忘れものがないようによく気をつけて」

と云つた。自分はずちを出る時、着のみ着のままで出たのだから、身体からだよりほかに忘れ物のあるはずがない。そこで、

「何にも無いです」

と立ち上がったが、伸さんと顔を見合せて気がついた。肝心かんじんの揚饅頭あげまんじゅうの代を忘れてい

る。長蔵さんは平気な面つらをして、もう半分ほど葭簀よしずの外に出て往来を眺ながめていた。自分は懷中から三十二錢入りの褌口がまぐちを出して饅頭三皿の代を払って、ついだから茶代として五錢やった。饅頭の代はどうとう忘れちまって思い出せない。ただその時かみさんが、

「坑夫になつて、うんと溜めて歸りにまた御寄おより」

と云つたのを記憶している。その後坑夫のちはやめたが、ついにこの茶店へは寄る機会がなかつた。それから長蔵さんに尾ついて、例の飽き飽きした松原へ出て、一本筋を足の甲まで埃ほこりを上げて、やつて来ると、さっきの長たらしいのに引き易かえて今度は存外早く片づいちゃつた。いつの間まにやら松がなくなつたら、板橋街道のような希知けちな宿しゆくの入口に出て来た。やッぱり板橋街道のように我多馬車がたばしやが通る。一足先へ出た長蔵さんが、振り返つて、

「御前さん馬車へ乗るかい」

と聞くから、

「乗つても好いです」

と答えた。そうしたら今度は

「乗らなくつてもいいかい」

と反対の事を尋ねた。自分は

「乗らなくつてもいいです」

と答えた。長蔵さんは三度目に

「どうするね」

と云ったから、

「どうでもいいです」

と答えた。その内に馬車は遠くへ行ってしまった。

「じゃ、歩く事にしよう」

と長蔵さんは歩き出した。自分も歩き出した。向うを見ると、今通った馬車の埃が日光にまぶれて、往来が濁ったように黄色く見える。そのうちに人通りがだんだん多くなる。町並がしだいに立派になる。しまいには牛込の神楽坂かぐらざかくらいな繁昌はんじょうする所へ出た。ここいらの店付みせつきや人の様子や、衣服は全く東京と同じ事であった。長蔵さんのようなのはほとんど見当らない。自分は長蔵さんに、

「ここは何と云う所です」

と聞いたら、長蔵さんは、

「ここ？　ここを知らないのかい」

と驚いた様子であつたが、笑いもせずすぐ教えてくれた。それで所の名は分つたがここにはわざと云わない。自分がこの繁華な町の名を知らなかつたのをよほど不思議に感じたと見えて、長蔵さんは、

「お前さん、いつたい生れはどこだい」

と聞き出した。考えると、今まで長蔵さんが自分の過去や経歴について、ついぞひと口も自分に聞いた事がなかつたのは、人を周旋する男の所為しよゐとしては、少しく無頓着むとんじやく過ぎるようにも思われたが、この男は全くそんな事に冷淡な性たちであつた事が後あとで分つた。この時の質問は全く自分の無知に驚いた結果から出た好奇心に過ぎなかつた。その証拠には自分が、

「東京です」

と答えたら、

「そうかい」

と云つたなり、あとは何にも聞かずに、自分を引つ張るようにして、ある横町を曲つ

た。

実を云うと自分は相当の地位を有ったものの子である。込み入った事情があつて、耐え切れずに生家を飛び出したようなものの、あながち親に対する不平や面当ばかりの無分別じゃない。何となく世間が厭になった結果として、わが生家まで面白くなかったと思つたら、もう親の顔も親類の顔も我慢にも見ていられなくなつていた。これは大変だと気がついて、根氣に心を取り直そうとしたが、遅かつた。踏み答えて見ようと百方に焦慮れば焦慮るほど厭になる。揚句の果は踏張の栓が一度にどつと抜けて、堪忍の陣立が総崩れとなつた。その晩にとうとう生家を飛び出してしまったのである。

事の起りを調べて見ると、中心には一人の少女がいる。そうしてその少女の傍にまた一人の少女がいる。この二人の少女の周囲に親がある。親類がある。世間が万遍なく取り捲いてゐる。ところが第一の少女が自分に対して丸くなつたり、四角になつたりする。すると何かの因縁で自分も丸くなつたり四角になつたりしなくっちゃならなくなる。しかし自分はそう丸くなつたり四角になつたりしては、第二の少女に対して済まない約束をもつて生れて来た人間である。自分は年の若い割には自分の立場をよく弁別えていた。が済まないと思えば思うほど丸くなつたり四角になつたりする。しまいには形

態ばかりじゃない組織まで変るようになって来た。それを第二の少女が恨めしうに見ている。親も親類も見ている。世間も見ている。自分は自分の心が伸びたり縮んだり、曲ったりくねったりするところを、どうかして隠そうと力めたが、何しろ第一の少女の方で少しもやめてくれないで、むやみに伸びて見せたり、縮んで見せたりするもんだから、隠し終<sup>お</sup>せる段じゃない。親にも親類にも目<sup>め</sup>つかってしまった。怪<sup>け</sup>しからんと云う事になった。怪しかるとは自分でも思っていないが、だんだん聞き糾<sup>ただ</sup>して見ると、怪しからん意味がだいぶ違つてゐる。そこでいろいろ弁解して見たがなかなか聞いてくれない。親の癖に自分の云う事をちつとも信用しないのが第一不都合だと思ふと同時に、第一の少女の傍<sup>そば</sup>にいたら、この先どうなるか分らない、ことに因<sup>よ</sup>ると實際弁解の出来ないような怪しからん事が出来<sup>しめつたい</sup>するかも知れないと考え出した。がどうしても離れる事が出来<sup>にちぢぢ</sup>ない。しかも第二の少女に対しては気の毒である、済まん事になったと云う念が日々烈<sup>はげ</sup>しくなる。——こんな具合で三方四方から、両立しない感情が攻め寄せて来て、五色の糸のこんがらかつたように、こつちを引くと、あつちの筋が詰る、あつちをゆるめるとこつちが釣れると云う按<sup>あんばい</sup>排で、乱れた頭はどうあつても解<sup>ほど</sup>けない。いろいろに工夫を積んで自分に愛<sup>あい</sup>想<sup>そ</sup>の尽きるほどひねくつて見たが、とうてい思うように纏<sup>まと</sup>まらないと云

う一点張に落ちて来た時に——やつと気がついた。つまり自分が苦しんでるんだから、自分で苦みを留めるよりほかに道はない訳だ。今までは自分で苦しみながら、自分以外の人を動かして、どうにか自分に都合のいいような解決があるだろうと、ひたすらに外のみを当<sup>あて</sup>にしていた。つまり往来で人と行き合った時、こっちは突ツ立ったまま、向うが泥濘<sup>ぬかるみ</sup>へ避<sup>よ</sup>けてくれる工面<sup>くめん</sup>ばかりしていたのだ。こっちが動かない今のままのこっちで、それで相手の方だけを思う通りに動かそうと云う出来ない相談を持ち懸<sup>か</sup>けていたのだ。自分が鏡の前に立ちながら、鏡に写る自分の影を気にしたって、どうなるもんじやない。世間の掟<sup>おきて</sup>という鏡が容易に動かせないとなると、自分の方で鏡の前を立ち去るのが何よりの上分別である。

そこで自分はこの入り組んだ関係の中から、自分だけをふいと煙<sup>けむ</sup>にしてしまおうと決心した。しかし本当に煙にするには自殺するよりほかに致し方がない。そこでたびたび自殺をしかけて見た。ところが仕掛けるたんびにどきんとしてやめてしまった。自殺はいくら稽古<sup>けいこ</sup>をしても上手にならないものだと云う事をようやく悟った。自殺が急に出来なければ自滅するのが好かろうとなった。しかし自分は前に云う通り相当の身分のある親を持って朝夕に事を欠かぬ身分であるから生家<sup>ういち</sup>にいては自滅しようがない。どうして

も逃亡かけおちが必要である。

逃亡かけおちをしてもこの關係を忘れる事は出来まいとも考えた。また忘れる事が出来るだろうとも考えた。要するに、して見なければ分らないと考えた。たとい煩悶はんもんが逃亡につき纏まとつて来るにしてもそれは自分の事である。あとに残った人は自分の逃亡のために助かるに違いないと考えた。のみならず逃亡をしたって、いつまでも逃亡かけおちている訳じゃない。急に自滅がしにくいから、まずその一着として逃亡ちて見るのである。だから逃亡ちて見てもやつぱり過去に追われて苦しいようなら、その時徐おもむろに自滅の計はかりごとを廻めぐらしても遅くはない。それでも駄目ときまればその時こそきつと自殺して見せる。——こう書くと自分はいかにも下らない人間になつてしまふが、事實を露骨に云うとこれだけの事に過ぎないんだから仕方がない。またこう書けばこそ下らなくなるが、その当時のぼんやりした意気込いきこみを、ぼんやりした意気込のままに叙したなら、これでも小説の主人公になる資格は十分あるんだろうと考える。

それでなくつても實際その当時の、二人の少女の有様やら、日ひごとに変る局面の轉換やら、自分の心配やら、煩悶やら、親の意見や親類の忠告やら、何やらかやらを、そつくりそのまま書き立てたら、だいぶん面白い続きものができるんだが、そんな筆もなし



時もないから、まあやめにして、せつかくの坑夫事件だけを話す事にする。

とにかくこう云う訳で自分はいよいよとなつて出奔しゅつぽんしたんだから、固もとより生きながら葬ほうごられる覚悟でもあり、また自ら葬みづかつてしまふ了簡りようけんでもあったが、さすがに親の名前や過去の歴史はいくら棄鉢すてばちになつても長蔵さんには話したくなかつた。長蔵さんばかりじゃない、すべての人間に話したくなかつた。すべての人間は愚か、自分にさえることができるなら語りたくないほど情ない心持でひよろひよろしていた。だから長蔵さんが人を周旋する男にも似合わず、自分の身元について一言も聞き糺たださなかつたのは、変と思ひながらも、内々嬉しかつた。本当を云うと、当時の自分はまだ嘘うそをつく事をよく練習していなかつたし、ごまかすと云う事は大変な悪事のように考えていたんだから、聞かれたら定めし困つたろうと思う。

そこで長蔵さんに尾いて、横町を曲つて行くと、一二丁行つたか行かないうちに町並まちばが急に疎まばらになつて、所々は田圃たんぼの片割れが細く透いて見える。表はあんなに繁昌はんしやうしても、繁昌は横幅だけであるなど気がついたら、また急に横町を曲らせられて、また賑にぎやかな所へ出された。その突当りが停車場ステーションであつた。汽車に乗らなくつては坑夫になる手続きが済まないんだと云う事をこの時ようやく知つた。実は鉾山の出張所でもこの町に

あつて、まずそこへ連れて行かれて、そこからまた役人が山へでも護送してくれるんだ  
ろうと思つていた。

そこで停車場へ這入る五六間手間になつてから、

「長蔵さん、汽車に乗るんですか」

と後から、呼び掛けながら聞いて見た。自分がこの男を長蔵さんと云つたのはこの時が  
始めてである。長蔵さんはちよつと振り返つたが、あかの他人から名前を呼ばれたのを  
不審がる様子もなく、すぐ、

「ああ、乗るんだよ」

と答えたなり、停車場に這入つた。

自分は停車場の入口に立つて考え出した。あの男はいつたい自分といつしよに汽車へ  
乗つて先方まで行く気なんだろうか、それにしては余り親切過ぎる。なんぼなんでも見  
ず知らずの自分にこう叮嚀な世話を焼くのはおかしい。ことによると彼奴は詐欺師かも知  
れない。自分は下らん事に今更のごとくはつと気がついて急に汽車へ乗るのが厭になつて  
来た。いっその事また停車場を飛び出そうかしらと思つて、今までプラット  
フォームの方を向いていた足を、入口の見当に向け易えた。しかしまだ歩き出すほどの

決心もつかなかったと見えて、茫然<sup>ぼうぜん</sup>として、停車場前の茶屋の赤い暖簾<sup>のれん</sup>を眺<sup>なが</sup>めていると、いきなり大きな声を出して遠くから呼びとめられた。自分はこの声を聞くと共に、その所有者は長蔵さんであつて、松原以来の声であると云う事を悟った。振り返ると、長蔵さんは遠方から顔だけ斜<sup>はす</sup>に出して、しきりにこちらを見て、首を豎<sup>たて</sup>に振っている。何でも身体<sup>からだ</sup>は便所の堀<sup>へい</sup>にかくれているらしい。せつかく呼ぶものだからと思つて、自分は長蔵さんの顔を目的<sup>めあて</sup>に歩いて行くと、

「御前さん、汽車へ乗る前にちよつと用を足したら善かろう」

と云う。自分はそれには及ばんから、一応辞退して見たが、なかなか承知しそうなものから、そこで長蔵さんと相並んで、きたない話だが、小便を垂れた。その時自分の考えはまた變つた。自分は身体よりほかに何にも持つていない。取られようにも瞞<sup>かた</sup>られようにも、名誉も財産もないんだから初手<sup>しよて</sup>から見込の立たない代物<sup>しろもの</sup>である。昨日<sup>きのう</sup>の自分と今日の自分とを混同して、長蔵さんを恐ろしがったのは、免職になりながら俸給<sup>ほうきゅう</sup>の差<sup>さ</sup>し押<sup>お</sup>を苦にするようなものであつた。長蔵さんは教育のある男ではあるまいが、自分の風体<sup>ふうてい</sup>を見て一目<sup>いちもく</sup>騙<sup>かた</sup>るべからずと看破するには教育も何も要<sup>い</sup>つたものではない。だからことによると、自分を坑夫に周旋して、あとから周旋料でも取るんだろうと思ひ出した。それ

ならそれで構わない。給料のうちの幾分かやれば済む事などと考えながら用を足した。――実は自分がこれだけの結論に到着するためには、わずかの時間内だがこれほどの手数と推論とを要したのである。このくらい骨を折ってすら、まだ長蔵さんのポン引きなる事をいわゆるポン引きなる純粹の意味において会得する事が出来なかつたのは、年が十九だつたからである。

年の若いのは実に損なもので、こんなにポン引きの近所までどうか、どうか、漕ぎつ  
けながら、それでも、もしや好意ずくの世話ずきから起つた親切じやあるまいかと思つて、飛んだ気兼をしたのはおかしかつた。

実は二人して、用を足して、のそのそ三等待合所の入口まで来た時、自分は比較的威儀を正して長蔵さんに、こんな事を云つたのである。

「あなたに、わざわざ先方<sup>さき</sup>まで連れて行つていただいては恐縮ですから、もうこれたくさんです」

すると長蔵さんは返事もせずに変な顔をして、黙つて自分の方を見ているから、これは礼の云いようがわるいのかとも思つて、

「いろいろ御世話になつてありがたいです。これから先はもう僕一人でやりますから、

どうか御構いなく」

と云つて、しきりに頭を下げた。すると、

「一人でやれるものかね」

と長蔵さんが云つた。この時だけは御前さんを省いたようである。

「なにやれます」

と答えたら、

「どうして」

と聞き返されたんで、少し面喰つたが、

「今貴方に伺つて置けば、先へ行つて貴方の名前を云つて、どうかしますから」

ともじもじ述べ立てると、

「御前さん、私の名前くらいで、すぐ坑夫になれると思つてるのは大間違いだよ。坑夫

なんて、そんなに容易になれるもんじゃないよ」

と跳つけられちまつた。仕方がないから

「でも御氣の毒ですから」

と言訳かたがた挨拶をすると、

「なに遠慮しないでもいい、先方<sup>さき</sup>まで送<sup>おく</sup>つてあげるから心配<sup>しんぱ</sup>しないがいい。――袖摩<sup>そでず</sup>り合<sup>あ</sup>うも何とかの因縁<sup>いんねん</sup>だ。ハハハハハ」

と笑<sup>わら</sup>つた。そこで自分<sup>おれ</sup>は最後<sup>さいご</sup>に、

「どうも済<sup>す</sup>みません」

と礼<sup>れい</sup>を述<sup>の</sup>べて置<sup>お</sup>いた。

それから二人<sup>ふたり</sup>でベンチへ隣<sup>とな</sup>り合<sup>あ</sup>ひに腰<sup>こし</sup>を掛<sup>か</sup>けていると、だんだん停車場<sup>ステーション</sup>へ人<sup>ひと</sup>が寄<sup>よ</sup>つてくる。大抵<sup>いた</sup>は田舎者<sup>いなかもの</sup>である。中には長蔵<sup>ちんざう</sup>さんのような袷天兼ど<sup>はてんけん</sup>てらを着<sup>き</sup>た上に、天枰棒<sup>てんびんぼう</sup>さえ荷<sup>かつ</sup>いだのがある。そうかと思うと光沢<sup>つや</sup>のある前掛<sup>まへかけ</sup>を締<sup>し</sup>めて、中折帽<sup>ちゅうせつぼう</sup>を妙<sup>てい</sup>に凹<sup>へこ</sup>ました江戸ッ子流<sup>あきゆうど</sup>の商人<sup>あきゆうど</sup>もある。その他の何<sup>なん</sup>やらかやらでベンチの四方<sup>しやうほう</sup>が足音<sup>あしおと</sup>と人声<sup>じんせい</sup>でざわついて来<sup>き</sup>た時に、切符口<sup>きふぐち</sup>の戸<sup>かど</sup>がかたりと開<sup>あ</sup>いた。待ち兼ね<sup>まちかね</sup>た連中<sup>れんちゆう</sup>は急<sup>いそ</sup>いで立ち上<sup>あ</sup>がつて、みんな鉄網<sup>かねあみ</sup>の前<sup>まえ</sup>へ集<sup>あ</sup>つてくる。この時長蔵<sup>ちんざう</sup>さんの態度<sup>たいど</sup>は落ちつき払<sup>はら</sup>つたものであつた。例<sup>たと</sup>の太刀<sup>たち</sup>のごとくそっくりかえつた「朝日<sup>あさひ</sup>」を厚<sup>くちびる</sup>い唇<sup>くちびる</sup>の間に啣<sup>くわ</sup>えながら、あの角張<sup>かどば</sup>つた顔<sup>かほ</sup>を三<sup>さん</sup>が二<sup>に</sup>ほど自分<sup>おれ</sup>の方<sup>かた</sup>へ向<sup>む</sup>けて、

「御前<sup>ごぜん</sup>さん、汽車賃<sup>きしうちん</sup>を持<sup>も</sup>つていなさるかい」

と聞<sup>き</sup>いた。また自分<sup>おれ</sup>の未熟<sup>みじく</sup>なところを發表<sup>はつぱつ</sup>するようだが、実<sup>じつ</sup>を云<sup>い</sup>うと汽車賃<sup>きしうちん</sup>の事<sup>こと</sup>は今<sup>いま</sup>が

今まで自分の考えには毫<sup>じょう</sup>も上<sup>の</sup>らなかつたのである。汽車に乗るんだなと思ひながら、いくら金を払うものか、また金を払う必要があるものか、とんと思ひ至<sup>いた</sup>らなかつたのは愚<sup>ぐ</sup>の至<sup>いた</sup>である。愚はどこまでも承認するがこの質問に出逢<sup>であ</sup>うまでは無<sup>た</sup>賃<sup>だ</sup>で乗れるかのごとき心持で平気でいたのは事実である。よく分らないけれども、何でも自分の腹の底には、長蔵さんにさえ食つついてさえおれば、どうかしてくれるんだらうと云う依頼心が妙<sup>ひそ</sup>に潜<sup>ひそ</sup>んでいたんだらう。ただし自分じゃけつしてそう思つていなかった。今でもそうだと自分の事ながら申しにくい。けれども、こう云う安心がないとすれば、いくら馬鹿だつて、十九だつて、停車場<sup>ステーション</sup>へ来て汽車賃の汽<sup>き</sup>の字も考えずにいられるもんじやない。その癖こんな依頼している長蔵さんに対して、もう御世話にならなくつても、好うございますの、これから一人で行きますのと平<sup>ひら</sup>に同行を断つたのは、どう云う了<sup>り</sup>簡<sup>よう</sup>だろう。自分はこう云う場合にたびたび出逢<sup>であ</sup>つてから、しまいには自分で一つの理論を立てた。――病氣に潜伏期があるごとく、吾<sup>われ</sup>々<sup>われ</sup>の思想や、感情にも潜伏期がある。この潜伏期の間には自分でその思想を有<sup>も</sup>ちながら、その感情に制せられながら、ちつとも自覺しない。またこの思想や感情が外界の因縁<sup>いんねん</sup>で意識の表面へ出て来る機会がないと、生涯<sup>しょうが</sup>その思想や感情の支配を受けながら、自分はけつしてそんな影響<sup>いっけい</sup>を蒙<sup>おぼ</sup>つた覺<sup>え</sup>がないと主

張する。その証拠はこの通りと、どしどし反対の行為言動をして見せる。がその行為言動が、傍<sup>はた</sup>から見ると矛盾になっている。自分でもはてなと思う事がある。はてなと気がつかないでもとんだ苦しみを受ける場合が起ってくる。自分が前に云った少女に苦しめられたのも、元はと云えば、やっぱりこの潜伏者を自覚し得なかったからである。この正体の知れないものが、少しも自分の心を冒<sup>おか</sup>さない先に、劇薬でも注射して、ことごとく殺し尽す事が出来たなら、人間幾多の矛盾や、世上幾多の不幸は起らずに済んだらうに。ところがそう思うように行かんののは、人にも自分にも氣の毒の至りである。

それで、自分が長蔵さんから「御前さん汽車賃を持つていなさるか」と問われた時に、自分ははっと思つて、少からず狼狽<sup>うろた</sup>えた。三十二銭のうちで饅頭<sup>まんじゅう</sup>の代と茶代を引くと何にもありやしない。汽車賃もない癖に、坑夫になろうなんて吞込<sup>のみこみが</sup>顔に受合<sup>は</sup>つたんだから、自分は少し図迂<sup>ずう</sup>迂迂<sup>ずう</sup>しい人間であつたんだと気がついたら、急に頬<sup>ほ</sup>邊<sup>べ</sup>が熱くなつた。その時分の事を考えると自分ながら可愛らしい。これが今だったら、たとい電車の中で借金の催促をされようとも、ただ困るだけで、けつして赤面はしない。ましてぼん引きの長蔵さんなどに対して、神聖なる羞恥<sup>しゆうち</sup>の血色を見せるなんてもつたない事は、夢にもやる氣遣<sup>きづか</sup>いはありやしない。



自分はどうか云うものか、長蔵さんに対して汽車賃はありますと答えたかった。しかし実際がないんだから嘘うそを吐く訳には行かない。嘘を吐きつ放はなにして済ませられるなら、思い切つて、嘘を吐く事にしようが、とにかく今切符を買うと云う間際まぎわで、吐けばすぐ露現ろけんしてしまうんだから始末がわるい。と云つて汽車賃はありませんと答えるのがいかにも苦痛である。どうも子供だから、しかも満更まんざらの子供でなくつて、少し大きくなりかけた、色氣のついた、煩悶はんもんをしている、つまらん常識があるような、ないような子供だから、なおなお不都合だった。そこで汽車賃はありますとも、ありませんとも云いにくかったもんだから、

「少しあります」

と答えた。それも響の物に応ずるごとく、停滞なく出ればよかったが、何しろもつたいたなくも頬辺を赤くしたあとで、はなはだ恐縮の態度で出したんだから、馬鹿である。

「少しつて、御前さん、いくら持つてるい」

と長蔵さんが聞き返した。長蔵さんは自分が頬辺を赤くしても、恐縮しても、まるで頓とんじ着やくしない。ただいくら持つてるか聞きたい様子であつた。ところがあいにく肝心かんじんの自分にはいくらあるか判然しない。何しろしめめて三十二銭のうち、饅頭まんじゅうを三皿食つて、茶代を

五錢やったんだから、残るところはたくさんじゃない。あつても無くつても同じくらいなものだ。

「ほんのわずかです。とても足りそうもないです」

と正直なところを云うと、

「足りないところは、私が<sup>わたし</sup>足して上げるから、構わない。何しろ有るだけ御出し」

と、思ったよりは平気である。自分はこの際一錢銅や二錢銅を勘定するのは、いかにも<sup>ていさい</sup>体裁がわるいと考えた上に、有るものを無いと隠すように取られては厭<sup>いや</sup>だから、懷<sup>ふしん</sup>から例の墓口<sup>がまぐち</sup>を取り出して、墓口ごと長蔵さんに渡した。この墓口は鰐<sup>わに</sup>の皮で拵<sup>しら</sup>えたすこぶる上等なもので、親父から貰う時も、これは高価な品であると云う講釈をとくと聴かされた贅<sup>ぜいたく</sup>沢物である。長蔵さんは墓口を受け取って、ちよつと眺<sup>なが</sup>めていたが、

「ふふん、安くないね」

と云ったなり中味も改めずに腹掛の隠しへ入れちまった。中味を改めないところはよかったが、

「じゃ、私が切符を買って来て上げるから、ちゃんとここに待っていないくつちや、いけない。はぐれると、坑夫になれないんだからね」

と念を押して、ベンチを離れて切符口の方へすたすた行ってしまった。見てみると人込の中へ這入ったなり振り返りもしないで切符を買う番のくるのを待っている。さつき松原の掛茶屋を出てから、今先方までの長蔵さんは始終自分の傍に食つついていて、たまに離れると便所からでも顔を出して呼ぶくらいであつたのに、墓口を受け取つて、切符を買う時はまるで自分を忘れてるように見受けられた。あんまり人が多くつて、こつちへ眼をつける暇がなかつたんだろう。これに反して自分は一生懸命に長蔵さんの後姿を見守つて、札を買う順番が一人一人に廻つて来るたんびに長蔵さんがだんだん切符口へ近づいて行くのを、遠くから妙な神経を起して眺めていた。墓口は立派だが中を開けられたら銅貨が出るばかりだ。開けて見て、何だこれっぱかりしか持っていないのかと長蔵さんが驚くに違ない。どうも気の毒である。いくら足し前をするんだろうなどと入らざる事を苦に病んでいると、やがて長蔵さんは平生の顔つきで歸つて来た。

「さあ、これが御前さんの分だ」

と云いながら赤い切符を一枚くれたぎりいくら不足だとも何とも云わない。きまりが悪かつたから、自分もただ

「ありがとう」

と受取ったぎり賃金の事は口へ出さなかった。墓口の事もそれなりにして置いた。長蔵さんの方でも墓口の事はそれつきり云わなかった。したがって墓口はついに長蔵さんにやった事になる。

それから、とうとう二人して汽車へ乗った。汽車の中では別にこれと云う出来事もなかった。ただ自分の隣りに腫物できものだらけの、腐爛ただれめ目の、痘痕あばたのある男が乗ったので、急に心持が悪くなって向う側へ席を移した。どうも当時の状態を今からよく考えて見るとよつぽどおかしい。生家うちを逃亡かけおちて、坑夫にまで、なり下る決心なんだから、大抵の事に辟易へきえきしそうもないもんだがやつぱり醜きたないものの傍そばへは寄りつきたくなかった。あの安排あんばいでは自殺の一日前でも、腐爛目の隣を逃げ出したに違ない。それなら万事きちようこう几帳面に段落をつけるかと思うと、そうでないから困る。第一長蔵さんや茶店のかみさんに逢あった時なんぞは平生の自分にも似ず、ぐうの音も出さずに心しんからおとなしくしていた。議論も主張も感慨きがいも何もあつたもんじゃありません。もつともこれはだいぶ餓ひもじい時であつたから、少しは差引いて勘定たてを立るのが至当だが、けつして空腹のためばかりとは思えない。どうも矛盾——また矛盾が出たから廃よそう。

自分は自分の生活中もつとも色彩の多い当時の冒険を暇さえあれば考え出して見る癖

がある。考え出すたびに、昔の自分の事だから遠慮なく厳密なる解剖の刀を揮<sup>ふる</sup>つて、縦<sup>たて</sup>横<sup>よこ</sup>十文字に自分の心緒<sup>しんしよ</sup>を切りさいなで見えるが、その結果はいつも千遍一律で、要するに分らないとなる。昔<sup>むか</sup>しだから忘れちまったんだなどと云つてはいけない。このくらい切実な経験は自分の生涯<sup>しやうがい</sup>中に二度とありやしない。二十<sup>はたち</sup>以下の無分別から出た無茶だから、その筋道が入り乱れて要領を得んだと評してはなおいけない。経験の当時こそ入り乱れて滅多<sup>めった</sup>やたらに盲動するが、その盲動に立ち至るまでの経過は、落着いた今日<sup>こんにち</sup>の頭腦の批判を待たなければとても分らないものだ。この鉤山行<sup>ゆき</sup>だって、昔の夢の今日だから、このくらい人に解るように書く事が出来る。色気がなくなつたから、あらいざらい書き立てる勇氣があると云うばかりじゃない。その時の自分を今の眼の前に引擦<sup>ひきず</sup>り出して、根掘り葉掘り研究する余裕がなければ、たといこれほどにだってとうてい書けるものじゃない。俗人はその時その場合に書いた経験が一番正しいと思うが、大間違である。刻下<sup>こっか</sup>の事情と云うものは、転瞬<sup>てんしゆん</sup>の客氣<sup>かっき</sup>に驅られて、とんでもない誤謬<sup>ごびやう</sup>を伝え勝ちのものである。自分の鉤山行などもその時そのままの心持を、日記にでも書いて置いたら、定めし乳臭い、氣取つた、偽りの多いものが出来上つたろう。とうてい、こうやつて人の前へ御覽下さいと出された義理じゃない。

自分が腐爛目の難を避けて、向う側に席を移すと、長蔵さんは一目ちよつと自分と腐爛目を見たなりで、やはり元の所へ腰を掛けたまま動かなかった。長蔵さんの神経が自分よりよほど剛健なものには少からず驚嘆した。のみならず、平氣な顔で腐爛目と話し出したに至つて、少しく愛想が尽きた。

「また山行きかね」

「ああまた一人連れて行くんだ」

「あれかい」

と腐爛目は自分の方を見た。長蔵さんはこの時何か返事をしかけたんだろうがふと自分と顔を見合せたものだから、そのまま厚い唇を閉じて横を向いてしまった。その顔について廻つて、腐爛目は、

「まただいぶん儲かるね」

と云つた。自分はこの言葉を聞くや否やたちまち窓の外へ顔を出した。そうして窓から唾液つばきをした。するとその唾液が汽車の風で自分の顔へ飛んで来た。何だか不愉快だった。前の腰掛で知らない男が二人弁じている。

「泥棒が這入るとするぜ」

「こそこそがかい」

「なに強盗がよ。それでもって、拔身ぬきみか何かで威嚇おどした時によ」

「うん、それで」

「それで、主人あるじが、泥棒だからってんで贋銭にせがねをやって帰したとするんだ」

「うんそれから」

「後あとで泥棒が贋銭と気がついて、あすこの亭主は贋銭使つかいだ贋銭使だって方々振れて歩くんつねこうだ。常公めえの前だが、どっちが罪が重いと思う」

「どっちたあ」

「その亭主と泥棒がよ」

「そうさなあ」

と相手は解決に苦しんでいる。自分は眠ねくなつたから、窓の所へ頭を持たしてうとうとした。

寝ると急に時間が無くなつちまう。だから時間の経過が苦痛になるものは寝るに限る。死んでもおそろく同じ事だろう。しかし死ぬのは、やさしいようでなかなか容易でない。まず凡人は死ぬ代りに睡眠で間に合せて置く方が軽便である。柔道をやる人が、

時々朋友ほうゆうに咽喉のどを締めて貰う事がある。夏の日永ひながのだるい時などは、絶息したまま五分も道場に死んでいて、それから活かつを入らせると、生れ代るような好い気分になる——ただし人の話だが。——自分は、もしや死につきりに死んじまやしないかと云う神経のために、ついぞこの荒療治あらりょうじを頼んだ事がない。睡眠はこれほどの効験もあるまいが、その代り生き戻り損そとにう危険も伴ともなっていないから、心配のあるもの、煩悶はんもんの多いもの、苦痛に堪たえぬもの、ことに自滅の一着として、生きながら坑夫になるものに取つては、至大なる自然たまたものの賚たまものである。その自然の賚が偶然にも今自分の頭の上に落ちて来た。ありがたいと礼を云う閑ひまもないうちに、うつとりとしちまって、生きている以上は是非其その経過を自覚しなければならぬ時間まるつぎを、丸潰しに潰していた。ところが眼めが覚さめた。後から考えて見たら、汽車の動いてる最中に寝込ねこんだもんだから、汽車の留つたために、眠りが調子を失つてどこかへ飛んで行つたのである。自分は眠っていると、時間の経過だけは忘れてゐるが、空間の運動には依然として反応を呈する能力があるようだ。だから本当に煩悶を忘れるためにはやはり本当に死ななくつては駄目だ。ただし煩悶がなくなつた時分には、また生き返りたくなるにきまつてゐるから、正直に理想を云うと、死んだり生きたり互違たがひちがひにするのが一番よろしい。——こんな事をかくと、何だか剽軽ひょうけいな冗談じやうだん



を云つてゐるようだが、けつしてそんな浮いた了見<sup>りようけん</sup>じゃない。本氣に真面目<sup>まじめ</sup>を話してゐるつもりである。その証拠にはこの理想はただ今過去を回想して、面白半分興に乗じて、好い加減につけ加えたんじゃない。實際汽車が留つて、不意に眼が覺めた時、この通りに出て来たのである。馬鹿氣<sup>ばかげ</sup>を感じだから滑稽<sup>こっけい</sup>のように思われるけれどもその時は正直にこんな馬鹿氣た感じが起つたんだから仕方がない。この感じが滑稽に近ければ近いほど、自分は当時の自分を可愛想<sup>かわいそう</sup>に思うのである。こんな常識をはずれた希望を、真面目<sup>まじめ</sup>に抱かねばならぬほど、その時の自分は情ない境遇<sup>なやみ</sup>におつたんだと云う事が判然するからである。

自分がふと眼を開けると、汽車はもう留つていた。汽車が留まつたなと云う考えよりも、自分は汽車に乗つていたんだなと云う考えが第一に起つた。起つたと思うが早い、長蔵さんがいるんだ、坑夫になるんだ、汽車賃がなかったんだ、生家<sup>うち</sup>を出奔<sup>しゅっぽん</sup>したんだ、どうしたんだ、こうしたんだとまるで十二三のたんだがむらむらと塊<sup>かた</sup>まつて、頭の底から一度に湧<sup>わ</sup>いて来た。その速い事と云つたら、言語<sup>ごんご</sup>に絶すると云おうか、電光石火と評しようか、実に恐ろしいくらいだった。ある人が、溺<sup>おぼ</sup>れかかったその刹那<sup>せつな</sup>に、自分の過去の一生を、細大漏<sup>さいだい</sup>らさずありありと、眼の前に見た事があると云う話をその後<sup>のち</sup>聞

いたが、自分のこの時の経験に因<sup>よ</sup>つて考えると、これはけつして嘘じやなかうと思う。要するにそのくらい早く、自分は自分の実世界における立場と境遇とを自覚したのである。自覚すると同時に、急に厭<sup>いや</sup>な心持になった。ただ厭では、とても形容が出来ないんだが、さればと云つて、別に叙述しようもない心持ちだからただの厭でとめて置く。自分と同じような心持ちを経験した人ならば、ただこれだけで、なるほどあれだなど、直勘<sup>すぐかん</sup>づくだろう。また経験した事がないならば、それこそ幸福だ、けつして知るに及ばない。

その内同じ車室に乗っていたものが二三人立ち上がる。外からも二三人這<sup>はい</sup>入つて来る。どこへ陣取ろうかと云う眼つきできよろきよろするのと、忘れものはないかと云う顔つきでうろろするのと、それから何の用もないのに姿勢を更<sup>か</sup>えて窓へ首を出したり、欠伸<sup>あくび</sup>をしたりするのと、が一度に合併して、すべて動揺の状態に世の中を崩<sup>くず</sup>し始めて来た、自分は自分の周囲のものが、ことごとく活動しかけるのを自覚していた。自覚すると共に、自分は普通の人間と違つて、みんなが活動する時分でさえ、他に釣<sup>ひ</sup>り込まれて気分が動いて来ないような仲間外<sup>はず</sup>れだと考えた。袖<sup>そで</sup>が触<sup>ふ</sup>れ違つて、膝<sup>ひざ</sup>を突き合せていながらも、魂だけはまるで縁も由緒<sup>ゆかり</sup>もない、他界から迷い込んだ幽霊のような気持で

あった。今までは、どうか、こうか、人並に調子を取つて来たのが汽車が留まるや否や、世間は急に陽気になつて上へ騰<sup>あが</sup>る。自分は急に陰気になつて下へ降<sup>さが</sup>る、とうてい交<sup>つき</sup>際はできないんだと思うと、背中と胸の厚さがしゅうと減つて、臓腑<sup>ぞうふ</sup>が薄<sup>うす</sup>つ片<sup>ぺら</sup>な一枚の紙のように圧<sup>お</sup>しつけられる。途端に魂だけが地面の下へ抜け出しちまった。まことに申訳のない、御恥ずかしい心持ちをふらつかせて、凹<sup>へこ</sup>んでいた。

ところへ長蔵さんが、立つて来て、

「御前さん、まだ眼が覚めないかね。ここから降りるんだよ」

と注意してくれた。それでようやくなるほど気がついて立ち上った。魂が地の底へ抜け出して行く途中でも、手足に血が通<sup>かよ</sup>つてゐるうちは、呼ぶと返つて来るからおかしなものだ。しかしこれがもう少し烈<sup>はげ</sup>しくなると、なかなか思うように魂が身体<sup>からだ</sup>に寄りついてくれない。その後台湾沖で難船した時などは、ほとんど魂に愛想<sup>あいそ</sup>を尽かされて、非常な難義をした事がある。何<sup>なん</sup>にでも上には上があるもんだ。これが行き留りだの、突き当りだのと思つて、安心してかかると、とんだ目に逢う。しかしこの時はこの心持が自分に取つてもっとも新しくて、しかもはなはだ苦<sup>にが</sup>い経験であつた。

長蔵さんのどてらの尻<sup>か</sup>を嗅<sup>か</sup>ぎながら改札場から表へ出ると、大きな宿<sup>しゆく</sup>の通りへ出た。

一本筋の通りだが存外広い、ばかりではない、心持の判然するほど真直である。自分は  
この広い往還おうかんの真中に立って遥はるか向うの宿外しゆくはすれを見下した。その時一種妙な心持になっ  
た。この心持ちも自分の生涯しょうがい中にあつて新らしいものであるから、ついでにここに書いて置く。自分は肺の底が抜けて魂が逃げ出しそうなところを、ようやく呼びとめて、多  
少人間らしい了簡りようかんになつて、宿の中へ顔を出したばかりであるから、魂が吸く息につれ  
て、やっと胎内に舞い戻つただけで、まだふわふわしている。少しも落ちついていな  
い。だからこの世にいても、この汽車から降りても、この停車場ステーションから出ても、またこの  
宿の真中に立つても、云わば魂がいよいよながら、義理に働いてくれたようなもので、  
けつして本気の沙汰さたで、自分の仕事として引き受けた専門の職責とは心得られなかつた  
くらい、鈍い意識の所有者であつた。そこで、ふらついている、氣の遠くなつている、  
すべてに興味を失つた、かなつば眼まなこを開いて見ると、今までは汽車の箱に詰め込まれ  
て、上下四方とも四角に仕切られていた限界が、はつと云う間まに、一本筋の往還を沿う  
て、十丁ばかり飛んで行つた。しかもその突当りに滴るほどの山が、自分の眼を遮りな  
がらも、邪魔にならぬ距離を有もつて、どろんとしたわが眸ひとみを翠みどりの裡うちに吸寄せている。――  
――そこで何んとなく今云つたような心持になつちまつたのである。

第一には大道砥のごとしと、成語にもなつてゐるくらいで、平たい真直な道は蟠まりの  
ない爽さわやかなものである。もつと分り安く云うと、眼を迷まじつかせない。心配せずにこつちへ  
御出おいでと誘うようにでき上つてゐるから、少しも遠慮や気兼きがねをする必要がない。ばかりじや  
ない。御出と云うから一本筋の後あとを喰くツついて行くと、どこまでも行ける。奇体な事に  
眼が横町へ曲りたくない。道が真直に続いていればいるほど、眼も真直に行かなくなつて  
は、窮屈でかつ不愉快である。一本の大道は眼の自由行動と平行して成り上つたものと  
自分は堅く信じてゐる。それから左右の家並いえなみを見ると、――これは瓦葺かわづみも藁葺わらづみもあるん  
だが――瓦葺だろうが、藁葺だろうが、そんな差別はない。遠くへ行けば行くほどしだ  
いしだいに屋根が低くなつて、何百軒とある家が、一本の針金で勾配こうはいを纏まとめられるため  
に向うのはずれからこつちまで突き通されてゐるように、行儀よく、斜はすに一筋を引つ張つ  
て、どこまでも進んでゐる。そうして進めば進むほど、地面に近寄つてくる。自分の  
立つてゐる左右の二階屋などは――宿屋のように覚えてゐるが――見上げるほどの高さ  
であるのに、宿外れの軒すかを透して見ると、指の股またに這入はいると思われくらい低い。その  
途中に暖簾のれんが風に動いていたり、腰障子こししょうじに大きな蛤はまぐりがかいてあつたりして、多少の變化  
は無論あるけれども、軒並のきなみだけを遠くまで追つ掛けて行くと、一里が半秒で眼の中に飛

び込んで来る。それほど明瞭である。

前に云った通り自分の魂は二日酔ふつかえいの体たらくで、どこまでもとろんとしていた。ところへ停車場ステーションを出るや否や断りなしにこの明瞭な——盲目めくらにさえ明瞭なこの景色けしきにばったりぶつかったのである。魂の方では驚かなくっちゃならない。また実際驚いた。驚いたには違いないが、今まであやふやに不精不精ふしようぶしように徘徊はいかいしていた惰性を一変して屹きととなるには、多少の時間がかかる。自分の前さきに云った一種妙な心持ちと云うのは、魂が寝返りを打たないさき、景色がいかに明瞭であるかと心づいたあと、——その際きわどい中間ちゅうかんに起った心持ちである。この景色はかように暢達のびのびして、かように明白で、今までの自分の情緒じょうしよとは、まるで似つかない、景氣のいいものであったが、自身の魂がおやと思つて、本氣にこの外界げかいに対しむかい出したが最後、いくら明かでも、いくら暢のんびりしていても、全く実世界の事実となつてしまふ。実世界の事実となるといかな御光ごこうでもありがた味が薄くなる。仕合せな事に、自分は自分の魂が、ある特殊の状態にいたため——明かな外界を明かなりと感受するほどの能力は持ちながら、これは実感であると自覺するほど作用が鋭くなかつたため——この真直な道、この真直な軒を、事実に等しい明かな夢と見たのである。この世でなければ見る事の出来ない明瞭な程度と、これに伴う爽涼はつきりした快感を

もって、他界の幻影まぼろしに接したと同様の心持になったのである。自分は大きな往来の真中に立っている。その往来はあくまでも長くつて、あくまでも一本筋に通っている。歩いて行けばその外はずれまで行かれる。たしかにこの宿しゆくを通り抜ける事はできる。左右の家は触れば触る事が出来る。二階へ上のぼれば上る事が出来る。できると云う事はちゃんと心得ていながらも、できると云う観念を全く遺失して、単に切実なる感能の印象だけを眸ひとみのなかに受けながら立っていた。

自分は学者でないから、こう云う心持は何と云うんだか分らない。残念な事に名前を知らないのてついでに長くかいてしまった。学問のある人から見たら、そんな事をと笑われるかも知れないが仕方がない。その後のちこれに似た心持は時々経験した事がある。しかしこの時ほど強く起った事はかつてない。だから、ひよつとすると何かの参考になりはすまいかと思つて、わざわざここに書いたのである。ただしこの心持は起るとたちまち消えてしまった。

見ると日はもう傾かたむきかけている。初夏しよかの日永ひながの頃だから、日差ひざしから判断して見ると、まだ四時過ぎ、おそらく五時にはなるまい。山に近いせいか、天気は思ったほどよくないが、現に日が出ていくくらいだから悪いとは云われない。自分は斜はすかけに、長い一筋

の町を照らす太陽を眺めた時、あれが西の方だと思った。東京を出て北へ北へと走ったつもりだが、汽車から降りて見ると、まるで方角がわからなくなっていた。この町を真直に町の通つてゐるなりに、下ると、突き当りが山で、その山は方角から推すと、やはり北であるから、自分と長蔵さんは相変らず、北の方へ行くんだと思った。

その山は距離から云うとだいぶんあるように思われた。高さもけつして低くはない。色は真蒼で、横から日の差す所だけが光るせいか、陰の方は蒼い底が黒ずんで見えた。もつともこれは日の加減と云うよりも杉檜の多いためかも知れない。ともかくも蓊鬱として、奥深い様子であつた。自分は傾きかけた太陽から、眼を移してこの蒼い山を眺めた時、あの山は一本立だろうか、または続きが奥の方にあるんだろうかと考えた。長蔵さんと並んで、だんだん山の方へ歩いて行くと、どうあつても、向うに見える山の奥のまたその奥が果しもなく続いていて、そうしてその山々はことごとく北へ北へと連なっているとしか思われなかつた。これは自分達が山の方へ歩いて行くけれど、ただ行くだけでなかなか麓へ足が届かないから、山の方で奥へ奥へと引き込んでいくような気がする結果とも云われるし。日がだんだん傾いて陰の方は蒼い山の上皮と、蒼い空の下層とが、双方で本分を忘れて、好い加減に他の領分を犯し合つてゐるんで、眺める自分の眼に



も、山と空の区劃くかくが判然しないものだから、山から空へ眼が移る時、つい山を離れたと云う意識を忘却して、やはり山の続きとして空を見るからだとも云われる。そうしてその空は大変広い。そうして際限なく北へ延びている。そうして自分と長蔵さんは北へ行くのである。

自分は昨夕ゆうべ東京を出て、千住の大橋まで来て、裕あわせの尻を端折はしよったなり、松原へかかって、茶店へ腰を掛けても、汽車へ乗っても、空脛からすねのままで押し通して来た。それでも暑いくらいであつた。ところがこの町へ這入はいってから何だか空脛では寒い氣持がする。寒いと云うよりも淋しいんだろう。長蔵さんと黙って足だけを動かしていると、まるで秋の中を通り抜けてるようである。そこで自分はまた空腹になつた。たびたび空腹になつた事ばかりを書くのはいかかわしい事で、かつこの際空腹になつては、どうも詩的でないが、致し方がない。實際自分は空腹になつた。家を出てから、ただ歩くだけで、人間の食うものを食わないから、たちまち空腹になつちまう。どんなに氣分がわるくつても、煩悶はんもんがあつても、魂が逃げ出しそうでも、腹だけは十分減るものである。いや、そう云うよりも、魂を落つけるためには飯を供えなくっちゃいけないと云い換えるのが適当かも知れない。品の悪い話だが、自分は長蔵さんと並んで往來の真中を歩きなが

ら、左右に眼をくばって、両側の飲食店を覗き込むようにして長い町を下って行った。ところがこの町には飲食店がだいぶんある。旅屋とか料理屋とか云う上等なものは駄目としても、自分と長蔵さんが這入ってしかるべきや・たい・ち・流の・が・あ・す・こ・に・も・こ・こ・に・も・見・える。しかし長蔵さんは毫も支度をしそうにない。最前の我多馬車の時のように「御前さん夕食を食うかね」とも聞いてくれない。その癖自分と同じように、きよろきよろ両側に眼を配って何だか発見したいような気色がありと見える。自分は今に長蔵さんが恰好な所を見つけて、晩食をしたために自分を連れ込む事と自信して、気を永く辛抱しながら、長い町を北へ北へと下って行った。

自分は空腹を自白したが、倒れるほどひどくは無かった。胃の中にはまだ先刻の饅頭が多少残ってるようにも感ぜられた。だから歩けば歩かれる。ただ汽車を下りるや否や減り込みそうな精神が、真直な往来の真中に抛り出されて、おやと眼を覚したら、山里の空気がひやりと、夕日の間から皮膚を冒して来たんで、心機一転の結果としてここに何か食って見たくなったのである。したがって食わなければ食わないでも済む。長蔵さん何か食わしてくれませんかと云うほど苦しくもなかった。しかし何だか口が淋しいと見えて、しきりに縄暖簾や、お煮メや、御中食所が気にかかる。相手の長蔵さんがま

た申し合せたように右左と覗き込むので、こっちはますます食意地が張ってくる。自分はこの長い町を通りながら、自分らに適當と思う程度の一膳めし屋をついに九軒まで勘定した。数えて九軒目に至ったら、さしもに長い宿はどうとうおしまいになり掛けて、もう一町も行けば宿外れへ出抜けそうである。はなはだ心細かった。時にふと右側を見ると、また酒めしと云う看板に逢着した。すると自分の心のうちにこれが最後だなど云う感じが起った。それがためか煤けた軒の腰障子に、肉太に認めた酒めし、御肴と云う文字がもつとも劇烈な印象をもつて自分の頭に映じて来た。その映じた文字がいまだに消えない。酒の字でも、めしの字でも、御肴の字でもあり見える。この様子では、いくら耄碌してもこの五字だけは、そっくりそのまま、紙の上に書く事が出来るだろう。

自分が最後の酒、めし、御肴をしみじみ見ていると、不思議な事に長蔵さんも一生懸命に腰障子の方に眼をつけている。自分はさすが頑強の長蔵さんも今度こそ食いに這入るに違なからうと思った。ところが這入らない。その代りぴたりと留った。見ると腰障子の奥の方では何だか赤いものが動いている。長蔵さんの顔色を窺うと、何でもこの赤いものを見詰めているらしい。この赤いものは無論人間である。が長蔵さんがなぜ立ち

留つてこの赤い人間を覗き込むのか、とんと自分には分らなかつた。人間には違ないが、ただ薄暗く赤いばかりで、顔つきなどは無論判然しやしない。がと思つて、自分も不審かたがた立ち留つてみると、やがて障子の奥から赤毛布が飛び出した。いくら山里でも五月の空に毛布は無用だろうと云う人があるかも知れないが、實際この男は赤毛布で身を堅めていた。その代り下には手織の単衣一枚だけしきや着ていないんだから、つまり見て見ると自分と大した相違はない事になる。もつとも単衣一枚で凄いでると云う事は、あとからの発見で、障子の影から飛び出した時にはただ赤いばかりであつた。

すると長蔵さんは、いきなり、この赤い男の側へつかつかやつて行つて、

「お前さん、働く気はないかね」

と云つた。自分が長蔵さんに捕まつた時に聞かされた、第一の質問はやはり「働く気はないかね」であつたから、自分はおやまた働かせる気かなと思つて、少からぬ興味の念に駆られながら二人を見物していた。その時この長蔵さんは、誰を見ても手頃な若い衆とさえ鑑定すれば、働く気はないかねと持ち掛ける男だと云う事を判然と覺つた。つまり長蔵さんは働かせる事を商売にするんで、けつして自分一人を非常な適任者と認めて、それで坑夫に推挙した訳ではなかつた。おおかたどこで、どんな人に、幾人逢おう

とも、版行で押したような口調で御前さん働く気はないかねを根気よく繰返し得る男なんだろう。考えると、よくこんな商売を厭きもせず、長の歲月としつきやられたものだ。長蔵さんだって、天性御前さん働く気はないかねに適した訳でもあるまい。やっぱり何かの事情やむを得ず御前さんを復習しているんだろう。こう思えば、まことに罪のない男である。要するに芸がないからほかの事は出来ないんだが、ほかの事が出来ないんだと意識して煩悶はんもんする気色けしきもなく、自分でなくっちゃ御前さんをやり得る人間は天下広しといえども二人と有るまいと云うほどの平気な顔で、やっている。

その当時自分にこれだけの長蔵観ちようぞうかんがあつたらだいぶ面白かつたろうが、何しろ魂に逃げだされ損なっている最中だったから、なかなかそんな余裕は出て来なかった。この長蔵観は当時の自分を他人と見倣みなして、若い時の回想を紙の上に写すただ今、始めて序じよの節せつに浮かんだのである。だからやっぱり紙の上だけで消えてなくなるんだろう。しかしその時その砌みぎりの長蔵観と比較して見るとだいぶ違つてようだ。――

自分は長蔵さんと赤毛布あかげつとの立談たちばなしを聞きながら、自分は長蔵さんから毫ちようも人格を認められていなかったと云う事を見出した。――もともと人格はこの際少せうしおかしい。いやしくも東京を出奔しゅつぽんして坑夫にまでなり下がるものが人格を云々うんぬんするのは変挺へんていな矛盾であ

る。それは自分も承知している。現に今筆を執つて人格と書き出したら、何となく馬鹿<sup>ばか</sup>氣<sup>げ</sup>でいて、思わず嘖<sup>ふ</sup>き出しそうになつたくらいである。自分の過去を顧<sup>かえり</sup>みて嘖<sup>ふ</sup>き出しそうになる今の身分を、昔と比<sup>くら</sup>べて見ると実に結構の至りであるが、その時はなかなか嘖<sup>ふ</sup>き出すどころの騒<sup>さわ</sup>ぎではなかつた。——長蔵さんは明かに自分の人格を認めていなか

た。  
と云うのは、彼れはこの酒、めし、御肴<sup>おんさかな</sup>の裏<sup>うち</sup>から飛び出した若い男を捕<sup>つら</sup>まえて、二世の自分であるごとく、全く同じ調子と、同じ態度と、同じ言語と、もつと立ち入つて云えば、同じ熱心の程度をもつて、同じく坑夫になれと勧誘<sup>かんすい</sup>している。それを自分はずだか少々怪<sup>け</sup>しからんように考えた。その意味を今から説明して見ると、ざつとこんな訳<sup>わけ</sup>なんだろう。——

坑夫は長蔵さんの云うごとくすこぶる結構な家業<sup>かぎよう</sup>だとは、常識を質に入れた当時の自分にももつともと思ひようがなかつた。まず牛から馬、馬から坑夫という位の順<sup>さじ</sup>だから、坑夫になるのは不名誉だ<sup>おもう</sup>と心得ていた。自慢にやならないと覺<sup>さと</sup>つていた。だから坑夫の候補者が自分ばかりと思<sup>おも</sup>のほか突然居酒屋の入口から赤毛布になつて、あらわれようと別段神経を悩<sup>なや</sup>ますほどの大事件じゃないくらいは分りきつてゐる。しかしこの赤毛

布の取扱方が全然自分と同様であると、同様であると云う点に不平があるよりも、自分は全然赤毛布と一般人間であると云う氣になっちまう。取扱方の同様なのを延<sup>ひ</sup>き伸ばして行くと、つまり取り扱われるものが同様だからと云う妙な結論に到着してくる。自分はふらふらとそこへ到着していたと見える。長蔵さんが働かないかと談判しているのは赤毛布で、赤毛布はすなわち自分である。何だか他人<sup>ひと</sup>が赤毛布を着て立つてるように思われぬ。自分の魂が、自分を置き去りにして、赤毛布の中に飛び込んで、そうして長蔵さんから坑夫になれと談じつけられている。そこで、どうも情<sup>なさけ</sup>なくなっちまった。自分が直接に長蔵さんと応対している間は、人格も何も忘れているんだが、自分が赤毛布になって、君儲<sup>もつ</sup>かるんだぜと説得されている体裁<sup>ていさい</sup>を、自分が傍<sup>わき</sup>へ立つて見た日には方<sup>かた</sup>なしである。自分ははたしてこんなものかと、少しく興<sup>き</sup>を醒<sup>さ</sup>まして赤毛布を、つらつら観察していた。

ところが不思議にもこの赤毛布がまた自分と同じような返事をする。被<sup>かぶ</sup>つてる赤毛布ばかりじゃない、心底<sup>しんぞこ</sup>から、この若い男は自分と同じ人間だった。そこで自分はつくづくつまらないと感じた。その上もう一つつまらない事が重なったのは、長蔵さんが、にくにくしいほど公平で、自分の方が赤毛布<sup>あかげつと</sup>よりも坑夫に適していると云うところを少

しも見せない。全く器械的にやっている。先口<sup>せんくち</sup>だから、もう少しこつちを鼻<sup>ひい</sup>にしたら好かろうと思うくらいであつた。——これで見ると人間の虚栄心はどこまでも抜けないものだ。窮して坑夫になるとか、ならないとか云う切齒<sup>せつば</sup>詰つた時でさえ自分はこれほどの虚栄心を有<sup>も</sup>っていた。泥棒に義理があつたり、乞食に礼式があるのも全くこの格なんだろう。——しかしこの虚栄心の方は、自分すなわち赤毛布であると云うことを自覺して、大<sup>おお</sup>につまらなくなつたよりも、よほどつまらなさ加減が少かつた。

自分が大につまらなくなつて、ぼんやり立っていると、二人<sup>ふたり</sup>の談判は見る間に片づいてしまつた。これは必ずしも長蔵さんがことほどさように上手だからと云う訳ではない。赤毛布の方がことほどさように馬鹿だつたからである。自分はこの男を一概に馬鹿と云うが、あながち、自分に比較して輕蔑<sup>けいべつ</sup>する氣じゃけつしてない。自分の当時は、長蔵さんの話をはいい聞く点において、すぐ坑夫になろうと承知する点において、その他いろいろの点において、全くこの若い男と同等すなわち馬鹿であつたのである。もし強<sup>し</sup>いて違ふところを詮議<sup>せんぎ</sup>したら赤毛布を被<sup>かぶ</sup>つてゐるとの緝<sup>かすり</sup>を着てゐるとの差違<sup>ちがひ</sup>くらいなものだろう。だから馬鹿と云うのは、自分と同じく氣の毒な人と云う意味で、馬鹿のうち

に少しぐらゐは同情の意を寓<sup>ぐう</sup>したつもりである。



で、馬鹿が二人長蔵さんに尾いていっしょに銅山まで引つ張られる事になった。しかるに自分が赤毛布と肩を並べて歩き出した時、ふと気がついて見ると、さっきのつまりない心持ちがもう消えていた。どうも人間の了見<sup>りようけん</sup>ほど出たり引つ込んだりするものはない。有るんだなと安心していると、すでにない。ないから大丈夫と思つてると、いや有る。有るようで、ないようでその正体はどこまで行つても捕まらない。その後<sup>のち</sup>さる温泉場で退屈だから、宿の本を借りて読んで見たらいろいろ下らない御経の文句が並べてあつたなかに、心は三世にわたつて不可得<sup>ふかどく</sup>なりとあつた。三世にわたるなんてえのは、大袈裟<sup>おおげさ</sup>な法螺<sup>ほら</sup>だろうが、不可得<sup>ふかどく</sup>と云うのは、こんな事を云うんじゃないかと思う。もつともある人が自分の話を聞いて、いやそれは念<sup>ねん</sup>と云うもので心<sup>こころ</sup>じやないと反対した事がある。自分はいずれでも御随意だから黙つていた。こんな議論は全く余計な事だが、なぜ云いたくなるかというと、世間には大變利口な人物でありながら、全く人間の心を解していないものがだいぶんある。心は固形体だから、去年も今年も虫さえ食わなければ大抵同じもんだろうくらいに考えているには弱らせられる。そうして、そう云う呑気<sup>のんき</sup>な料簡<sup>りょうけん</sup>で、人を自由に取り扱うの、教育するの、思うようにして見せるのと騒いでいるから驚いちまう。水だつて流れりや返つて来やしない。ぐずぐずしていりや蒸発し

ちまう。

とにかくこの際は、赤毛布と並んで歩き出した時、もう先刻さつきのつまらない考えが蒸発していたと云う事だけを記憶して置いて貰もらえばいい。——そうして吾われながら驚いたのは、どうも赤毛布あかげつとと並んで歩くのが愉快になつて来た。もつともこの男は茨城いばらきか何かの田舎いなかもので、鼻から逃げる妙な発音をする。芋いもの事を芋えもと訓じたのはこれからさきの逸話に属するが、歩き出したてから、あんまりありがたい音声ではなかった。その上顔が人並にできていなかった。この男に比べると角張かくばつた顎あごの、厚唇あつくちびるの長蔵さんなどは威風堂々たるものである。のみならず茨城の田舎を突つ走つたのみで、いまだかつて東京の地を踏んだことがない。そうして、赤い毛布けつとが妙に臭い。それにもかかわらず自分はこの山里で、銅山行きの味方を得たような心持ちがして嬉うれしかった。自分はどうせ捨てる身だけれども、一人で捨てるより道伴みちづれがあつて欲ほしい。一人で零落おちぶれるのは二人で零落れるのよりも淋しいものだ。そう明らさまに申しては失礼に当るが、自分はこの男について何一つ好いてるところはなかったけれども、ただいっしょに零落れてくれると云う点だけがありがたいのでそれがため大いに愉快を感じた。それで歩き出すや否や、少し話もし掛けて見たくらいに、近しい仲となつてしまった。これから推おして考えると、川で

死ぬ時は、きつと船頭の一人や二人を引き擦り込みたくなるに相違ない。もし死んでから地獄へでも行くような事があつたなら、人のいない地獄よりも、必ず鬼のいる地獄を択ぶだろう。

そう云う訳で、たちまち赤毛布が好きになつて、約一二町も歩いて来たら、また空腹を覚え出した。よく空腹を覚えるようだが、これは前段の続きでけつして新しい空腹ではない。順序を云うと、第一に精神が稀薄になつて、もつとも刻下感に乏しい時に汽車を下りたんで、次に真直な往来を真直に突き当りの山まで見下したもんだからようやく正氣づいたのは前申した通りである。それが機縁になつて、今度は食氣がついて、それから人格を認められていない事を認識して、はなはだつまらなくなつて、つまらなくなつたと思つたら坑夫の同類が出来て、少しく頽勢を挽回したと云うしだいになる。だに因つてまた空腹に立ち戻つたと説明したら善く呑み込めるだろう。さて空腹にはなつたが、最後の膳飯屋はもう通り越している。宿はすでに尽きかかった。行く手は暗い山道である。とうてい願は叶いそうもない。それに赤毛布は今食つたばかりの腹だから、勇ましくどんだん歩く。どうも、降参しちまつた。そこで思い切つて、最後の手段として長蔵さんに話しかけて見た。

「長蔵さん、これからあの山を越すんですか」

「あの取附とつつきの山かい。あれを越しちゃ大変だ。これから左へ切れるんさ」と云ったなりまたすたすた歩いて行く。どうも是非に及ばない。

「まだよつぽどあるんですか、僕は少し腹が減ったんだが」

と、とうとう空腹の由を自白した。すると長蔵さんは

「そうかい。芋でも食うべい」

と、云いながら、すぐさま、左側の芋屋へ飛び込んだ。よく約束したように、そこところに芋屋があったもんだ。これを大袈裟おおげさに云えば天佑てんゆうである。今でもこの時の上出来に行つた有様を回顧すると、おかしいばかりじゃない、嬉しい。もつとも東京の芋屋のよように奇麗きれいじゃなかった。ほとんど名状しがたいくらいに真黒になつた芋屋で、芋屋と云えば芋屋だが、芋専門じゃない。と云つて芋のほかは何を売つてゐるんだつたか、今は忘れちまつた。食う方に氣を取られ過ぎたせいかとも思う。

やがて長蔵さんは両手に芋のを載せて、真黒な家うちから、のそりと出て来た。入れ物がなないもんだから、両手を前へ出して、

「さあ、食つた」

と云う。自分は眼前に芋を突きつけられながら、ただ

「ありがとう」

と礼を述べて、芋を眺めていた。どの芋にしようかと考えた訳ではない。そんな選択を許すような芋ではなかった。赤くつて、黒くつて、瘡やせていて、湿しめっぽそうで、それで所々皮が剥はげて、剥げた中から緑青を吹いたような味みが出ている。どれにぶつかったって大同小異である。そんなら一目惨澹いちもくさんたんたるこの芋の光景に辟易へきえきして、手を出さなかったかと云うと、そうでもない。自分の胃の状況から察すると、芋中の、いもちゅうとも云わるべきこの御薩おさつを快よく賞翫しょうがんする食欲は十分有ったように思う。しかし「さあ、食った」と突きつけられた時は、何だかおびえたような気分で、おいきたと手を出し損そくなつた。これはおおかた「さあ、食った」の云い方が悪かつたんだろう。

自分が芋を取らないのを見て、長蔵さんは、少々もどかしいと云う眼つきで、再び

「さあ」

と、例の顎あごで芋を指さしながら、前へ出した手顎てくびを、食えと云う相図にちよつと動かしただ。よく考えて見ると、両手が芋で塞ふさってるんで、自分がどうかしてやらないと、長蔵さんは、いくら芋が食いたくても、口へ持つて行く事ができないんであった。じれたの

ももつともである。そこで自分はようやく気がついて、二の腕で、変な曲線を描いて、右の手を芋まで持つて行こうとすると、持つて行く途中で、芋の方が一本ころころと往来の中へ落ちた。これはすぐさま赤毛布が拾った。拾ったと思ったら、

「この芋は好芋だ。おれが貰おう」

と云った。それでこの男は芋を芋と発音すると云う事が分った。

自分はこの時長蔵さんから、最初に三本、あとから一本締て五本、前後二回に受取つたと記憶している。そうしてそれを懐かしげに食いながら、いよいよ宿外れまで来るとまた一事件起った。

宿の外れには橋がある。橋の下は谷川で、青い水が流れている。自分はもう町が尽きるんだなとは思いいながら、つい芋に心を奪われて、橋の上へ乗つかかるまでは川があるとも気がつかなかった。ところが急に水の音がするんで、おやと思うと橋へ出ている。川がある。水が流れている。——何だか馬鹿気た話だが、事実にもっとも近い叙述をやるうとすると、まあ、こう書くのが一番適切だろう、こう書いて置く。けっして小説家の弄ぶような法螺七分の形容ではない。これが形容でないとするとその時の自分がいかに芋を旨がったのかがおのずから分明になる。さて水音に驚いて、欄干から下を見る

と、音のするのはもつともで、川の中に大きな石がだいぶんある。そうしてその形状がいかにも不作法にでき上って、あたかも水の通り道の邪魔になるように寝たり、突っ立ったりしている。それへ水がやけにぶつかる。しかもその水には勾配がついている。山から落ちた勢いをなし崩しに持ち越して、追っ懸けられるように跳つて来る。だから川と云うようなものの、実は幅の広い瀑を月賦に引き延ばしたくらいなものである。したがって水の少ない割には大変烈しい。鼻っ端の強い江戸ッ子のようにむやみやたらに突っかかって来る。そうして白い泡を噴いたり、青い飴のようになったり、曲ったり、くねったりして下へ流れて行く。どうも非常にやかましい。時に日はだんだん暮れてくる。仰向いて見たが、日向はどこにも見えない。ただ日の落ちた方角がぼうつと明るくなって、その明かるい空を背負ってる山だけが目立って蒼黒くなって来た。時は五月だけれども寒いもんだ。この水音だけでも夏とは思われない。まして入日を背中から浴びて、正面は陰になった山の色と来たら、——ありや全体何と云う色だろう。ただ形容するだけなら紫でも黒でも蒼でも構わないんだが、あの色の気持を書こうとすると駄目だ。何でもあの山が、今に動き出して、自分の頭の上へ来て、どっと圧つ被さるんじゃないかと感じた。それで寒いんだろう。実際今から一時間か二時間のうちには、自

分の左右前後四方八方ごとく、あの山のような気味のわるい色になって、自分も長蔵さんも茨城県も、全く世界一色の内に裹まれてしまふに違ないと云う事を、それとはなく意識して、一二時間後に起る全体の色を、一二時間前に、入日の方の局部の色として認めたから、局部から全体を喰かされて、今にあの山の色が広がるんだなど、どつかで虫が知らせたために、山の方が動き出して頭の上へ圧つ被さるんじやあるまいかと云う気を起したんだなど——自分は今机の前で解剖して見た。閑があるとかく余計な事がしたくなって困る。その時はただ寒いばかりであつた。傍にいる茨城県の毛布が羨ましくなつて来たくらいであつた。

すると橋の向うから——向たつて突き当りが山で、左右が林だから、人家なんぞは一軒もありやしない。——實際自分はこう突然人家が尽きてしまおうとは、自分が自分の足で橋板を踏むまでも思いも寄らなかつたのである。——その淋しい山の方から、小僧が一人やつて来た。年は十三四くらいで、冷飯草履を穿いている。顔は始めのうちはよく分らなかつたが、何しろ薄暗い林の中を、少し明るく通り抜けてる石ころ路を、たった一人してこつちへひよこひよこ歩いて来る。どこから、どうして現れたんだか分らない。木下闇の一本路が一二丁先で、ぐるりと廻り込んで、先が見えないから、不意に姿



を出したり、隠したりするような仕掛<sup>しかけ</sup>にできてるのかも知れないが、何しろ時が時、場所が場所だから、ちよつと驚いた。自分は四本目の芋<sup>いも</sup>を口へ宛<sup>あて</sup>がつたなり、顎<sup>あご</sup>を動かす事を忘れて、この小僧をしばらくの間眺めていた。もつともしばらくと云つたつて、わずか二十秒くらいなものである。芋はそれからすぐに食い始めたに違いない。

小僧の方では、自分らを見て、驚いたか驚かないか、その辺はしかと確められないが、何しろ遠慮なく近づいて来た。五六間のこつちから見ると頭の丸い、顔の丸い、鼻の丸い、いずれも丸く出来上つた小僧である。品質から云うと赤毛布<sup>あかげつと</sup>よりもずっと上製である。自分らが三人並んで橋向うの小路<sup>こみち</sup>を塞<sup>ふさ</sup>いでいるのを、とんと苦にならない様子で通り抜けようとする。すこぶる平氣な態度であつた。すると長蔵さんが、また、

「おい、小僧さん」

と呼び留めた。小僧は臆<sup>おく</sup>した氣色<sup>けしき</sup>もなく

「なんだ」

と答えた。ぴたりと踏み留<sup>とど</sup>まつた。その度胸には自分も少々驚いた。さすがこの日暮に山から一人で降りて来るがものはある。自分などがこの小僧の年輩の頃は夜青山の墓地を抜けるのがいささか苦になったものだ。なかなかえらいと感心していると、長蔵さん

は、

「芋いもを食くわないかね」

と云いながら、食い残しを、氣前よく、二本、小僧の鼻はなの前さきに出した。すると小僧はたちまち二本とも引ったくるように受け取って、ありがとうとも何とも云わず、すぐその一本を食い始めた。この手っ取り早い行動を熟視した自分は、なるほど山から一人で下りてくるだけあつて自分とは少々訳が違ふなど、また感心しちまつた。それとも知らぬ小僧は無我無心に芋を食っている。しかも頬張ほおばった奴やつを、唾液つばきも交ぜまずに、むやみに呑のみ下くだすので、咽喉のどが、ぐいぐいと鳴るように思われた。もう少し落ちついて食う方が楽だろうと心配するにもかかわらず、当人は、傍はたで見るほど苦しくはないと云わんばかりにぐいぐい食う。芋だから無論堅いもんじやない。いくら鵜呑うのみにしたって咽喉に傷のできつこはあるまいが、その代り咽喉がいつぱいに塞ふさがつて、芋が食道を通り越すまでは呼吸いきの詰る恐れがある。それを小僧はいつこう苦にしない。今咽喉がぐいと動いたかと思ふと、またぐいと動く。後の芋あとが、前の芋さきを追おつ懸かけてぐいぐい胃の腑ふに落ち込んで行くようだ。二本の芋は、随分大きな奴だつたが、これがためたちまち見る間まに無くなつてしまつた。そうして、小僧はついに何らの異状もなかつた。自分ら三人は何にも

云わずに、三方から、この小僧の芋を食うところを見ていたが、三人共、食つてしまふまで、一句も言葉を交<sup>か</sup>わさなかつた。自分は腹の中<sup>うち</sup>で少しはおかしいと思つた。しかし何となく憐れだつた。これは単に同情の念ばかりではない。自分が空腹になつて、長蔵さんに芋をねだつたのは、つい、今しがたで、餓<sup>ひも</sup>じい記憶は氣の毒なほど近くにあるのに、この小僧の食い方は、自分より二三層倍餓<sup>ひも</sup>じそうに見えたからである。そこへ持つて来て、長蔵さんが、

「旨<sup>う</sup>まかつたか」

と聞いた。自分は芋へ手を出さない先からありがとうと礼を述べたくらいだから、食つたあとの小僧は無論何とか云うだろうと思つていたら、小僧はあやにく何とも云わな<sup>い</sup>。黙つて立つている。そうして暮れかかる山の方を見た。後から分つたがこの小僧は全く野生で、まるで礼を云う事を知らないんだつた。それが分つてからはさほどにも思わなかつたが、この時は何だ顔に似合<sup>ふ</sup>わな<sup>い</sup>無愛嬌な奴だなど思つた。しかしその丸い顔を半分傾<sup>かたむ</sup>けて、高い山の黒ずんで行く天<sup>てん</sup>辺を妙に眺<sup>なが</sup>めた時は、また可愛<sup>かわい</sup>想<sup>そう</sup>になつた。それからまた少し物騒になつた。なぜ物騒になつたんだかはちよつと疑問である。小さい小僧と、高い山と、夕暮と山の宿<sup>しゆく</sup>とが、何か深い因縁<sup>いんねん</sup>で互に持ち合つてるのかも知れ

ない。詩だの文章だのと云うものは、あんまり読んだ事がないが、おそろくこんな因縁に勿体<sup>もったい</sup>をつけて書くもんじやないかしら。そうすると妙な所で詩を拾ったり、文章にぶつかったりするもんだ。自分はこの永年<sup>ながねん</sup>方々を流浪<sup>るろう</sup>してあるいて、折々こんな因縁に出っ食わして我ながら変に感じた事が時々ある。――しかしそれも落ちついて考えると、大概解けるに違ない。この小僧なんかやつぱり子供の時に聞いた、山から小僧が飛んで来たが化け損<sup>ば</sup>な<sup>そく</sup>ったところくらいだろう。それ以上は余計な事だから考えずに置く。何しろ小僧は妙な顔をして、黒い山の天辺<sup>てっぺん</sup>を眺めていた。すると長蔵さんがまた聞き出した。

「御前、どこへ行くかね」

小僧はたちまち黒い山から眼を離して、

「どこへも行きやあしねえ」

と答えた。顔に似合わずすこぶる無愛想<sup>ぶあいそう</sup>である。長蔵さんは平気なもんで、

「じゃどこへ帰るかね」

と、聞き直した。小僧も平気なもんで、

「どこへも帰りやしねえ」

と云つてゐる。自分はこの問答を聞きながら、ますます物騒な感じがした。この小僧は宿無に違ないんだが、こんなに小さい、こんなに淋しい、そうして、こんなに度胸の据つた宿無を、今までかつて想像した事がないものだから、宿無とは知りながら、ただの宿無に附属する憐れとか気の毒とかの念慮よりも、物騒の方が自然勢力を得たしだいである。もつとも長蔵さんにはそんな感じは少しも起らなかったらしい。長蔵さんは、この小僧が宿無か宿無でないかを突き留めさえすれば、それでたくさんだったんだろう。どこへも行かない、またどこへも帰らない小僧に向つて、

「じゃ、おいらといつしよにおいで。御金を儲けさしてやるから」

と云うと、小僧は考えもせず、すぐ、

「うん」

と承知した。赤毛布あかげつとと云い、小僧と云い、実に面白いように早く話が纏まとまつてしまふには驚いた。人間もこのくらい簡単にできていたら、御互に世話はなからう。しかしそう云う自分がこの赤毛布にもこの小僧にも遜ゆずらないもつとも世話のかからない一人であったんだから妙なもんだ。自分はこの小僧の安受合やすうけあいを見て、少からず驚くと共に、天下には自分のように右へでも左へでも誘われしだい、好い加減に、ふわつきながら、流れて

行くものがだいぶんあるんだと云う事に気がついた。東京にいるときは、目眩めまぐるしいほど人が動いていても、動きながら、みんな根ねが生えてるんで、たまたま根が抜けて動き出したのは、天下広しといえども、自分だけであろくらいで、千住から尻はしよを端折はしよつて歩き出した。だから心細さも人一倍であつたが、この宿しゆくで、はからずも赤毛布あかげつとを手に入れた。赤毛布を手に入れてから、二十分と立たないうちにまたこの小僧せうそうを手に入れた。そうして二人とも自分よりは遙はるかに根が抜けている。こう続々同志が出来てくると、行く先は山だろうが、河だろうが、あまり苦にはならない。自分は幸か不幸か、中以上の家庭に生れて、昨日きのうの午後九時までは申し分のない坊ちゃんとして生活せいかつしていた。煩悶はんもんも坊ちゃんとしての煩悶であつたのは勿論もちろんだが、煩悶はんもんの極試きよくみたこの駆落かけおちも、やつぱり坊ちゃんとしての駆落であつた。さればこそ、この駆落に対して、不相当にもつたいぶつた意味をつけて、ありがたがらないまでも、一生の大事件のように考えていた。生死しやうじの分れ路のように考えていた。と云うものは坊ちゃんの眼で見渡した世の中には、駆落をしたものは一人もない。——たまにあれば新聞にあるばかりである。ところが新聞では駆落が平面になつて、一枚の紙に浮いて出るだけで、云わばあぶり出しの駆落だから、食べたって身にはならない。あたかも別世界から、電話がかかったようなもので、は

あ、はあ、と聞いている分の事である。だから本当の意味で切実な駆落をするのは自分だけだと云うありがたみがつけ加わってくる。もっとも自分はただ煩悶して、ただ駆落をしたままで、詩とか美文とか云うものを、あんまり読んだ事がないから、自分の境遇の苦しさ悲しさを一部の小説と見立てて、それから自分でこの小説の中を縦横に飛び廻つて、大いに苦しがつたりまた大いに悲しがつたりして、そうして同時に自分の惨状を局外から自分と観察して、どうも詩的だなどと感心するほどなませた考えは少しもなかった。自分が自分の駆落に不相当なありがたみをつけたと云うのは、自分の不経験からして、さほど大袈裟に考えないでも済む事を、さも仰山に買い被つて、独りでどぎまぎしていた事実を指すのである。しかるにこのどぎまぎが赤毛布に逢い、小僧に逢つて、両人の平然たる態度を見ると共に、いつの間にやら薄らいだのは、やっぱり経験の賜である。白状すると当時の赤毛布でも当時の小僧でも、当時の自分よりよっぽど偉かったようだ。

こう手もなく赤毛布がかかる。小僧がかかる。そう云う自分も、たわいもなく攻め落された事実を綜合して考えて見ると、なるほど長蔵さんの商売も、満更待ち草臥の骨折損になる訳でもなかった。坑夫になれますよ、はあ、なれますか、じやなりましょうと

二つ返事で承知する馬鹿は、天下広しといえども、尻端折で夜逃をした自分くらいと思っていた。したがって長蔵さんのような気楽な商売は日本にたった一人あればたくさんで、しかもその一人が、まぐれ当りに自分に廻り合せると云う運勢をもつて生れて来なくっちゃ、とても商売にならないはずだ。だから大川端で眼の下三尺の鰹を釣るよりもよつぽどの根気仕事だと、始めから腰を据えてかかるのが当然なんだが、長蔵さんとはんとそんな自覚は無用だと云わぬばかりの顔をして、これが世間もつとも普通の商売であると社会から公認されたような態度で、わるびれずに往来の男を捉まえる。するとその捉まえられた男が、不思議な事に、一も二もなく、すぐにうんと云う。何となくこれが世間もつとも普通の商売じゃあるまいかと疑念を起すように成功する。これほど成功する商売なら、日本に一人じゃとても間に合わない、幾人あつても差支ないと云う気になる。——当人は無論そう思つてゐるだろう。自分もそう思つた。

この呑気な長蔵さんと、さらに呑気な小僧に赤毛布と、それから見様見真似で、大いに呑気になりかけた自分と、都合四人で橋向うの小路を左へ切れた。これから川に沿つて登りになるんだから、気をつけるが好いと云う注意を受けた。自分は今芋を食つたばかりだから、もう空腹じゃない。足は昨夕から歩き続けで草臥れてはいるが、あるけば



まだ歩ける。そこで注意の通り、なるべく気をつけて、長蔵さんと赤毛布の後を跟あどけて行みちった。路みちがあまり広くないので四人は一行いちぎょうに並べない。だから後を跟ける事にした。小僧は小さいからこれも一足おく後れて、自分と摺すれ々くらしいになって食くつついてくる。

自分は腹が重いのと、足が重いのとの両方で、口を利きくのが厭いやになった。長蔵さんも橋を渡ってから以後とんと御前さんを使わなくなった。赤毛布はさっき一膳飯屋の前で談判をした時から、余り多弁ではなかったが、どう云うものかここに至いたつてますます無口となつちまった。小僧の無口はさらにはなはだしかった。穿はいている冷飯草履ひやめしぞうりがぴちぴち鳴るばかりである。

こう、みんな黙もくつてしまうと、山路は静かなものである。ことに夜だからなお淋さびしい。夜と云つたつて、まだ日が落ちたばかりだから、歩いてる道だけではどうか、こうか分る。左手を落ちて行く水が、気のせいはつきりか、少しづつ光ひかりつて見える。もともときらきら光るんじゃない。なんだか、どす黒く動く所が光るように見えるだけだ。岩にあたつて碎ける所は比較的判然はつきりと白くなっている。そうしてその声がさあさあと絶え間なくする。なかなかやかましい。それでなかなか淋しい。

その中細うちい道が少しづつ、上りのぼりになるような氣持がしだした。上りだけならこのくら

いな事はそう骨は折れないんだが、路が何だか凸凹<sup>でこぼこ</sup>する。岩の根が川の底から続いて来て、急に地面の上へ出たり、引っ込んだりするんだらう。この凸凹に下駄<sup>げた</sup>を突っ掛ける。烈<sup>はげ</sup>しいときは内臓が飛び上がるようになる。だいぶ難義<sup>なんぎ</sup>になつて来た。長蔵さんと赤毛布は山路に馴<sup>な</sup>れていると見えて、よくも見えない木下闇<sup>こしたやみ</sup>を、すたすた調子よくあるいて行く。これは仕方がないが、小僧が——この小僧は實際物騒である。冷飯草履をぴしゃぴしゃ云わして、暗い凸凹を平氣に飛び越して行く。しかも全く無言である。昼間ならさほどにも思わないんだが、この際だから、薄暗い中でぴしゃりぴしゃりと草履の尻の鳴るのが氣になる。何だか蝙蝠<sup>こうもり</sup>といっしよに歩いてるようだ。

そのうち路がだんだん登りになる。川はいつしか遠くなる。呼吸<sup>いき</sup>が切れる。凸凹はますます烈<sup>はげ</sup>しくなる。耳ががぁんと鳴つて来た。これが駆落<sup>かけおち</sup>でなくつて、遠足なら、よほど前から、何とか文句をならべるんだが、根が自殺<sup>しそこな</sup>の仕損<sup>しそこな</sup>いから起つた自滅の第一着なんだから、苦しくつても、辛<sup>つら</sup>くつても、誰に難題を持ち掛ける訳にも行かない。相手は誰だと云えば、自分よりほかに誰もいやしない。よいいたつて、こだわるだけの勇氣はない。その上先方<sup>さき</sup>は相手になつてくれないほど平氣である。すたすた歩いて行く。口さえ利<sup>き</sup>かない。まるで取附端<sup>とつきは</sup>がない。やむを得ず呼吸<sup>いき</sup>を切らして、耳をがぁんと鳴らし

て、黙あどつて後しんびようから神妙に尾ついて行く。神妙と云う字は子供の時から覚えていたんだが、神妙の意味を悟ったのはこの時が始めてである。もつともこれが悟り始めの悟りじまいだと笑い話にもなるが、一度悟り出したら、その悟りがだいぶ長い事続いて、ついに鉱山の中で絶高頂に達してしまった。神妙の極に達すると、出るべき涙さえ遠慮して出ないようになる。涙がこぼれるほどだと譬たとえに云うが、涙が出るくらいなら安心なものだ。涙が出るうちは笑う事も出来るにきまつてゐる。

不思議な事にこれほど神妙にあてられたものが、今はけろりとして、一切いっさい神妙氣を出さないのみか、人からは横着者のように思われている。その時御世話になつた長蔵さんから見たら、定めし増長した野郎だと思ふ事だろう。がまた今の朋友ほうゆうから評すると、昔は氣の毒だったと云つてくれるかも知れない。増長したにしても氣の毒だったにしても構わない。昔は神妙で今は横着なのが天然自然の状態である。人間はこうできてゐるんだから致し方がない。夏になつても冬の心を忘れずに、ぶるぶるふるふる悸ふるえていろつたつて出来ない相談である。病氣で熱の出た時、牛肉を食わなかつたから、もう生涯しやうがいロースの鍋なべへ箸はしを着けちゃならんぞと云う命令はどんな御大名だつて無理だ。咽喉のどもと元過ぐれば熱さを忘れると云つて、よく、忘れては怪けしからんように持ち掛けてくるが、あれは忘れる方

が当り前で、忘れない方が嘘である。こう云うと詭弁のように聞えるが、詭弁でもなんでもない。正直正銘のところを云うのである。いったい人間は、自分を四角張った不変体のように思い込み過ぎて困るように思う。周囲の状況なんて事を眼中に置かないで、平押に他人を圧しつけたがる事がだいぶんある。他人なら理窟も立つが、自分で自分をきゅきゅ云う目に逢わせて嬉しがつてるのは聞えないようだ。そう一本調子にしようとする、立体世界を逃げて、平面国へでも行かなければならない始末が出来てくる。むやみに他人の不信とか不義とか変心とかを咎めて、万事万端向うがわるいように噪ぎ立てるのは、みんな平面国に籍を置いて、活版に印刷した心を睨んで、旗を揚げる人達である。御嬢さん、坊っちゃん、学者、世間見ず、御大名、にはこんなのが多くて、話が分り悪くって、困るもんだ。自分もあの時駆落をせずに、可愛らしい坊ちゃんとしておとなしく成人したなら、——自分の心の始終動いているのも知らずに、動かないもんだ、変らないもんだ、変っちゃ大変だ、罪惡だなどよくよ思つて、年を取つたら——ただ学問をして、月給をもらつて、平和な家庭と、尋常な友達に満足して、内省の工夫を必要と感ずるに至らなかつたら、また内省ができるほどの心機転換の活作用に見参しなかつたならば——あらゆる苦痛と、あらゆる窮迫と、あらゆる流転と、あらゆる漂

泊<sup>はく</sup>と、困憊<sup>こんばい</sup>と、懊惱<sup>おうのう</sup>と、得喪<sup>とくそう</sup>と、利害とより得たこの経験と、最後にこの経験をもつとも公明に解剖して、解剖したる一々を、一々に批判し去る能力がなかったなら——ありがたい事に自分はこの至大なる寶<sup>たかもつ</sup>を有<sup>も</sup>っている、——すべてこれらがなかったならば、自分はこんな思い切った事を云やしない。いくら思い切った事を云ったって自慢にやならない。ただこの通りだからこの通りだと云うまでである。その代り昔<sup>しんびよう</sup>し神妙なものが、今横着になるくらいだから、今の横着がいつ何時<sup>なんじき</sup>また神妙にならんとは限らない。——抜けそうな足を棒のように立てて聞くと、がんと鳴ってる耳の中へ、遠くからさあさあ水音が這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>ってくる。自分はますます神妙になった。

この状態でだいぶ来た。何里<sup>けんとう</sup>だか見当<sup>けんとう</sup>のつかないほど来た。夜道<sup>へいぜい</sup>だから平生<sup>へいぜい</sup>よりは、ただでさえ長く思われる上へ持つてきて、凸凹<sup>でこぼこ</sup>の登りを膨<sup>ふくら</sup>つ脛<sup>びき</sup>が腫<sup>は</sup>れて、膝頭<sup>ひざがしら</sup>の骨と骨が擦<sup>す</sup>れ合<sup>あ</sup>つて、股<sup>もも</sup>が地面<sup>じびた</sup>へ落ちそうに歩くんだから、長い、長くないのって——それでも、生きてる証拠には、どうか、どうか、長蔵<sup>ちやうざう</sup>さんの尻<sup>しり</sup>を五六間と離れずに、やつて来た。これはただ神妙に自己を没却<sup>あきらめ</sup>した諦<sup>てい</sup>の体たらくから生じた結果ではない。五六間以上後<sup>おく</sup>れると、長蔵<sup>ちやうざう</sup>さんが、振り返って五六歩ずつは待合してくれるから、仕方なしに追いつくと、追いつかない先に向うはまた歩き出すんで、やむを得ずなら、ちびち

びに自己を奮興ふんこうさせた成行なりゆきに過ぎない。それにしても長蔵さんは、よく後が見えたものだ。ことに夜中やちゆうである。右も左も黒い木が空を見事に突っ切つて、頭の上は細く上まで開あいているなど、仰向あおむいた時、始めて勘づくくらいな暗い路である。星明りと云うけれど、あまり便たよりにやならない。提灯ちようちんなんか無論持ち合せようはずがない。自分の方から云うと、先へ行く赤毛布あかげつとが目標めあてである。夜だから赤くは見えないが、何だか赤毛布らしく思われる。明るいうちから、あの毛布けつと、あの毛布と御題目おだいもくのように見詰めて硯ねらいをつけて来たせいで、日が暮れて、突然の眼には毛布だか何だか分らないところを、自分だけにはちゃんと赤毛布に見えるんだろう。信心くどくの功德くどくなんてえのは大方こんなところから出るに違ない。自分はこう云う訳で、どうにか目標めじるしだけはつけて置いたようなものの、長蔵さんに至つては、どのくらいあとから自分が跟ついてくるか分りようがない。ところをちゃんと五六間以上になると留とまってくれる。留まってくれるんだか、留まる方が向うの勝手なんだか、判然しないが、とにかく留まることはたしかだった。とうてい素人しろうとにやできない芸である。自分は苦しいうちにも、これが長蔵さんの商売に必要な芸で、長蔵さんはこの芸を長い間練習して、これまで仕上げたんだなど、少からず感心した。赤毛布は長蔵さんと並んでいるんだから、長蔵さんさえ留まればきつととまる。長

蔵さんが歩き出せば必ず歩き出す。まるで人形のように活動する男であった。ややとすると後れ勝ちの自分よりはこの赤毛布の方が遙はるかに取り扱いやすかつたに違ない。小僧は——例の小僧は消えて無くなつちまつた。始めのうちこそ小僧だから後になるんだろうと思つて、草臥くたびれたら励ましてやろうくらいの了簡りようけんがあつたんだが、かの冷飯草履ひやめしぞうりをぴしやりぴしやりと鳴らしながら凸凹路でこぼこを飛び跳ねて進行する有様を目撃してから、こりや敵かなわないと覚悟をしたのは、よつぽど前の事である。それでもしばらくの間はぴしやりぴしやりが自分の袖そでと擦れ擦れくらゐになつて、登つて来たが、今じやもう自分の近所には影さえなくなつた。並んで歩くうちは、あまり小僧の癖かっばつに活潑かつぱつにあるくん——活潑かつぱつだけならいいが、活潑かつぱつの上に非常に沈黙しんもくなんで——、随分物騒ぶつさうな心持ちだつた。もし笑うなら、極めて小さくつて、非常に活潑かつぱつで、そうして口を利きかない動物を想像して見ると分る。滅多めったにありやしない。こんな動物といつしよに夜山越やまじえをしたとすると、誰だつて物騒ぶつさうな気持になる。自分はこの時この小僧の事を今考えても、妙な感じが出て来る。さつき蝙蝠こうもりのようだと云つたが、全く蝙蝠だ。長蔵さんと赤毛布あかげつとがいたから、好よいようなものの、蝙蝠とたつた二人限ふたりぎりだったら——正直なところ降参する。

すると長蔵さんが、暗闇くらやみの中で急に、

「おおい」

と声を揚げた。淋しい夜道で、急に人声を聞いた人があるかないか知らないが、聞いて見るとちよつと異な感じのするものだ。それも普通の話し声なら、まだ好いが、おおいと人を呼ぶ奴は氣味がよくない。山路で、黒闇で、人っ子一人通らなくつて、御負に蝙蝠なんぞと道伴になつて、いとど物騒な虚に乗じて、長蔵さんが事ありげに声を揚げたのである。事のあるべきはずでない時で、しかも事がありかねまじき場所でおおいと来たんだから、突然と予期が合体して、自分の頭に妙な響を与えた。この声が自分を呼んだんなら、何か起つたなとびくんとするだけで済むんだが、五六間後から行く自分の注意を惹くためとは受取れないほど大きかった。かつ声の伝わって行く方角が違ふ。こつちを向いた声じゃない。おおいと右左りに當つたが、立ち木に遮られて、細い道に向うの方へ遠く逃げのびて、遙の先でおおいと云う反響があつた。反響はたしかにあつたが、返事はないようだ。すると長蔵さんは、前より一層大きな声を出して、

「小僧やあ」

と呼んだ。今考えると、名前も知らないで、小僧やあと呼ぶなんて少しとぼけているがその時はなかなかとぼけちゃいなかった。自分はこの声を聞くと同時に蝙蝠が隠れたん



だなど気がついた。先へ行つたと思うのが当り前で、まかり間違つても逃げたと鑑定をつけべきはずなのに、隠れたんだとすぐ胸先へ浮んで来たのは、よつぽど蝙蝠に祟<sup>たた</sup>られていたに違ない。この祟<sup>あした</sup>は翌朝になつて太陽が出たらすつかり消えてしまつて、自分で自分を何<sup>なん</sup>て馬鹿だろうと思つたくらいだが、實際小僧やあの呼び声を聞いた時は、ちよつと烈<sup>はげ</sup>しく来た。

ところがまた反響が例のごとく向うへ延びて、突き当りがないもんだから、人魂<sup>ひとたま</sup>の尻<sup>しつ</sup>尾<sup>ぽ</sup>のように、幽<sup>かす</sup>かに消えて、その反動か、有らん限りの木も山も谷もしんと静まつた時、――何とも返事がない。この反響が心細く継<sup>つ</sup>続<sup>なが</sup>りながら消えて行く間、消えてから、すべての世界がしんと静まり返るまで、長蔵さんと赤毛布と自分と三人が、暗闇<sup>くらやみ</sup>に鼻を突き合せて黙つて立つていた。あんまり好い心持じゃなかった。やがて、長蔵さんが、

「少し急いだら、追つつくべえ。御前さん好いかね」

と云つた。無論好くはないが、仕方がないから承知をして、急ぎ出した。元来この場に臨んで急ぐなんて生意氣な事ができるはずがないんだが、そこが妙なもので、急ぐ気も、急ぐ力もない癖に受合つちまつた。定めし変な顔をして受合つたんだろうが、受

合ったら急げても、急がないでもむちやくちやに急いでした。この間はどこをどんな具合に通ったか、まあ断然知らないと言った方が穩当だろう。やがて長蔵さんがぴたりと留ったんで、ふと気がついた。すると一つ家の前へ出ている。ランプが点いている。ランプの灯が往来へ映っている。はっと嬉しかった。赤毛布があり見える。そうして小僧もいる。小僧の影が往来を横に切つて向うの谷へ折れ込んでゐる。小僧には長い影だ。

自分はこんな所に人の住む家があるうとはまるで思いがけなかったし、その上眼がくらんで、耳が鳴つて、夢中に急いで、どこまで急ぐんだかあても希望もなくやつて来て、ぴたりと留まるや否や、ランプの灯がまぶしいように眼に這入つて来たんだから、驚いた。驚くと共にランプの灯は人間らしいものだと思つて感心した。ランプがこんなにありがたかつた事は今日までまだかつてない。後から聞いたら小僧はこのランプの灯まで抜け掛をして、そこで自分達を待つてたんだそうだ。おおいと云う声も小僧やあと言ふ声も聞えたんだが返事をしなかつたと言ふ話だ。偉い奴だ。

同勢はこれでようやく揃つたが、この先どうなる事だろうと思ひながら、相変らず神妙にしていると、長蔵さんは自分達を路傍に置きつ放しにして、一人で家の中へ這入つ

て行つた。仕方がないから家と云うが、実のところは、家じゃもつたない。牛さえい  
れば牛小屋で馬さえ嘶なけば馬小屋だ。何でも草鞋わらじを売る所らしい。壁と草鞋とランプの  
ほかに何にもないから、自分はそう鑑定した。間口まぐちは一間ばかりで、入口の雨戸が半分  
ほど閉たてである。残る半分は夜つびて明けて置くんじやないかしら。ことによると、敷  
居みぞの溝に食い込んだなり動かないのかも知れない。屋根は無論藁葺わらぶきで、その藁が古く  
なつて、雨に腐ふやけたせい、崩くずれかかつて漠然ばくぜんとしている。夜と屋根の継目つぎめが分らな  
いほど、ぶくついて見える。その中へ長蔵さんは這入はいつて行つた。なんだか穴の中へで  
も潜もぐり込んで行つたような心持だつた。そうして話している。三人は表に待つてゐる。  
自分の顔は見えないが、赤毛布と小僧の顔は、小屋の中から斜はすに差してくるランプの灯  
でよく見える。赤毛布は依然として、散漫さんまんなものである。この男はたとい地震がゆつ  
て、梁はりが落ちて来ても、親の死目に逢あうか、逢わないかと云う大事な場合でも、いつで  
も、こんな顔をしているに違ちがない。小僧は空を見ている。まだ物騒だ。

ところへ長蔵さんがあらわれた。しかし往来へは出て来ない。敷居の上へ足を乗せ  
て、こつちを向いて立つた股倉またぐらから、ランプの灯だけが細長く出て来る。ランプの位置  
がいつの間にか低まくなつたと見える。長蔵さんの顔は無論よく分らない。

「御前さん、これから山越をするのは大変だから、今夜はここへ泊<sup>とま</sup>って行こう。みんな這入るがいい」

自分はこの言葉を聞くと等しく、今までの神妙<sup>しんびょう</sup>が急に破裂して、身体<sup>からだ</sup>がぐたりとなった。この牛小屋で一夜を明<sup>あか</sup>す事が、それほどの慰藉<sup>いしや</sup>を自分に与えようとは、牛小屋を見た今が今まで、とんと気がつかなかった。やはり神妙の結果泊る所が見つかっても、泊る気が起らなかったんだろう。こうなると人間ほど御<sup>ご</sup>しやすいものはない。無理でも何でもはいはい畏<sup>かしこ</sup>まって聞いて、そうして少しも不平を起さないのみか大に嬉<sup>うれ</sup>しがる。當時を思い出すたびに、自分はもつとも順良なまたもつとも励精な人間であつたなど云う自信<sup>じしん</sup>が伴<sup>ともな</sup>ってくる。兵隊はああでなくつちやいけないなどと考える事さえある。同時に、もし人間が物の用を無視し得るならば、かねて物の用をも忘れ得るものだと言ふ事も悟った。——こう書いて見たが、読み直すと何だかむずかしくって解らない。実を云うと、もつとずつとやさしいんだが、短く詰めるものだからこんなにむずかしくなつちまった。例えば酒を飲む権利はないと自信して、酒の徳を、あれどもなきがごとくに見<sup>み</sup>做<sup>な</sup>す事さえできれば、徳利が前に並んでも、酒は飲むものだと言え気がつかずにいるくらいなところである。御互が泥棒にならずに済むのも、つまりを云えば幼少の時から、

人工的にこの種の境界きょうがいに馴ならされているからの事だろう。が一方から云うと、こんな境界は人性の一部分を麻痺まひさせた結果としてでき上るもんだから、図に乗ってきゅきゅ押して行くと、人間がみんな馬鹿になっちまう。まあ泥棒さえしなければ好いとして、その他の精神器械は残らず相応に働く事ができるようにしてやるのが何よりの功德くどくだと愚考する。自分が当時の自分のままで、のべつに今日こんにちまで生きていたならば、いかに順良だって、いかに励精だって、馬鹿に違ない。だれの眼から見たって馬鹿以上の不具かたわだろう。人間であるからは、たまには怒おこるがいい。反抗するがいい。怒るように、反抗するようになんてできるものを、無理に怒らなかつたり、反抗しなかつたりするのは、自分で自分を馬鹿に教育して嬉しがるんだ。第一身体からだの毒である。それを迷惑だと云うなら、怒らせないように、反抗させないように、御膳立おげんだてをするが至当じゃないか。

自分は当時種々の状況で、万事長蔵さんの云う通りはいはい云っていたし、またそのはいはいを自然と思ひもするが、その代り、今のような身分にいるからは、たとひ百の長蔵さんが、七日七晩なぬかななばん引つ張りつづけに引つ張ったってちよつとも動きやしない。今の自分にはこの方が自然だからである。そうしてこう変るのが人間たるところだと思つてゐる。分りやすいように長蔵さんを引合ひきあひに出したが、よく調べて見ると、人間の性格は一

時間ごとに変っている。変るのが当然で、変るうちには矛盾が出て来るはずだから、つまり人間の性格には矛盾が多いと云う意味になる。矛盾だらけのしまいは、性格があつてもなくつても同じ事に帰着する。嘘だうそと思うなら、試験して見るがいい。他人ひとを試験するなんて罪な事をしないで、まず吾身わがみで吾身を試験して見るがいい。坑夫にまで零落おちぶれないでも分る事だ。神さまなんか聞いて見たつて、以上分わつこない。この理窟りくつがわかる神さまは自分の腹のなかにいるばかりだ。などと、学問もない癖に、学者めいた事を云つては済まない。こんな景氣のいいタンカを切る所存は毛頭なかつたんだが、実を云うとこう云う仔細しさいである。自分はよく人から、君は矛盾の多い男で困る困ると苦情を持ち込まれた事がある。苦情を持ち込まれるたんびに苦い顔にがをして謝罪あやまっていた。自分ながら、どうも困つたもんだ、これじゃ普通の人間として通用しかねる、何とかして改良しなくっちゃ信用を落して路頭に迷うような仕儀になると、ひそかに心配していたが、いろいろの境遇に身を置いて、前に述べた通りの試験をして見ると、改良も何も入ったものじゃない。これが自分の本色なんで、人間らしいところはほかにありやしない。それから人も試験して見た。ところがやつぱり自分と同じようにできている。苦情を持ち込んでくるものが、みんな苦情を持ち込まれてしかるべき人間なんだからおかし

くなる。要するに御腹おなかが減つて飯が食いたくなつて、御腹が張ると眠くなつて、窮きゆうして濫らんして、達たして道みちを行おこなつて、惚ほれていっしょになつて、愛想あいそが尽きて夫婦別れをするまでの事だから、ことごとく臨機応變さたの沙汰である。人間の特色はこれよりほかにありやしない。と、こう感服しているんだから、ちよつと言つて見たまでである。しかし世の中には学者だの坊主だの教育家だのと云うむずかしい仲間がだいぶいて、それぞれ専門に研究している事だから、自分だけ、訳の分つたように弁じ立てては善くない。

そこで元氣のいい今の氣焰きえんをやめて、再びもとの神妙しんびような態度に復して、山の中の話をする。長蔵さんが敷居の上に立つて、往來を向きながら、ここへ泊つて行こうと云い出した時、こんな破屋あばらやでも泊る事が出来るんだつたと、始めて意識したよりも、すべての家と云うものが元來がんらい泊るために建ててあるんだなと、ようやく氣がついたくらい、泊る事は予期していなかった。それでいて身体からだは蒟蒻こんじやくのように疲れ切つてゐる。平生いづもなら泊りたい、泊りたいですべての内臓はちきが張切れそうになるはずなのに、没自我ぼつじがの坑夫行こうふゆき、すなわち自滅の前座としての墮落と諦めあきらをつけた上の疲労だから、いくら身体に泊る必要があつても、身体の方から魂へ宛あてて宿泊の件を請求してゐなかつた。ところへ泊ると命令が天から逆に魂が下つたんで、魂はちよつとまごついたかたちで、とりあえず手足に

報告すると、手足の方では非常に嬉しがったから、魂もなるほどありがたいと、始めて長蔵さんの好意を感謝した。と云う訳になる。何となく落語じみてふざけているが、実際この時の心の状態は、こう譬を借りて来ないと説明ができない。

自分は長蔵さんの言葉を聞くや否や、急に神経が弛んで、立ち切れない足を引き摺つて、第一番に戸口の方に近寄った。赤毛布はのそのそ這入ってくる。小僧は飛んで来た。飛んだんじやあるまいが、草履の尻が勢よく踵へあたるんで、ぴしゃぴしゃ云う音が飛ぶように思われた。

這入って見るとぶんと臭った。何の臭だかさらに分らない。小僧が鼻をぴくつかせたので、小僧もこの臭に感じたなと気がついた。長蔵さんと赤毛布はまるで無頓着であった。土間から上へあがる段になって、雑巾でもと思つたが、小僧は委細構わず、草履を脱いで上がっちゃった。小僧の草履は尻が無いんだから、半分裸足である。ひどい奴だと眺めていると、長蔵さんが、

「御前さんも下駄だから、御上り」

と注意した。それで気味がわるいが、ほこりも払わず上がった。畳の上へ一足掛けて見るとぶくつとした。小僧はその上へころりと転がっている。自分は尻だけおろして、障



子——障子は二枚あった——その障子の影へ胡坐をかいた。この障子は入口に立ててあるから、振り向くと、長蔵さんと赤毛布が草鞋を脱いでいる。二人共腰から手拭を出して、ばたばた足をはたいている。そうして、すぐ上がって来た。足を洗うのが面倒だに見える。ところへ主人が次の間から茶と煙草盆を持って来た。

主人だの、次の間だの、茶だの、煙草盆だの、と云うとすこぶる尋常に聞えるが、その実名ばかりで、一々説明すると、大変な誤解をしていたんだねと呆れ返るものばかりである。がとにかく主人が次の間から、茶と煙草盆を持って来たには違いない。そうして長蔵さんと談話をし始めた。談話の筋は忘れたが、その様子から察すると、二人はもとからの知合で、御互の間には貸や借があるらしい。何でも馬の事をしきりに云っていた。自分だの、赤毛布だの、小僧などの事はまるで聞きもしない。まるで眼中にない訳でもあるまいが、さつき長蔵さんが一人で談判に這入った時に、残らず聞いてしまったんだろう。それとも長蔵さんはたびたびこんな呑気屋を銅山へ連れて行くんで、自然その行き還りにはこの主人の厄介になりつけてるから、別段気にも留めないのかも知れない。

自分は、長蔵さんと主人との話を聞きながら、居眠を始めた。いつから始めたか知ら

ない。馬を売損うりやどなつて、どうかしたと云うところから、だんだん判然はつきりしなくなつて、自然じねんと長蔵さんが消える。赤毛布が消える。小僧が消える。主人と茶と煙草盆が消えて、破屋あばらやまでも消えた時、こくりと眠ねむりが覚さめた。気がつくと思つて、擡もちやげるとはなはだ重い。主人はやっぱり馬の話をしている。まだ馬かと思つてゐるうちに、また気が遠くなつた。気が遠くなつたのを、遠いままにして打遣うちぢやつて置くと、忽然こつぜんぱつと眼があいた。薄暗い部屋うちの中に、影のような長蔵さんと亭主が膝ひざを突き合せている。ちようど、借かりがどうかしてハハハハと亭主が笑つたところだつた。この亭主は額ひたいが長くつて、斜はすに頭の天辺てんぺんまで引込ひっこんでるから、横から見ると切通きりどおしの坂さかくらいな勾配こうはいがある。そうして上になればなるほど毛が生はえている。その毛は五分ごぶくらいなのと一寸いっすんくらいなのとが交まじつて、不規則にしかも疎まばらにもじゃもじゃしている。自分が居い眠ねりからはつと驚いて、急に眼を開けると、第一にこの頭が眸ひとめの底に映つた。ランプが煤すすだらけで暗いものだから、この頭も煤だらけになつて映つて来た。その癖距離は近い。だから映つた影は明瞭めいりょうである。自分はこの明瞭でかつ朦朧もうろうなる亭主の頭を居眠りの不知覺から我に返る咄とつさにふと見たのである。この時はあまり好い心持ではなかつた。それがため、居眠りもしばらく見合せるような氣になつて、部屋中を見廻すと、向うの

隅に小僧が倒れている。こちらの横に茨城県が長く伸びている。毛布けつとの下から大きな足が見える。突当りが壁で、壁の隅に穴が開いて、穴の奥が真黒である。上は一面の屋根裏で、寒いほど黒くなつてゐる所へ、油煙とともにランプの灯ひがあたるから、よく見てみると、藁葺わらぎの裏側が震えるように思われた。

それからまた眠くなつた。また頭が落ちる。重いから上げるとまた落ちる。始めのうちは、上げた頭が落ちながらだんだんうつとりして、うつとりの極、胸の上へがくりと落ちるや否や、一足飛いっそくとびに正氣へ立ち戻つたが、三回四回と重なるにつけて、眼だけ開あけても氣は判然はつきりしない。ぼんやりと世界に歸つて、またぞろすぐと不覺に陥おちいつちまう。それから例のごとく首が落ちる。微かすかに生きてゐるような氣になる。かと思ふとまた一切空いっさいくうに這入る。しまいには、とうとう、いくら首がのめつて来ても、動じなくなつた。あるいはのめつたなり、頭の重みで横にぶつ倒れちまつたのかも知れない。とにかく安々と夜明まで寝て、眼が覺さめた時は、もう居眠いねぶりはしていなかつた。通例のごとく身体全体を畳の上につけて長くなつてゐた。そうして涎よだれを垂れている。——自分は馬の話を聞いて居眠りを始めて、眼をあけて借金借金の話を聞いて、また居眠りの続を復習してゐるうちに、とうとう居眠りを本式に崩して長くなつたぎり、魂おとさたの音沙汰を聞かなかつたんだか

ら、眼が覚めて、夜が明けて、世の中が土台から陰と陽に引ッ繰り返つてゐるのを見るや否や、眼をあいて涎よだれを垂れて、横になつたまま、じつとしていた。自覚があつて死んでたらこんなだろう。生きてゐるけれども動く気にならなかつた。昨夜ゆうべの事は一から十までよく覚えてゐる。しかし昨夜の一から十までが自然と延びて今日まで持ち越したとは受け取れない。自分の経験はすべてが新しくつて、かつ痛切であるが、その新しい痛切の事々物々が何だか遠方にある。遠方にあると云うよりも、昨夜と今日の間に厚い仕切りが出来て、截然せつぜんと区別がついたようだ。太陽が出ると引き込むだけの差で、こう心に連続がなくなつては不思議なくらい自分で自分が当あてにならなくなる。要するに人世は夢のようなものだ。とちよつと考へたもんだから、涎も拭かずに沈んでゐると、長蔵さんが、ううんと伸のびをして、寝たまま握にぎり拳こぶしを耳の上まで持ち上げた。握り拳がぬつと真直に畳の上を擦こすつて、腕のありたけ出たところで、勢せいがゆるんで、ぐにやりとした。また寝るかと思つたら、今度は右の手を下へさげて、凹くぼんだ頬ほつぺたをぼりぼり掻かき出した。起きてゐるのかも知れない。そのうち、むにやむにや何か云うんで、やつぱり眼が覚めていないなと気がついた時、小僧がむくりと飛び起きた。これは真正の意味において飛起きたんだから、どしんと音がして、根太ねだが抜けそうに響いた。すると、さすが長蔵

さんだけあって、むにやむにやをやめて、すぐ畳についた方の肩を、肘ひじの高さまで上げた。眼をぱちつかせている。

こうなると、自分もいつまで沈んでいたって際限がないから、起き上った。長蔵さんも全く起きた。小僧は立ち上がった。寝ているものは赤毛布あかげつとばかりである。これはまた呑気のんきなもので、依然として毛布けつとから大きな足を出してぐうぐう鼾いびき声をかいて寝ている。それを長蔵さんが起す。――

「御前おまえさん。おい御前さん。もう起きないと御午おひるまでに銅山やまへ行きつけないよ」

御前さんが三四返繰返されたが、毛布はよく寝ている。仕方がないから長蔵さんは毛布の肩へ手を懸けて、

「おい、おい」

と揺り始めたんで、やむを得ず、毛布けつとの方でも「おい」と同じような返事をして、中途半端はんぱに立ち上った。これでみんな起きたようなものの、自分は顔も洗わず、飯も食わず、どうして好いか迷つてると、長蔵さんが、

「じゃ、そろそろ出掛けよう」

と云つて、真先に土間へ降りかけたには驚いた。小僧がつづいて降りる。毛布も不得要

領に土間へ大きな足をぶら下げた。こうなると自分も何とか片をつけなくっちゃならな  
いから、一番あとから下駄を突掛<sup>つつか</sup>けて、長蔵さんと赤毛布<sup>あかげつと</sup>が草鞋<sup>わらじ</sup>の紐<sup>ひも</sup>を結ぶのを、不景  
気<sup>ふけい</sup>な懷手<sup>かいで</sup>をして待つていた。

土間へ下りた以上は、顔を洗わないのかの、朝飯<sup>あさめし</sup>を食わないのかのと、当然の事を聞  
くのが、さも贅沢<sup>ぜいたく</sup>の沙汰<sup>さた</sup>のように思われて、とんと質問して見る気にならない。習慣の  
結果、必要とまで見倣<sup>みな</sup>されているものが、急に余計な事になっちまうのはおかしいよう  
だが、その後<sup>のち</sup>この顛倒<sup>てんとう</sup>事件<sup>じけん</sup>を布衍<sup>ふえん</sup>して考えて見たら、こんな、例はたくさんある。つま  
り世の中では大勢のやつてゐる事が当然になつて、一人だけでやる事が余計のように思わ  
れるんだから、当然になろうと思つたら味方<sup>みかた</sup>を大勢拵<sup>こしら</sup>えて、さも当然であるかの容子<sup>ようす</sup>で  
不当な事をやるに限る。やつては見ないがきつと成功するだろう。相手が長蔵さんと赤  
毛布でさえ自分にはこれほどの変化を來たしたんでも分る。

すると長蔵さんは草鞋の紐を結んで、足元に用がなくなつたもんだから、ふいと顔を  
上げた。そうして自分を見た。そうして、こんな事を云う。

「御前さん、飯は食わなくつても好いだろね」

飯を食わなくつて好い法はないが、わるいと云つたつて、始まりようがないから、自

分はただ、

「好いです」

と答えて置いた。すると長蔵さんは、

「食いたいかね」

と云つて、にやにやと笑つた。これは自分の顔に飯が食いたいような根性が幾分かあらわれたためか、または十九年来の予期に反した起きたなり飯抜きの出立に、自然不平の色が出ていたためだろう。それでなければ草鞋の紐を結んでしまつてから、こんな事を聞く訳がない。現に長蔵さんは、赤毛布にも小僧にもこの質問を呈出しなかつたんでも分る。今考えると、ちよつと兩人にも同じ事を聞いて見れば善かつたような氣もする。朝飯を食わないで五里十里と歩き出すものは宿無しか、または準宿無しでなくつちやならない。目が醒めて、夜が明けてるのに、汁の煙も、漬物の香も、いっこう連想に乗つて来ないからは、行きなり放題に、今日は今日の命を取り留めて、その日その日の魂の供養をする呑氣屋で、世の中にあしたと云うものがないのを当り前と考えるほどに不幸なまた幸な人間である。自分は十九年来始めて、こう云う人間と一つ所に泊つて、これからまたいっしょに歩き出すんだなと思つた。赤毛布と小僧の顔色を伺つて見ると少し

も朝飯を予期している様子がないんで、双方共朝飯を食い慣<sup>つ</sup>けていない一種の人類だと勘<sup>さ</sup>づいて見ると、自分の運命は坑夫にならない先から、もう、坑夫以下に摺<sup>ず</sup>り落ちていたと云う事が分った。しかし分ったと云うばかりで別に悲しくもなかった。涙は無論出なかった。ただ長蔵さんが、この朝飯の経験に乏<sup>とほ</sup>しい人間に向つて、「御前さん達も飯が食いたいかね」と尋ねてくれなかったのを、今では残念に思つてゐる。食つた事が少いから、今までの習慣性で、「食わないでも好い」と答えるか、それとも、たまさかに有りつけるかも知れないと云う意外の望に奨励<sup>しょうれい</sup>されて「食いたい」と答えるか。――つまらん事だがどつちか聞いて見たい。

長蔵さんは土間へ立つて、ちよつと後ろを振り返つたが、

「熊<sup>くま</sup>さん、じゃ行つてくる。いろいろ御世話様」

と軽く力足<sup>ちからあし</sup>を二三度踏んだ。熊さんは無論亭主の名であるが、まだ奥で寝ている。覗<sup>のぞ</sup>いて見ると、昨<sup>ゆうべ</sup>夕<sup>ゆう</sup>うつつに氣味をわるくした、もじやもじやの頭が布団<sup>ふとん</sup>の下から出てゐる。この亭主は敷蒲団<sup>しきふとん</sup>を上へ掛けて寝る流儀と見える。長蔵さんが、このもじやもじやの頭に話しかけると、頭は、むくりと畳を離れた。そうして熊さんの顔が出た。この顔は昨夜<sup>ゆうべ</sup>見たほど妙でもなかった。しかし額がさかに瘠<sup>こ</sup>けて、脳天まで長くなつてゐる事



は、今朝でも争われない。熊さんは床の中から、

「いや、何にも御構<sup>おかまい</sup>申さなかった」

と云った。なるほど何にも構わない。自分だけ布団をかけている。

「寒かかったかね」

とも云った。気楽なもんだ。長蔵さんは

「いいえ。なあに」

と受けて、土間から片足踏み出した時、後<sup>うしろ</sup>から、熊さんが欠伸<sup>あくび</sup>交りに、

「じゃ、また歸りに御寄り」

と云った。

それから長蔵さんが往来へ出る。自分も一足<sup>おく</sup>後れて、小僧と赤毛布<sup>あかげつと</sup>の尻を追つ懸<sup>か</sup>けて出た。みんな大急ぎに急ぐ。こう云う道中には慣<sup>な</sup>れ切ったものばかりと見える。何でも長蔵さんの云うところによると、これから山越をするんだが、午<sup>ひる</sup>までには銅山<sup>やま</sup>へ着かなくっちゃならないから急ぐんだそうだ。なぜ午までに着かなくっちゃならないんだか、訳が分らないが、聞いて見る勇氣がなかったから、黙って食つついて行つた。するとなるほど登<sup>のぼり</sup>になつて來た。昨夕あれほど登つたつもりなのに、まだ登るんだから嘘<sup>うそ</sup>のよう

でもあるが實際見渡して見ると四方は山ばかりだ。山の中に山があつて、その山の中にまた山があるんだから馬鹿馬鹿しいほど奥へ這入る訳になる。この模様では銅山のある所は、定めし淋しいだろう。呼吸を急いで登りながらも心細かった。ここまで来る以上は、都へ帰るのは大変だと思うと、何の酔興で来たんだか浅間しくなる。と云つて都におりたくないから出奔したんだから、おいそれと帰りにくい所へ這入つて、親親類の目に懸からないように、朽果ててしまうのはむしろ本望である。自分は高い坂へ来ると、呼吸を継ぎながら、ちよつと留つては四方の山を見廻した。するとその山がどれもこれも、黒ずんで、凄いほど木を被つている上に、雲がかかつて見る間に、遠くなつてしまふ。遠くなると云うより、薄くなると云う方が適當かも知れない。薄くなつた揚句は、しだいしだいに、深い奥へ引き込んで、今までは影のように映つてたものが、影さえ見せなくなる。そうかと思うと、雲の方で山の鼻面を通り越して動いて行く。しきりに白いものが、捲き返しているうちに、薄く山の影が出てくる。その影の端がだんだん濃くなつて、木の色が明かになる頃は先刻の雲がもう隣りの峰へ流れている。するとまた後からすぐに別の雲が来て、せつかく見え出した山の色をぼうとさせる。しまいには、どこにどんな山があるかいつこう見当がつかなくなる。立ちながら眺めると、木も山も谷

もめちやめちやになつて浮き出して来る。頭の上の空さえ、際限もない高い所から手の届く<sup>あたり</sup>辺まで落ちかかった。長蔵さんは、

「こりや、雨だね」

と、歩きながら<sup>ひとりごと</sup>独言を云つた。誰も答えたものはない。四人とも雲の中を、雲に吹かれるような、取り捲かれるような、また埋められるような有様で登つて行つた。自分にはこの雲が非常に嬉しかった。この雲のお蔭で自分は世の中から隠したい<sup>からだ</sup>身体を十分に隠すことが出来た。そうして、さのみ苦しい思いもせずにその中を歩いて行ける。手足は自由に働いて、閉じ籠められたような窮屈も覚えない上に、人目にかからん徳は十分ある。生きながら葬られると云うのは全くこの事である。それが、その時の自分には唯一の理想であつた。だからこの雲は全くありがたい。ありがたいという感謝の念よりも、雲に埋められ出してから、まあ安心だと、ほっと一息した。今考えると何が安心だか分りやしない。全くの氣違だと云われても仕方がない。仕方がないが、こう云う自分が、時と場合によれば、翌が日にも、また雲が恋しくならんとも限らない。それを思うと何だか変だ。吾が身で吾が身が保証出来ないような、また吾が身が吾が身でないような氣持がする。

しかしこの時の雲は全く嬉しかった。四人が離れたり、かたまったり、隔てられたり、包まれたりして雲の中を歩いて行つた時の景色はいまだに忘れられない。小僧が雲から出たり這入ったりする。茨城の毛布けつとが赤くなったり白くなったりする。長蔵さんの、どてらが、わずか五六間の距離で濃くなったり薄くなったりする。そうして誰も口を利きかない。そうして、むやみに急ぐ。世界から切り離された四つの影が、後あとになり先になり、殖ふえもせず滅へりもせず、四つのまま、引かれて合うように、弾はじかれて離れるように、またどうしても四つでなくてはならないように、雲の中をひたすら歩いた時の景色はいまだに忘れられない。

自分は雲に埋まっている。残る三人も埋まっている。天下が雲になったんだから、世の中は自分共にたつた四人である。そうしてその三人が三人ながら、宿無やどなしである。顔も洗わず朝飯も食わずに、雲の中を迷って歩く連中である。この連中と道伴みちづれになつて登り一里、降り二里を足の続く限り雲に吹かれて来たら、雨になった。時計がないんで何時なんじだか分らない。空模様で判断すると、朝とも云われるし、午過ひるすぎとも云われるし、また夕方と云つても差支さしつかえない。自分の精神と同じように世界もぼんやりしているが、ただちよつと眼についたのは、雨の間から微かすかに見える山の色であつた。その色が今までの

とは打って變つてゐる。いつの間にか木が抜けて、空坊主からぼうずになったり、ところ斑まだらの禿頭はげあたまと化けちまつたんで、丹砂たんしゃのように赤く見える。今までの雲で自分と世間を一筆ひとづいでに抹殺まちころして、ここまでふらつきながら、手足だけを急がして来たばかりだから、この赤い山がふと眼に入るや否や、自分ははつと雲から醒さめた気分になった。色彩の刺激が、自分にこう強く応こたえようとは思いがけなかった。——実を云うと自分は色盲じやないかと思うくらい、色には無頓着むとんじやくな性質たぢである。——そこでこの赤い山が、比較的烈しく自分の視神経を冒おかすと同時に、自分はいよいよ銅山に近づいたなと思つた。虫が知らせたと云えば、虫が知らせたとも云えるが、実はこの山の色を見て、すぐ銅あかがねを連想したんだろう。とにかく、自分がいよいよ到着したなと直覺的に——世の中で直覺的と云うのは大概このくらいなものだと思ふが——いわゆる直覺的に事實を感得した時に、長蔵さんが、

「やつと、着いた」

と自分が言いたいような事を云つた。それから十五分ほどしたら町へ出た。山の中の山を越えて、雲の中の雲を通り抜けて、突然新しい町へ出たんだから、眼を擦こすつて視覚をたしかめたいくらい驚いた。それも昔の宿しゆくとか里とか云う旧幕時代に縁のあるような町なら、まだしもだが、新しい銀行があつたり、新しい郵便局があつたり、新しい料理屋

があつたり、すべてが苔こけの生えない、新しづくめの上に、白粉おしろいをつけた新しい女までいるんだから、全く夢のような気持で、不審が顔に出る暇いとまもないうちに通り越しちまつた。すると橋へ出た。長蔵さんは橋の上へ立つて、ちよつと水の色を見たが、

「これが入口だよ。いよいよ着いたんだから、そのつもりでいなくっちゃ、いけない」と注意を与えた。しかし自分には、どんなつもりでいなくっちゃいけないんだか、ちつとも分らなかつたから、黙つて橋の上へ立つて、入口から奥の方を見ていた。左が山である。右も山である。そうして、所々に家うちが見える。やつぱり木造の色が新しい。中には白壁だか、ペンキ塗だか分らないのがある。これも新しい。古ぼけて禿はげてゐるのは山ばかりだつた。何だかまた現実世界に引き摺ずり込まれるような気がして、少しく失望した。長蔵さんは自分が黙つて橋の向むかひを覗のぞき込んでゐるのを見て、

「好いかね、御前さん、大丈夫かい」

とまた聞き直したから、自分は、

「好いです」

と明瞭めいりょうに答えたが、内心あまり好くはなかつた。なぜだかしらないが、長蔵さんはただ自分にだけ懸念けんねんがある様子であつた。赤毛布あかげつとと小僧には「好いかね」とも「大丈夫か

い」とも聞かなかった。頭からこの兩人は過去の因果で、坑夫になって、銅山のうちに天命を終るべきものと認定しているような気色がありありと見えた。して見ると不信用なのは自分だけで、だいぶ長蔵さんからこいつは危ないかと睨まれていたのかも知れない。好い面の皮だ。

それから四人揃って、橋を渡って行くと、右手に見える家にはなかなか立派なのがある。その中で一番いかめしい奴を指して、あれが所長の家だと長蔵さんが教えてくれた。ついでに左の方を見ながら

「こつちがシキだよ、御前さん、好いかね」

と云う。自分はシキと云う言葉をこの時始めて聞いた。

よつぽど聞き返そうかと思つたが、大方これがシキなんだろうと思つて黙つていた。あとから自分もこのシキと云う言葉を明瞭に理解しなければならぬ身分になつたが、やつぱり始めにぼんやり考へついた定義とさした違もなかつた。そのうち左へ折れていよいよシキの方へ這入る事になつた。鉄軌についてだんだん上って行くと、そここに粗末な小さい家がたくさんある。これは坑夫の住んでる所だと聞いて、自分も今日から、こんな所で暮すのかと思つたが、それは間違であつた。この小屋はどれも六畳と三

畳二間<sup>ふたま</sup>で、みんな坑夫の住んでる所には違ないが、家族のあるものに限って貸してくれる規定であるから、自分のような一人ものは這入りたくたつて這入れないんだつた。こ  
う云う小屋の間を縫<sup>あ</sup>って、飽<sup>あ</sup>きずに上<sup>のぼ</sup>って行くと、今度は石崖<sup>いしがけ</sup>の下に細長い横幅ばかり  
の長屋が見える。そうして、その長屋がたくさんある。始めはわずか二三軒かと思つた  
ら、登るに従つて続々あらわれて来た。大きさも長さも似たもんで、みんな崖下<sup>がけした</sup>にある  
んだから位地にも変りはないが、向<sup>むき</sup>だけは各々違<sup>めいめい</sup>つてる。山坂を利用して、なけなしの  
地面へ建てることだから、東だとか西だとか贅沢<sup>ぜいたく</sup>は言つていられない。やつとの思い  
で、ならした地面へ否応<sup>いやおう</sup>なしに、方角のお構<sup>かま</sup>なく建ててしまったんだから不規則なもの  
だ。それに、第一、登って行く道がくねつてる。あの長屋の右を歩いてるなどと思うと、  
いつの間<sup>ま</sup>にかその長屋の前へ出て来る。あれは、すぐ頭の上だがと心待ちに待つている  
と、急に路<sup>そ</sup>が外れて遠くへ持つてかれてしまう。まるで見当<sup>けんとう</sup>がつかない。その上この細  
長い家から顔が出ている。家から顔が出ているのが珍らしい事もないんだが、その顔が  
ただの顔じゃない。どれも、出来ていない上に、色が悪い。その悪さ加減がま  
た、尋常でない。青くつて、黒くつて、しかも茶色で、とうてい都会にいては想像のつ  
かない色だから困る。病院の患者などとはまるで比較にならない。自分が山路を登りな



がら、始めてこの顔を見た時は、シキと云う意味をよく了解しない癖に、なるほどシキだなど感じた。しかしいくらシキでも、こう云う顔はたくさんあるまいと思つて、登つて行くと、長屋を通るたんびに顔が出ていて、その顔がみんな同じである。しまいにはシキとは恐ろしい所だと思ふまで、いやな顔をたくさん見せられて、また自分の顔をたくさん見られて——長屋から出ている顔はきつと自分らを見ていた。一種獐惡な眼つきで見ていた。——とうとう午後の一時に飯場へ着いた。

なぜ飯場と云うんだか分らない。焚き出しをするから、そう云う名をつけたものかも知れない。自分はその後飯場の意味がある坑夫に尋ねて、籠棒め、飯場たあ飯場でえ、何を云つてゐるんでえ、とひどく剣突を食つた事がある。すべてこの社会に通用する術語は、シキでも飯場でもジャンボーでも、みんな偶然に成立して、偶然に通用しているんだから、滅多に意味なんか聞くと、すぐ怒られる。意味なんか聞く閑もなし、答える閑もなし、調べるのは大馬鹿となつてゐるんだから至極簡単でかつ全く實際的なものである。

そう云う訳で飯場の意味は今もって分らないが、とにかく崖の下に散在している長屋を指すものと思えばいい。その長屋へようやく到着した。多くある長屋のうちで、なぜ

この飯場を選んだかは、長蔵さんの一人ぎめだから、自分には説明しにくい。が、この飯場は長蔵さんの専門御得意の取引先と云う訳でもなかったらしい。長蔵さんは自分をこの飯場へ押しつけるや否や、いつの間にか、赤毛布と小僧を連れてほかの飯場へ出て行ってしまった。それで二人はほかの飯場の飯を食うようになったんだと後から気がついた。二人の消息はその後いっこう聞かなかった。銅山のなかでもついぞ顔を合せた事がない。考えると、妙なものだ。一膳めし屋から突然飛び出した赤い毛布と、夕方の山から降って来た小僧と落ち合つて、夏の夜を後になり先になつて、崩れそうな藁屋根の下でいっしょに寝た明日は、雲の中を半日かかつて、目指す飯場へようやく着いたと思うと、赤毛布も小僧もふいと消えてなくなつちまう。これでは小説にならない。しかし世の中には纏まりそうで、纏らない、云わばでき損いの小説めいた事がだいぶある。長い年月を隔てて振り返って見ると、かえつてこのだらしく尾を蒼穹の奥に隠してしまつた経歴の方が興味の多いように思われる。振り返って思い出すほどの過去は、みんな夢で、その夢らしいところに追懷の趣があるんだから、過去の事実それ自身にどこかぼんやりした、曖昧な点がないとこの夢幻の趣を助ける事が出来ない。したがって十分に發展して来て因果の予期を満足させる事柄よりも、この赤毛布流に、頭も尻も秘密の

中に流れ込んでただ途中だけが眼の前に浮んでくる一夜半日の画の方が面白い。小説になりそうで、まるで小説にならないところが、世間臭くなくって好い心持だ。ただに赤毛布ばかりじゃない。小僧もそうである。長蔵さんもそうである。松原の茶店の神さんかみもそうである。もっと大きく云えばこの一篇の「坑夫」そのものがやはりそうである。纏まりのつかない事実を事実のままに記すだけである。小説のように拵えたものじゃないから、小説のように面白くはない。その代り小説よりも神秘的である。すべて運命が脚色した自然の事実は、人間の構想で作り上げた小説よりも無法則である。だから神秘である。と自分は常に思っている。

赤毛布と小僧が連れて行かれたのは後の事だが、自分らが飯場に到着した時は無論二人ともいっしょであつた。ここで長蔵さんがいよいよ坑夫志願の談判を始めた。談判と云うと面倒なようだが、その実極めて簡単なものであつた。ただ、この男は坑夫になりたいと云うから、どうか使ってくれと云つたばかりである。自分の姓名も出生地も身元も閱歴も何にも話さなかつた。もちろん話したくつたつて、知らないんだから、話せようもないんだが、こうまで手っ取り早く片づける了簡とは思わなかつた。自分は中学校へ入学した時の経験から、いくら坑夫だつて、それ相應の手續がなくつちや採用されな

いもんだとばかり思っていた。大方身元引受人とか保証人とか云うものが証文へ判でも捺すんだらう、その時は長蔵さんにでも頼んで見ようくらいにまで、先廻りをして考えていた。ところが案に相違して、談判を持ち込まれた飯場頭は——飯場頭だか何だかその時は無論知らなかった。眉毛の太くって蒼髯の痕の濃い逞しい四十恰好の男だった。——その男が長蔵さんの話を一通り聞くや否や、

「そうかい、それじゃ置いておいで」

とさも無雑作に云っちまった。ちょうど炭屋が土釜を台所へ担ぎ込んだ時のように思われた。人間が遙々山越をして坑夫になりに来たんだとは認めていない。そこで自分は少々腹の中でこの飯場頭を恨んだが、これは自分の間違であつた。その訳は今直に分る。

飯場頭と云うのは一の飯場を預かる坑夫の隊長で、この長屋の組合に這入る坑夫は、万事この人の了簡しだいでもなる。だからはなはだ勢力がある。この飯場頭と一分時間に談判を結了した長蔵さんは、

「じゃ、よろしくお頼みもうします」

と云つたなり、赤毛布と小僧を連れて出て行つた。また帰ってくる事と思つたが、その

後ごいつこう影も形も見せないんで、全く、置去おきざりにされたと云う事が分った。考えるときどい男だ。ここまで引つ張つて来るときには、何のかのと、世話らしい言葉を掛けたのに、いざとなると通り一片の挨拶あいさつもしない。それにしてもほん引の手数料はいつ何時なんじどこで取ったものか、これは今もって分らない。

こう云うしだいで飯場頭からは、土釜の炭俵のごとく認定される、長蔵さんからは小包のように抛なげ込まれる。少しも人間らしい心持がしないんで、大いに悄然しょうぜんとしていると、出て行く三人の後姿を見送った飯場頭は突然自分の方を向いた。その顔つきが変わっている。人を炭俵のように取扱う男とは、どうしても受取れない。全く東京辺で朝晩出逢あう、万事を心得た苦勞人の顔である。

「あなたは生れ落ちてからの労働者とも見えないようだが……」

飯場掛はんばがかりの言葉をここまで聞いた時、自分は急に泣きたくなった。さんざつばらお前まへさんで、厭いやになるほどやられた揚句あげくの果はて、もうとうてい御前さん以上には浮ばれないものと覚悟をしていた矢先に、突然あなたの昔に帰ったから、思いがけない所で自己を認められた嬉しさと、なつかしさと、それから過去の記憶——自分はいおととい一昨日までは立派にあなただで通つて来た——それやこれやが寄つて、たかつて胸の中へ込み上げて来た上

に、相手の調子がいかにも鄭寧<sup>ていねい</sup>で親切だから——つい泣きなくなつた。自分はその後いろいろな目に逢<sup>あ</sup>つて、幾度となく泣きなくなつた事はあるが、擦<sup>す</sup>れ枯<sup>から</sup>しの今日<sup>こんにち</sup>から見れば、大抵は泣くに当らない事が多い。しかしこの時頭の中にたまつた涙は、今が今でも、同じ羽目になれば、出かねまいと思う。苦しい、つらい、口惜<sup>くちお</sup>しい、心細い涙は経験で消す事が出来る。ありがた涙もこぼさずに済む。ただ墮落した自己が、依然として昔の自己であると他<sup>ひと</sup>から認識された時の嬉し涙は死ぬまでついて廻るものに違ない。人間はかように手前勘<sup>てまえかん</sup>の強いものである。この涙を感謝の涙と誤解して、得意がるのは、自分のために書生を置いて、書生のために置いてやったような心持になつてると同じ事じゃないかしら。

こう云う訳で、飯場掛<sup>はんばが</sup>りの言葉を一行ばかり聞くと、急に泣きなくなつたが、実は泣かなかつた。悄然<sup>しょうげん</sup>とはしていたが、気は張っている。どこからか知らないが、抵抗心が出て来た。ただ思うように口が利<sup>き</sup>けないから、黙つて向うの云う事を聞いていた。すると飯場掛りは嬉しいほど親切な口調で、こう云つた。――

「……まあどうして、こんな所へ御出<sup>おいで</sup>なすつたんだか、今の男が連れて来るくらいだから大概私<sup>わたし</sup>にも様子は知れてはいるが――どうです、もう一遍考えて見ちゃあ。きつと

取ッ附坑夫になれて、金がうんと儲かるてえような旨い話でもしたんでしょう。それがさ、実際やって見るとどうてい話の十が一にも行かないんだからつまらないです。第一坑夫と一口に云いますがね。なかなかただの人に出来る仕事じゃない、ことにあなたのように学校へ行つて教育なんか受けたものは、どうしたつて勤まりつこありませんよ。

……」

飯場頭はここまで来て、じつと自分の顔を見た。何とか云わなくっちゃならない。幸いこの時はもう泣きたいところを通り越して、口が利けるようになっていた。そこで自分はいこう云った。――

「僕は――僕は――そんなに金なんか欲しくないです。何も儲けるためにやつて来た訳じゃないんですから、――そりゃ知ってるです、僕だつて知ってるです……」

と、この時知ってるですを二遍繰り返した事を今だに記憶している。はなはだ穩かならぬ生意氣な、ものの云いようだった。若いうちは、たった今まで悄気（しよげ）いてても、相手しだいですぐつけ上つちまう。まことに赤面の至りである。しかもその知ってるですが、何を知ってるのかと思うと、今自分を連れて来た男、すなわち長蔵さんは、一種の周旋屋であつて、すべての周旋屋に共通な法螺吹（ほらふ）きであると云う真相をよく自覺していると

云う意味なんだから、いくら知つてたつて自慢にならないのは無論である。それを念入に、瞞だま着れて来たんじゃない、万事承知の上の坑夫志願だなどと説明して見たつて今更いまさらどうなるものじゃない。ところが年が若いと虚栄心の強いもので——今でも弱いとは云わないが——しきりに弁解に取り掛つたのは実に冷汗の出るほどの愚ぐであつた。幸い相手が、こう云う家業かぎように似合あわぬ篤実とくじつな男で、かつ自分の不經驗を氣の毒に思うのあまり、この生意氣を生意氣と知りながら大目に見てくれたもんだから、どやされずに済んだ。まことにありがたい。この飯場に住み込んだあとで、頭かしらの勢力の広大なるに驚くにつれて、僕われは知しつてゐるですを思い出しては独ひとり赧あかい顔をしていた。ついでに云うがこの頭の名は原駒吉はらこまきちである。今もつて自分は好い名だと思つてゐる。

原さんは別に厭いやな顔つきもせず、黙つて自分の言訳を聞いていたが、やがて頭あたまを振り出した。その頭は大きな五分刈ごぶかりで額の所が面摺めんずれのように抜き上がっている。

「そりや物数奇ものずきと云うもんでさあ。せつかく来たから是非やるつたつて、何も家うちを出る時から坑夫になると思いつめた訳でもないんでしよう。云わば一時いちじの出来心なんだからね。やつて見りゃ、すぐ厭いやになつちまうな眼に見えてるんだから、廃よすが好ようがしう。現に書生さんでここへ来て十日と辛抱したもののあ、有りやしませんぜ。え？　そ



りや来る。幾人いくたりも来る。来る事は来るが、みんな驚いて逃げ出しちまいます。全く普通なのものの出来る業わざじゃありませんよ。悪い事は云わないから御帰んなさい。なに坑夫をしなくったって、口過くちすぎだけなら骨は折れませんかやあ」

原さんはここに至って、胡坐あぐらを崩くずして尻を宙に上げかけた。自分はどうしても落第らくだいしそうな安排あんばいである。大いに困った。困った結果、坑夫と云う事から氣を離して、自分だけを検査して見ると、——何だか急に寒くなつた。袷あわせはさっきの雨で濡ぬれている。洋袴ズボン下したは穿はいていない。東京の五月もこの山の奥へ来るとまるで二月か三月の氣候である。坂を登っている間こそ体温でさほどにも思わなかつた。原さんに拒絶されるまでは氣が張っていたから、好かつた。しかし飯場はんばへ来て休息した上に、坑夫になる見込がほとんど切れたとなると、情なさけないのが寒いのと合併して急に顫ふるえ出した。その時の自分の顔色は定めし見るに堪たえんほど醜いもんだつたろう。この時自分はまた何となく、今しがた自分を置去おきざりにして、挨拶あいさつもしずに出て行つた長蔵さんが恋しくなつた。長蔵さんがいたら、何とか尽力して坑夫にしてくれるだろう。よし坑夫にしてくれないまでも、どうか片をつけてくれるだろう。汽車賃を出してくれたくらいだから、方角のわかる所までくらいは送り出してくれそうなのだ。墓口がぐちを長蔵さんに取られてから、懷中ふでちうには一文

もない。帰るにしても、帰る途中で腹が減って山の中で行倒ゆきだおれになるまでだ。いつその事今から長蔵さんを追掛けて見ようか。飯場飯場を探して歩いたら逢あえない事もないだろう。逢ってこれこれだと泣きついたら、今までの交際つきあいもある事だから、好い智慧ちえを貸してくれまいものでもない。しかし別れ際に挨拶さえしない男だから、ひよつとすると……自分は原さんの前で実はこんな閑ひまな事を、非常に忙しく、ぐるぐる考えていた。好きな原さんが前にいるのに、あんまり下さらない、しかも消えてなくなった長蔵さんばかりを相談相手のように思い込んだのは、どう云う理由わけだろう。こんな事はよくあるもんだから、いざと云う場合に、敵は敵、味方は味方と板行はんこうで押したように考えないで、敵のうちで味方を探したり、味方のうちで敵を見露みあらわしたり、片方かたつばづかないように心を自由に活動かどうさせなくってはいけない。

弱輩じやくはいな自分にはこの機会きかいがまだ呑み込めなかったもんだから、原さんの前に立つて顫ふるえながら、へどもどしていると、原さんも気の毒になったと見えて、

「あなたさえ帰る気なら、及ばずながら相談になろうじやありませんか」

と向うから口を掛けてくれた。こう切つて出られた時に、自分ははつとありがたく感じた。ばかりなら当り前だがはつと気がついた。——自分の相談相手は自分の志望を拒絶

するこの原さんを除いて、ほかにないんだと気がついた。気がつくと同時にまた口が利けなくなった。是非坑夫にしてくれとも、帰るから旅費を貸してくれとも言いかねて、やつぱり立ちすくんでいた。気がついても何にもならない、ただ右の手で拳骨を拵えて寒い鼻の下を擦ったように記憶している。自分はその前寄席へ行つて、よく噺家がこんな手真似をするのを見た事があるが、自分でその通りを実行したのは、これが始めてである。この手真似を見ていた原さんが、今度はこう云った。

「失礼ながら旅費のことなら、心配しなくつても好ござんす。どうかして上げますから」

旅費は無論ない。一厘たりとも金気は肌に着いていない。のたれ死を覚悟の前でも、金は持つてる方が心丈夫だ。まして慢性の自滅で満足する今の自分には、たとい白銅一箇の草鞋錢でも大切である。帰ると事がきまりさえすれば、頭を地に摺りつけても、原さんから旅費を恵んで貰ったろう。実際こうなると廉恥も品格もあつたもんじやない。どんな不体裁な貰い方でもする。——大抵の人がそうなるだろう。またそうなつてしかるべきである。——しかしけつして褒められた始末じやない。自分がこんな事を露骨にかくのは、ただ人間の正体を、事実なりに書くんで、書いて得意がるのとは訳が違ふ。

人間の生地きじはこれだから、これで差支さしつかえないなどと主張するのは、練羊羹ねりようかんの生地は小豆あずきだから、羊羹の代りに生小豆なまを嚙かんでれば差支ないと結論するのと同じ事だ。自分はこの時の有様を思い出すたびに、なんで、あんな、さもない料簡りょうけんになったものかと、吾われながら愛想あいそが尽きる。こう云う下卑げびた料簡を起さずに、一生を暮す事のできる人は、経験の足りない人かも知れないが、幸な人である。また自分らよりも遙はるかに高尚な人である。生小豆のまづさ加減を知らないで、生涯しょうがい練羊羹ばかり味わつてゐる結構な人である。

自分は、も少しの事で、手を合せて、見ず知らずの飯場頭はんばがしらからわずかの合力ごうりきを仰ぐところであつた。それをやつとの事で喰い止めたのは、せつかくの好意こういで調べてくれる金も、二三日木賃宿にさんちきちんやどで夜露を凌しのげば、すぐ無くなつて、無くなつた暁には、また当途あてどもなく流れ出さなければならぬと、冥々めいめいのうちに自覺したからである。自分は屑くずよく涙金なみだきんを断つた。断つた表向は律義りちぎにも見える。自分もそう考えるが、よくよく詮索せんさくすると、慾てんびんの天秤てんびんに懸かけた、利害の判断から出ている事はたしかである。その証拠には補助こたわを断ると同時に、自分は、こんな事を言い出した。

「その代り坑夫に使つて下さい。せつかく来たんだから、僕はどうしてもやつて見る気なんですから」

「随分酔興すいぎようですね」

と原さんは首を傾かしげて、自分を見つめていたが、やがて溜息のような声を出して、

「じゃ、どうしても帰る気はないんですね」

と云った。

「帰るつたつて、帰る所がないんです」

「だって……」

「家うちなんかないんです。坑夫になれなければ乞食こじきでもするより仕方がないです」

こんな押問答を二三度重ねている中に、口を利きくのが大変楽になつて来た。これは思い切つて、無理な言葉を、出でにくいと知りながら、我慢して使つた結果、おのずと拍子ひょうしに乗つて来た勢いに違ちがひないんだから、まあ器械的变化と見倣みなしても差支さしつかえなからうが、妙なもので、その器械的变化が、逆戻りに自分の精神に影響を及ぼして来た。自分の言いたい事が何の苦もなく口を出るに連れて——ある人はある場合に、自分の言いたくない事までも調子づいてべらべら饒舌しゃべる。舌はかほどに器械的なものである。——この器械が使用の結果加速度の効力を得るに連れて、自分はだんだん大胆になつて来た。

いや、大胆になつたから饒舌しゃべれたんだろう、君の云う事は顛倒あべこべじゃないかとやり込め

る気なら、そうして置いてもいい。いいが、それはあまり陳腐ちんぷでかつ時々嘘うそになる。嘘と陳腐で満足しないものは自分の言分をもっともと首肯うなずくだろう。

自分は大胆になった。大胆になるに連れて、どうしても坑夫に住み込んでやろうと決心した。また饒舌まぎわっておれば必ず坑夫になれるに違ないと自覺して来た。一昨日家おとというちを飛び出す間際まぎわまでは、夢にも坑夫になろうと云う分別は出なかった。ばかりではない、坑夫になるための駆落かけおちと事がきまっていたならば、何となく恥ずかしくなつて、まあ一週間よく考えた上にと、出奔しゅっぽんの時期を曖昧あいまいに延ばしたかもしれない。逃亡はする。逃亡はするが、紳士の逃亡で、人だか土塊つちくれだか分らない坑掘あなほりになり下る目的の逃亡とは、何不そだ足なく生育そだつた自分の頭には影さえ射さなかつたろう。ところが原さんの前で寒い奥歯を噛かみしめながら、しよう事なしの押問答をしているうちに、自分はどうかあつても坑夫になるべき運命、否天職いなを帯びてるような気がし出した。この山とこの雲とこの雨を凌しのいで来たからには、是非共坑夫にならなければ済まない。万一採用されない暁には自分に対して面目がない。——読者は笑うだろう。しかし自分は当時の心情を真面目まじめに書いてるんだから、人が見ておかしければおかしいほど、その時の自分に対して気の毒になる。

妙な意地だか、まけおし負惜みだか、それとも行倒れになるのが怖くつて、帰り切れなかったためだか、——その辺は自分にも曖昧だが、とにかく自分は、もつとも熱心な語調で原さんを口説いた。

「……そう云わずに使つて下さい。實際僕が不適當なら仕方がないが、まだやつて見ない事なんだから——せっかく山を越して遠方をわざわざ来た甲斐に、一日でも二日でも、いいですから、まあ試しだと思つて使つて下さい。その上で、とうてい役に立たない事がきまれば帰ります。きっと帰ります。僕だって、それだけの仕事が出来ないのに、押を強く御厄介になつてゐる気はないんですから。僕は十九です。まだ若いです。働き盛りです……」

と昨日茶店の神さんが云つた通りをそのまま図に乗つて述べ立てた。後から考えると、これはむしろ人が自分を評する言葉で、自分が自分を吹聴する文句ではなかった。そこで原さんは少し笑い出した。

「それほどお望みなら仕方がない。何も御縁だ。まあやつて御覧なさるが好い。その代り苦しいですよ」

と原さんは何気なく裏の赤い山を覗くように見上げた。おおかた天氣模様でも見たんだ

ろう。自分も原さんといっしょに山の方へ眼を移した。雨は上がったが、暗く曇っている。薄気味の悪いほど怪しい山の中の空<sup>そらあい</sup>合だ。この一瞬時に、自分の願<sup>かな</sup>が叶って、自分はず山の中の人となった。この時「その代り苦しいですよ」と云った原さんの言葉が、妙に気に掛り出した。人は、ようやくの思いで刻<sup>こっか</sup>下の志を遂<sup>と</sup>げると、すぐ反動が来て、かえって志を遂げた事が急に恨<sup>うら</sup>めしくなる場合がある。自分が望み通りここへ落ちつける口頭の辞令を受け取った時の感じはいささかこれに類している。

「じゃね」——原さんは語調を改めて話し出した。——「じゃね。何しろ明日<sup>あした</sup>の朝シキへ這<sup>はい</sup>入って御覧なさい。案内を一人つけて上げるから。——それから——そうだ、その前に話して置かなくっちゃなりませんかね。一口に坑夫と云うと、訳もない仕事のよう<sup>な</sup>に思われましようが、なかなか外で聞<sup>き</sup>いてるような生<sup>なま</sup>容易<sup>やさし</sup>い業<sup>わざ</sup>じゃないんで。まあ取っつけから坑夫になるなあ」と云って自分の顔を眺<sup>なが</sup>めていたが、やがて、  
「その体格じゃ、ちつとむずかしいかも知れませんね。坑夫でなくっても、好<sup>よ</sup>うがすかい」

と気の毒そうに聞いた。坑夫になるまでには相当の階級と練習を積まなくっちゃならないと云う事がここで始めて分った。なるほど長蔵さんが坑夫坑夫と、さも名誉らしく坑



夫を振り廻したはずだ。

「坑夫のほかには何かあるんですか。ここにいるものは、みんな坑夫じゃないんですか」と念のために聞いて見た。すると原さんは、自分を馬鹿にした様子もなく、すぐそのわけを説明してくれた。

「銅山やまにはね、一万人も這入っててね。それが掘子ほりこに、シ・チ・ユ・ウに、山市やまいちに、坑夫と、こう四つに分れてるんでさあ。掘子ほりこってえな、一人前の坑夫に使えねえ奴になるんで、まあ坑夫の下働したはたらきですね。シ・チ・ユ・ウは早く云うとシ・キの内なかの大工見たようなものかね。それから山市やまいちだが、こいつは、ただ石塊いしづみをこつこつ欠いてるだけで、おもに子供——さつきも一人来たでしょう。ああ云うのが当分坑夫の見習にやる仕事さね。まあざつと、こんなものですよ。それで坑夫となると請負うけおい仕事だから、間まが好いと日に一円にも二円にも当る事もあるが、掘子は日当で年ねんが年中三十五銭で辛抱しなければならぬ。しかもそのうち五分ごぶは親方が取っちゃまって、病気でもしようもんなら手当が半分だから十七銭五厘ですね。それで蒲団ふとんの損料が一枚三銭——寒いときは是非二枚要いるから、都合で六銭と、それに飯代が一日十四銭五厘、御菜おさいは別ですよ。——どうです。もし坑夫にいけなかったら、掘子にでもなる気はありますかね」

実のところはなりませんと勢いよく出る元氣はなかったが、ここまで来れば、今更（いまさら）どうしたって否（いや）だと断られた義理のもんじゃない。そこで、出来るだけ景氣よく、

「なります」

と答えてしまった。原さんにはこの答が断然たる決心のように受けとれたか、それとも、瘠（やせ）我慢（がまん）のつけ景氣（けいき）のごとく響いたか、その辺（へん）は確（しか）と分らないが、何しろこの一言（いちごん）を聞いた原さんは、機嫌よく、

「じゃまあ、御上（おあ）がんなさい。そうして、あした人をつけて上げるから、まあシキへ這入（はい）って御覧（ごらん）なさるがいい。何しろ一万人もいて、こんなに組々に分れているんだから、飯場（はんば）を一つでも預かつてると、毎日毎日何だかだつて、うるさい事ばかりだね。せっかく頼（たの）むから置いてやる、すぐ逃げる。——一日（いちにち）に二三人はきつと逃げますよ。そうかと云（い）つて、おとなしくしているかと思うと、病氣（びやうき）になつて、死んじまう奴（やつ）が出て来て——どうも始末（はつまつ）に行かねえもんでさあ。葬（ひょう）いばかりでも日に五六組無い事あ、滅多（めった）にないからね。まあやる氣なら本氣にやつて御覧（ごらん）なさい。腰（こし）を掛けてちや、足（あし）が草臥（くた）れるだらう。こつちへ御上（ごあがり）」

この逐一（ちくいち）を聞いていた自分はたとい、掘子（ほりこ）だろうが、山市（やまいち）だろうが一生懸命（いっしょうけんめい）に働（はたら）かな

くっちゃあ、原さんに対して済まない仕儀になつて来た。そこで心のうちに、原さんの迷惑になるような不都合はけつしてしまいときめた。何しろ年が十九だから正直なものだつた。

そこで原さんの云う通り、足を拭いて尻をおろしているうちに、奥の方から婆さんが出て来て、——この婆さんの出ようがはなはだ突然で、ちよつと驚いたが、

「こつちへ御出なさい」

と云うから、好加減に御辞儀をして、後から尾いて行つた。小作な婆さんで、後姿の華奢な割合には、ぴんぴん跳ねるように活潑な歩き方をする。幅の狭い茶色の帯をちよつきり結にむすんで、なけなしの髪を頸窩へ片づけてその心棒に鉛色の簪を刺している。そうして襷掛であつた。何でも台所か——台所がなければ、——奥の方で、用事の真つ最後に、案内のため呼び出されたから、こう急がしそうに尻を振るんだらう。それとも山育だからかしら。いや、飯場だから優長にしちやいられないせいだらう。して見ると、今日から飯場の飯を食い出す以上は自分だつて安閑としちやいられない。万事この婆さんの型で行かなくつちやなるまい。——なるまい。——と力を入れて、うんと思つたら、さすがに草臥れた手足が急になるまいで充満して、頭と胸の組織がちよつと変つ

たような気分になった。その勢いで広い階子段を、案内に応じて、すとなすとなと景氣よく登って行つた。が自分の頭が階子段から、ぬつと一尺ばかり出るや否や、この決心が、ぐうと退避いだ。

胸から上を階子段の上へ出して、二階を見渡すと驚いた。畳数は何十枚だか知らないが遙の突き当りまで敷き詰めてあつて、その間には一重の仕切りさえ見えない。ちょうど柔道の道場か、浪花節の席亭のような恰好で、しかも広さは倍も三倍もある。だから、ただ駄々っ広い感じばかりで、畳の上でもまるで野原へ出たときやあ思えない。それだけでも驚く価値は十分あるが、その広い原の中に大きな囲炉裏が二つ切つてある、そこへ人間が約十四五人ずつかたまっている。自分の決心が退避だと云うのは、卑怯な話だが、全くこの人間にあつたらしい。平生から強がつていたにはいたが、若輩の事だから、見ず知らずの多勢の席へ滅多に首を出した事はない。晴の場所となると、ただでさえもじもじする。ところへもつて来て、突然坑夫の団体に生擒られたんだから、この黒い塊を見るが早いか、いささか辟易じまった。それも、ただの人間ならいい。と云つちや意味がよく通じない。——ただの人間が、坑夫になつてゐるなら差支ない。ところが自分の胸から上が、階子段を出ると、等しく、この塊の各部分が、申し合

せたように、こつちを向いた。その顔が——実はその顔で全く畏縮（いしゆく）してしまった。と云うのはその顔がただの顔じゃない。ただの人間の顔じゃない。純然たる坑夫の顔であつた。そう云うより別に形容しようがない。坑夫の顔はどんなだろうと云う好奇心のあるものは、行つて見るより外に致し方がない。それでも是非説明して見ると云うなら、ざつと話すが、——頬骨（ほおぼね）がだんだん高く聳（そび）えてくる。顎（あご）が競（せ）り出す。同時に左右に突（つ）張（は）る。眼（め）が壺（つぼ）のように引ッ込んで、眼球（めだま）を遠慮なく、奥の方へ吸いつけちまう。小鼻（こび）が落ちる。——要するに肉と云う肉がみんな退却して、骨と云う骨がごとく呐喊（とつかん）展開（りようりよう）するとでも評（は）したら好（よ）かろう。顔の骨（ほ）だか、骨の顔（ほ）だか分らないくらいに、稜々（りようりよう）たるものである。劇（はげ）しい労役（らうえき）の結果早く年を取るんだとも解釈は出来るが、ただ天然自然に年を取つたつて、ああなるもんじやない。丸味（ま）とか、温味（あたかみ）とか、優味（やさしみ）とか云うものは薬（くすり）にしたくつても、探（た）し出（だ）せない。まあ一口（ひとくち）に云うと獐（じよう）猛（もう）だ。不思議にもこの獐（じよう）猛（もう）な相（さう）が一列（いれつ）体の共有性（くうやうせい）になつてい（い）ると見（み）えて、圉（い）炉（ろ）裏（り）の傍（はた）の黒（くろ）いもの（もの）が等（とう）しく自分（自分）の方（ほう）を向（む）くと、またたく間（ま）に獐（じよう）猛（もう）な顔（か）が十四五（しうご）揃（そろ）つた。向（む）うの圉（い）炉（ろ）裏（り）を取捲（とりま）いてる連中（れんちゆう）も同じ顔（か）に違（ちが）いない。さつき坂（さか）を上（あ）がつてくるとき、長屋（ぢやうや）の窓（まど）から自分（自分）を見下（みおろ）していた顔（か）も全くこれである。して見（み）ると組々（ぐぐ）の長屋（ぢやうや）に住（す）んでゐる総勢（そうせい）一万人（いちまんにん）の顔（か）はことごとく獐（じよう）猛（もう）なんだ

ろう。自分は全く退避<sup>ひる</sup>んだ。

この時婆さんが後<sup>うしろ</sup>を振り返って、

「こつちへおいでなさい」

と、もどかしそうに云うから、度胸<sup>す</sup>を据えて、獐<sup>さ</sup>猛<sup>まう</sup>の方へ近づいて行つた。ようやく囲  
炉裏<sup>はた</sup>の傍<sup>はた</sup>まで来ると、婆さんが、今度は、

「まあここへ御坐<sup>おすわ</sup>んなさい」

と差<sup>さ</sup>しずをしたが、ただ好加減<sup>いいかげん</sup>な所へ坐れと云うだけで、別に設けの席も何もないんだ  
から、自分は黒い塊<sup>かたまり</sup>りを避<sup>さ</sup>けて、たった一人畳の上へ坐つた。この間獐<sup>さ</sup>猛<sup>まう</sup>な眼は、始終<sup>しじゅう</sup>  
自分に喰<sup>く</sup>つっている。遠慮<sup>えんよ</sup>も何もありません。そうして誰も口<sup>くち</sup>を利<sup>き</sup>くものがない。  
取附端<sup>とりつきは</sup>を見出<sup>みいだ</sup>すまでは、団体の中へ交り込む訳にも行かず、ぼつねんと独<sup>ひと</sup>りぼつちで離  
れているのは、獐<sup>さ</sup>猛<sup>まう</sup>の目標<sup>めじるし</sup>となるばかりだし、大いに困つた。婆さんは、自分を紹介す  
る段<sup>はしご</sup>じゃない、器械<sup>きかい</sup>的に「ここへ坐れ」と云つたなり、ちよつ切り結びの尻<sup>しり</sup>を振り立て  
て階<sup>はしご</sup>子<sup>ご</sup>段<sup>だん</sup>を降りて行つてしまった。広い寄席<sup>よせ</sup>の真中<sup>まな</sup>にたった一人取り残されて、楽屋<sup>がくや</sup>の  
出方<sup>でかた</sup>一同<sup>いどう</sup>から、冷かされてるようなものだ、手持<sup>てもち</sup>無沙汰<sup>ぶさた</sup>は無<sup>な</sup>論<sup>ろん</sup>である。ことさら今の自  
分に取つては心細い。のみならず拾<sup>あわせ</sup>一枚<sup>まい</sup>ではなはだ寒い。寒いのは、この五月の空に、

かんかん炭を焼いて、獐猛共が囲炉裏へあたってるんでも分る。自分は仕方がないから、れ隠しに襯衣の釦をはずして腋の下へ手を入れたり、膝を立てて、足の親指を抓つて見たり、あるいは腿の所を両手で揉んで見たり、いろいろやっていた。こう云う時に、落つた顔をして——顔ばかりじゃいけない、心から落ちついて、平気で坐つて修業をして置かないと、大きな損だ。しかし、十九や、そこいらではどうてい覚束ない芸だから、自分はやむを得ず。前記の通りいろいろ馬鹿な真似をしていると、突然、

「おい」

と呼んだものがある。自分はこの時ちようど下を向いて鳴海絞の兵児帯を締め直していたが、この声を聞くや否や、電気仕掛の顔のように、首筋が急に釣った。見るとさっきの顔揃で、眼がみんなこつちを向いて、光ってる。「おい」と云う声は、どの顔から出たものか分らないが、どの顔から出たにしても大した変りはない。どの顔も獐猛で、よく見るとその獐猛のうちに、軽侮と、嘲弄と、好奇の念が判然と彫りつけてあつたのは、首を上げる途端に発明した事実で、発明するや否や、非常に不愉快に感じた事実である。自分は仕方がないから、首を上げたまま、「おい」の声がもう一遍出るのを待っていた。この間が約何秒かつたか知らないが、とにかく予期の状態で一定の姿勢に

おったものらしい。すると、いきなり、

「やに澄すますねえ」

と云ったものがある。この声はさっきの「おい」よりも少し皴しやが枯れていたから、大方別人だろうと鑑定した。しかし返答をするべき性質たぢの言葉でないから——字で書くと普通のねえのように見えるが、実はなよの命令を俱利伽羅流くりからりゅうに崩くずしたんだから、はなはだ下等である。——それでやつぱり黙つてた。ただ内心では大いに驚いた。自分がここへ来て言葉を交したものは原さんと婆さんだけであるが、婆さんは女だから別として、原さんは思ったよりも叮嚀ていねいであつた。ところが原さんは飯場頭である。頭かしらですらこれだから、平の坑夫ひらは無論そう野卑ぞんざいじゃあるまいと思ひ込んでいた。だから、この悪口あくぐちが藪やぶから棒ぼうに飛んで来た時には、こいつはと退避ひるむ前に、まずおやつと毒氣を抜かれた。こゝでいつその事毒突返どくづきかえしたなら、袋叩ふくろたたきに逢あうか、または平等の交際が出来るか、どっちか早く片がついたかも知れないが、自分は何にも口答えをしなかつた。もともと東京生れだから、この際何とか受けるくらいは心得ていたんだろう。それにもかかわらず、兄あにいに類似した言語は無論、尋常の竹篋返しつぺいがえしさえ控えたのは、——相手にならないと先方さきを輕蔑けいべつしたためだろうか——あるいは怖こわくつて何とも云う度胸がなかつたんだろうか。自



分は前の方だと云いたい。しかし事實はどうも後の方らしい。とにかくも両方交つてたと云うのが一番穩おだやかのように思われる。世の中には輕蔑しながらも怖いものが沢山いくらもある。矛盾にやならない。

それはどっちにしたって構わないが、自分がこの悪口あくぐちを聞いたなり、おとなしく聞き流す料簡りょうかんと見て取った坑夫共は、面白そうにどつと笑った。こつちがおとなしければおとなしいほど、この笑は高く響いたに違ない。銅山やまを出れば、世間が相手にしてくれない返報に、たまたま普通の人間が銅山の中へ迷い込んで来たのを、これ幸いと嘲弄ちやうろうするのである。自分から云えば、この坑夫共が社会に対する恨みうらを、吾身一人わがみで引き受けた訳になる。銅山へ這入はいるまでは、自分こそ社会に立てない身体からだだと思ひ詰めていた。そこで飯場はんばへ上あがつて見ると、自分のような人間は仲間にしてやらないと云わんばかりの取扱いである。自分は普通の社会と坑夫の社会の間に立つて、立派に板挟みいたはさみとなった。だからこの十四五人の笑い声が、ほてるほど自分の顔の正面に起つた時は、悲しいと云うよりは、恥ずかしいと云うよりは、手持無沙汰てもちぶさたと云うよりは、情ないほど不人情な奴が揃そろつてると思つた。無教育は始めから知れている。教育がなければ予期出来ないほどの無理な注文はしないつもりだが、なんば坑夫だつて、親の胎内から持つて生れたまま

の、人間らしいところはあるだろうくらいに心得ていたんだから、この寸法に合わない笑声を聞くや否や、畜生奴ちくしょうめと思つた。俗語に云う怒おこつた時の畜生奴じゃない。人間と受取れない意味の畜生奴である。今では経験の結果、人間と畜生の距離がだいぶん詰つてから、このくらいの事をと、鈍い神経の方で相手にしないかも知れないが、何しろ十九年しか、使つていない新しい柔かい頭へこのわる笑がじんと来たんだから、切せうなかつた。自分ながら思い出すたびに、まことに痛わしいような、いじらしいような、その時の神経系統をそのまま真綿まわたに包くるんで大事にしまつて置いてやりたいような気がする。

この悪意に充みちた笑がようやく下火になると、

「御前おめえはどこだ」

と云う質問が出た。この質問を掛けたものは、自分から一番近い所に坐つていたから、声の出所でどころは判然はつきり分つた。浅黄色あさぎいろの手拭染てぬぐいじみた三尺帯を腰骨の上へ引き廻うしろむして、後向うしろむきの胡坐あぐらのまま、斜はすに顔だけこつちへ見せている。その片眼は生れつきの赤んべんで、おまけに結膜けつまくが一面に充血けつこうしている。

「僕は東京です」

と答えたら、赤んべんが、肉のない頬ほを凹へこまして、愚弄ぐろうの笑いを洩もらしながら、三軒置

いて隣りの坑夫をちよいと顎でしゃくつた。するとこの相図を受けた、願人坊主が、入  
れ替ってこんな事を云つた、

「僕だなんて——書生ッ坊だな。大方女郎買でもしてしくじつたんだろう。太え奴だ。  
全体この頃の書生ッ坊の風儀が悪くつていけねえ。そんな奴に辛抱が出来るもんか、早  
く帰れ。そんな瘡っけた腕でできる稼業じゃねえ」

自分はだまっていた。あんまり黙っていたので張合が抜けたせいか、わいわい冷かす  
のが少し静まつた。その時一人の坑夫——これは尋常な顔である。世間へ出しても普通  
に通用するくらいに眼鼻立が調っていた。自分は、冷かされながら、眼を上げて、黒い  
塊を見るたびに、人数やら、着物やら、獐猛の度合やらをだんだん腹に畳み込んでいた  
が、最初は総体の顔が総体に骨と眼でできた上に獸慾の脂が浮いているところばかり眼  
に着いて、どれも、これも差別がないように思われた。それが三度四度と重なるにつけ  
て、四人五人と人相の区別ができるに連れて、この坑夫だけが一際目立って見えるよう  
になった。年はまだ三十にはなるまい。体格は倔強である。眉毛と鼻の根と落ち合う所  
が、一段奥へ引っ込んで、始終鼻眼鏡で圧しつけてるように見える。そこに疳癬が拘泥  
していそうだが、これがために獐猛の度はかえって減ずると云つても好いような特徴で

あつた。——この坑夫が始めてこの時口を利いた。き——

「なぜこんな所へ来た。来たつて仕方がないぜ。儲もうかる所じゃない。ここにゐる奴あ、みんな食く話わものばかりだ。早く帰るが好かろう。帰つて新聞配達でもするがいい。おれも元はこれで学校へも通かつたもんだが、放蕩ほうとうの結果とうとう、シキの飯を食うようになつちまつた。おれのようになつたが最後もう駄目だ。帰ろうたつて、帰れなくなる。だから今のうちに東京へ歸つて新聞配達をしろ。書生はとてひとも一月と辛抱は出来ないよ。悪い事は云わねえから歸れ。分つたろう」

これは比較的眞面目まじめな忠告であつた。この忠告の最中は、さすがの癡惡派どうあくはもおとなしく交まつ返しもせずまぜに聞いていた。その惰性で忠告が済んだあとも、一時は静であつた。もつともこれはこの坑夫に多少の勢力があるんで、その勢力に対しての遠慮かも知れないと勘づいた。その時自分は何となく心の底で愉快だった。この坑夫だつて、ほかの坑夫だつて、人相にこそ少しの變化はあれ、やつぱり一つ穴でこつこつ鉤塊あらがねを欠いている分の事だろう。そう芸うに巧拙こうせつのあるはずはない。して見ると、この男の勢力は全く字が読めて、物が解つて、分別があつて——一口に云うと教育を受けたせいに違ない。自分は今こんなに馬鹿にされている。ほとんど最下等の労働者にさえ齒よわされない人非人にんびにんとし

て、多勢たぜいの侮辱を受けている。しかし一度この社会に首を突つ込んで、獐猛組どうもうぐみの一人となりすましたら、一月二月と暮して行くうちには、この男くらの勢力を得る事はできるかも知れない。できるだろう。できるにきまつてるとまで感じた。だから、いくら誰が何と云つても帰るまい、きつとこの社会で一人前以上になつて成功して見せる。――随分思い切つてつまらない考えを起したもんだが、今から見ても、多少論理には叶かなつていようだ。そこでこの坑夫の忠告には謹つつしんで耳を傾かたぶけていたが、別段先方の注文通りに、では帰りましょうと云う返事もしなかつた。そのうちいったん静まりかけた愚弄ぐろうの舌したがまた動き出した。

「いる気なら置いてやるが、ここにや、それぞれ掟おきてがあるから呑み込んで置かなくっちゃ迷惑だぜ」

と一人が云うから、

「どんな掟ですか」

と聞くと、

「馬鹿だなあ。親分もあり兄弟分きょういでんぶんもあるじゃねえか」

と、大変な大きな声を出した。

「親分たどんなもんですか」

と質問して見た。実はあまりがみがみ云うから、黙っていようかしらんとも思つたけれども、万一掟を破つて、あとで苛い目に逢うのが怖いから、まあ聞いて見た。すると他の坑夫が、すぐ、返事をした。

「しよしのねえ奴だな。親分を知らねえのか。親分も兄弟分も知らねえで、坑夫になろうなんて料簡違えだ。早く帰れ」

「親分も兄弟分もいるから、だから、儲けようたつて、そう旨かあ行かねえ。帰れ」

「儲かるもんか帰るが好い」

「帰れ」

「帰れ」

しきりに帰れと云う。しかも實際自分のためを思つて帰れと云うんじゃない。仲間入をさせてやらないから出て行けと云うのである。さぞ儲けたいだろうが、そうは問屋で卸さない、こちとらだけで儲ける仕事なんだから、諦めて早く帰れと云うのである。したがってどこへ帰れとも云わない。川の底でも、穴の中でも構わない勝手な所へ帰れと云うのである。自分は黙っていた。

この形勢がこのままで続いたら、どんな事にたち至ったか思いやられる。敵はこの囲<sup>い</sup>炉裏<sup>ろり</sup>の周囲<sup>まわり</sup>ばかりにやいない。さつきちよつと話した通り、向うの方にも大きな輪になつて、黒く塊<sup>かたまり</sup>つてゐる。こつちの団体だけですら持ち扱つてゐるところへ、あつちの群勢<sup>ぐんぜい</sup>が加勢したら大事<sup>だいじ</sup>である。自分は愚弄<sup>ぐろう</sup>されながらも、時々横目を使つて、未来の敵——こうなると、どれもこれも人間でさえあれば、敵と認定してしまう。——遠方にはおるが、そろそろ押し寄せて来そうな未来の敵を、見ていた。かように自分の心が、左右前後と離れ離れ<sup>はな</sup>になつて、しかも独立ができないものだから、物の後<sup>あと</sup>を追掛<sup>おっか</sup>け、追廻<sup>わ</sup>わしているほど辛い事はない。なんでも敵に逢<sup>あ</sup>つたら敵を呑<sup>の</sup>むに限る。呑む事ができなければ呑まれてしまふが好い。もし両方共困難ならふつりと縁<sup>き</sup>を截<sup>き</sup>つて、独立自尊の態度で敵を見ているがいい。敵と融合する事もできず、敵の勢力範囲外に心を持つてく事も出来ず、しかも敵の尻<sup>か</sup>を嗅<sup>か</sup>がなければならなくなると、はなはだしき損となる。したがつてもつとも下等である。自分はこう云う場合にたびたび遭遇して、いろいろな活路を研究して見たが、研究したほどに、心が云う事を聞かない。だからここに申す三策は、みんな釈迦<sup>しゃか</sup>の空説法<sup>からげっぽう</sup>である。もし講釈をしないでも知れ切つてゐる陳説<sup>ちんせつ</sup>なら、なおさら言うだけが野暮<sup>やぼ</sup>になる。どうも正式の學問をしないと、こう云う所へ来て、取捨の

區別がつかなくって困る。

自分が四方八方に気を配って、自分の存在を最高度に縮小して恐れ入っていると、  
「御膳を御上がんなさい」

と云う婆さんの声が聞えた。いつの間に婆さんが上がって来たんだか、自分の魂が鳩の卵のように小さくなって、萎縮した真最中だったから、御膳の聲が耳に入るまではまるで気がつかなかった。見ると剥げた御膳の上に縁の欠けた茶碗が伏せてある。小さい飯櫃も乗っている。箸は赤と黄に塗り分けてあるが、黄色い方の漆が半分ほど落ちて木地が全く出ている。御菜には糸蒟蒻が一皿ついていた。自分は伏目になってこの御膳の光景を見渡した時、大いに食いたくなつた。実は今朝から水一滴も口へ入れていない。胃は全く空である。もし空でなければ、昨日食つた揚げ饅頭と薩摩芋があるばかりである。飯の気を離れる事約二昼夜になるんだから、いかに魂が萎縮しているこの際でも、御櫃の影を見るや否や食欲は猛然として咽喉元まで詰め寄せて来た。そこで、冷かしも、交ぜっ返しも気に掛ける暇なく、見栄も糸瓜も棒に振って、いきなり、お櫃からしゃくつて茶碗へ一杯盛り上げた。その手数さえ面倒なくらい待ち遠しいほどであつたが、例の剥箸を取り上げて、茶碗から飯をすくい出そうとする段になつて——おやと驚いた。



ちつともすくえない。指の股またに力を入れて箸をうんと底まで突っ込んで、今度こそはと、持上げて見たが、やっぱり駄目だ。飯はつるつると箸の先から落ちて、けっして茶碗の縁ふちを離れようとしない。十九年来いまだかつてない経験だから、あまりの不思議に、この仕損しくじりを二三度繰り返して見た上で、はてなと箸はしを休めて考えた。おそらく狐に撮つままれたような風であつたんだろう。見ていた坑夫共はまたぞろ、どつと笑い出した。自分はこの声を聞くや否や、いきなり茶碗を口へつけた。そうして光沢つやのない飯を一口掻かき込んだ。すると笑い声よりも、坑夫よりも、空腹よりも、舌三寸の上だけへ魂が宿やどつたと思うくらいに変な味がした。飯とは無論受取れない。全く壁土である。この壁土が唾液つばきに和とけて、口いっぱいに広がった時の心持は云うに云われなかった。

「面つらあ見ろ。いい様さまだ」

と一人が云うと、

「御祭日おさいじつでもねえのに、銀米ぎんまいの氣でいやがらあ。だから帰けえれって教おせえてやるのに」

と他ほかのものが云う。

「南京米ナンキンめえの味も知らねえで、坑夫になろうなんて、頭りようけんちげえっから料簡りょうけん違ちがいだ」

とまた一人が云った。

自分は嘲弄ちやうろうのうちに、術じゆつなくこの南京米ナンキンまいを吞み下した。一口でやめようと思ったが、せつかく盛り込んだものを、食つてしまわないと、また冷かされるから、熊の胆いを吞む氣になつて、茶碗に盛つただけは奇麗きれいに腹の中へ入れた。全く食慾のためではない。昨日きのう食つた揚饅頭あげまんじゅうや、ふかし芋いもの方が、どのくらい御馳走ごちそうであつたか知れない。自分が南京米の味を知つたのは、生れてこれが始てである。

茶碗に盛つただけは、こう云う訳で、どうにか、こうにか片づけたが、二杯目は我慢まよにも盛う氣にならなかつたから、糸蒚いしじゆん菊だけを食つて箸を置く事にした。このくらい辛抱して無理に厭いやなものを口に入れてさえ、箸を置くや否や散々に嘲弄むかされた。その時は随分つらい事と思つたが、その後日ごに三度ずつは、必ずこの南京米むかに対わなくつちやならない身分となつたんで、さすがの壁土も慣なれるに連れて、いわゆる銀米と同じく、人類の食い得べきもの、否食つてしかるべき滋味と心得るようになってからは、剥膳はげぜんに向つて逡巡しりごみした当時がかえつて恥ずかしい氣持になつた。坑夫共の冷かしたのも万更無理ではない。今となると、こんな無經驗な貴族的の坑夫が一杯の南京米を苦に病やむところに廻り合めぐわせて、現状を目撃したら、ことに因よると、自分でさえ、笑うかも知れない。冷かさないまでも、善意に笑うだけの価値ねうちは十分あると思う。人はいろいろに変化

するもんだ。

南京米の事ばかり書いて済まないから、もうやめにするが、この時自分の失敗しくじりに対する冷評は、自然のままにして抛ほうつて置いたなら、どこまで続いたか分らない。ところへ急に金盞かなざんを叩たたき合せるような音がした。一度ではない。二度三度と聞いているうちに、じゃじゃん、じゃらんと時を句切くぎつて、拍子ひょうしを取りながら叩き立てて来る。すると今度は木唄きやりの声が聞え出した。純粹の木唄では無論ないが、自分の知つてゐる限りでは、まあ木唄と云うのが一番近いように思われる。この時冷評は一時にやんだ。ひっそりと静まり返る山の空氣に、じゃじゃん、じゃららんが鳴り渡る間を、一種異様に唄うたい囃はやして何物か近づいて来た。

「ジャン・ボーだ」

と一人が膝頭ひざかしらを打たないばかりに、大きな声を出すと、

「ジャン・ボーだ。ジャン・ボーだ」

と大勢口々に云いながら、黒い塊かたまりがばらばらになって、窓の方へ立つて行つた。自分は何がジャン・ボーなんだか分らないが、みんなの注意が、自分を離れると同時に、気分が急に暢達のんびりしたせいだ、自分もジャン・ボーを見たいと云う余裕ができて、余裕につれて元

氣も出來た。つくづく考えるに、人間の心は水のようなもので、押されると引き、引くと押して行く。始終手を出さない相撲をとつて暮らしていると云つても差支なからう。それで、みんなが立ち尽したあとから、自分も立つた。そうしてやつぱり窓の方へ歩いて行つた。黒い頭で下は塞がつている上から背伸をして見下すと、斜に曲つてゐる石垣の角から、紺の筒袖を着た男が二人出た。あとからまた二人出た。これはいずれも金盥を圧しつづして薄っ片にしたようなものを両手に一枚ずつ持つてゐる。ははあ、あれを叩くんだと思う拍子に、二人は両手をじゃじゃんと打ち合わせた。その不調和な音が切つ立つた石垣に突き当つて、後の禿山に響いて、まだやまないうちに、じゃらんとまた一組が後から鳴らし立てて現れた。たと思ふとまた現れる。今度は金盥を持つていない。その代り木唄——さつきは木唄と云つた。しかしこの時、彼らの揚げた声は、木唄と云わんよりはむしろ浪花節で咄喊するような稀代な調子であつた。

「おい金公はいねえか」

と、黒い頭の一つが怒鳴つた。後向だから顔は見えない。すると、

「うん金公に見せてやれ」

とすぐ応じた者がある。この言葉が終るか、終らない間に、五つ六つの黒い頭がずらり

とこつちを向いた。自分はまた何か云われる事と覚悟して仕方なしに、今までの態度で立っていると、不思議にも振り返った眼は自分の方に着いていない。広い部屋の片隅に遠く走った様子だから、何物がある事かと、自分も後を追つ懸けて、首を捻じ向けると、――寝ている。薄い布団をかけて一人寝ている。

「おい金州」

と一人が大きな声を出したが、寝ているものは返事をしない。

「おい金しゅう起きろやい」

と怒鳴つけるように呼んだが、まだ何とも返事がないので、三人ばかり窓を離れてとうとう迎に出掛けた。被つてゐる布団を手荒にめくると、細帯をした人間が見えた。同時に、

「起きろつてば、起きろやい。好いものを見せてやるから」

と云う声も聞えた。やがて横になつた男が、二人の肩に支えられて立ち上つた。そうしてこつちを向いた。その時、その刹那、その顔を一目見たばかりで自分は思わず慄とした。これはただ保養に寝ていた人ではない。全くの病人である。しかも自分だけで起居のできないような重体の病人である。年は五十に近い。髯は幾日も剃らないと見えて

ぼうぼうと延びたままである。いかな獐猛も、こう憔悴ると憐れになる。憐れになり過ぎて、逆にまた怖くなる。自分がこの顔を一目見た時の感じは憐れの極全く怖かった。

病人は二人に支えられながら、釣られるように、利かない足を運ばして、窓の方へ近寄ってくる。この有様を見ていた、窓際の多人数は、さも面白そうに囃し立てる。

「よう、金しゅう早く来いよ。今ジャン・ボーが通るところだ。早く来て見ろよ」

「己あジャン・ボーなんか見たかねえよ」

と病人は、無体に引き摺られながら、気のない声で返事をするうちに、見たいも、見たくないもありやしない。たちまち窓の障子の角まで圧しつけられてしまった。

じゃじゃん、じゃららんとジャン・ボーは知らん顔で石垣の所へ現れてくる。行列はまだ尽きないのかと、また背延びをして見下した時、自分は再び慄とした。金盥と金盥の間に、四角な早桶が挟まって、山道を宙に釣られて行く。上は白金巾で包んで、細い杉丸太を通した両端を、水でも一荷頼まれたように、容赦なく担いでいる。その担いでいるものまでも、こっちから見ると、例の唄を陽気にうたつてるように思われる。——自分はこの時始めてジャン・ボーの意味を理解した。生涯いかなる事があっても、けつして忘れられないほど痛切に理解した。ジャン・ボーは葬式である。坑夫、シチュウ、掘子、

山市やまいちに限って執行される、また執行されなければならない一種の葬式である。御経の文句を浪花節ななわぶしに唄うたって、金盃きんづぶの潰れるほどに音楽を入れて、一荷いっかの水と同じように棺桶かんとけをぶらつかせて——最後に、半死半生の病人を、無理矢理に引き摺り起して、否いやと云うのを抑えつけるばかりにしてまで見せてやる葬式である。まことに無邪氣きよくの極で、また冷刻の極である。

「金しゆう、どうだ、見えたか、面白いだろう」

と云ってる。病人は、

「うん、見えたから、床とこん所まで連れてって、寝かしてくれよ。後生ごしやうだから」

と頼んでいる。さっきの二人は再び病人を中へ挟んで、

「よっしよいよっしよい」

と云いながら、刻きざみ足に、布団ふとんの敷いてある所まで連れて行つた。

この時曇った空が、粉になつて落ちて来たかと思われるような雨が降り出した。ジャン・ポーはこの雨の中を敲たたき立てて町の方へ下くだって行く。大勢は

「また雨だ」

と云いながら、窓を立て切つて、各々囲炉裏めいめいろりの傍はたへ帰る。この混雑じさつ紛へさまざれに自分もいつの間ま

にか獐猛どうもうの仲間入りをして、火の近所まで寄る事が出来た。これは偶然の結果でもあり、また故意の所作しよさでもあった。と云うものは火の気がなくつてははなはだ寒い。拾一あわせ枚ではとても凌ぎ兼ねるほどの山の中だ。それに雨さえ降り出した。雨と云えば雨、霧と云えば霧と云われるくらいな微かな粒であるが、四方の秃山はげやまを罩こめ尽した上に、筒拔つつめけの空を塗り潰つぶして、しとどと落ちて来るんだから、家うちの中に坐まっていてさえ、糠ぬかよりも小さい湿り気しめけが、毛穴から腹の底へ沁しみ込むような心持である。火の気がなくつてはどうていやり切れるものじゃない。

自分が好い加減な所へ席を占めて、いささかながら囲炉裏のほとぼりを顔に受けていると、今度は存外にも度外視されて、思ったよりも調戯からかわれずに済んだ。これはこつちから進んで獐猛の仲間入りをしたため、向うでも普通の獐猛として取扱うべき奴だと勘弁してくれたのか、それとも先刻さつきのジャン・ボーで不意に気が変なりった成行ゆきとして、自分の事をしばらく忘れてくれたのか、または冷笑ひやかの種が尽きたか、あるいは毒突どくつくのに飽きたんだか、——何しろ自分が席を改めてから、自分の気は比較的楽になった。そうして囲炉裏の傍の話はやっぱりジャン・ボーで持ち切っていた。いろいろな声がこんな事を云う。——



「あのジャン・ボーはどこから出たんだろう」

「どこから出たって御ジャン・ボーだ」

「ことによると黒市組かも知れねえ。見当がそうだ」

「全体ジャン・ボーになつたらどこへ行くもんだろう」

「御寺よ。きまつてらあ」

「馬鹿にするねえ。御寺の先を聞いてるんだあな」

「そうよ、そりや寺限で留りつこねえ訳だ。どつかへ行くに違えねえ」

「だからよ。その行く先はどんな所だろうてえんだ。やっぱしこんな所かしら」

「そりや、人間の魂の行く所だもの、大抵は似た所に違えねえ」

「己もそう思つてる。行くとなりや、どうもほかへ行く訳がねえからな」

「いくら地獄だつて極楽だつて、やっぱり飯は食うんだろう」

「女もいるだろうか」

「女のいねえ国が世界にあるもんか」

ざっと、こんな談話だから、聞いているとめちやめちやである。それで始めのうちは冗談だと思つた。笑つても差支ないものと心得て、口の端をむずつかせながら、ちよつ

と様子を見渡したくらいであつた。ところが笑いたいの自分だけで、囲炉裏を取り捲まいている顔はいずれも、彫りつけたように堅くなっている。彼らは真剣の真面目で未来と云う大問題を論じていたのである。実に嘘うそとしか受け取れないほどの熱心が、各々の眉まゆの間に見えた。自分はこの時、この有様を一瞥いちべつして、さっきの笑いたかつた念慮をたちまちのうちに一変した。こんな向う見ずの無鉄砲な人間が——カ・ン・テ・ラを提さげて、シキの中へ下りれば、もう二度と日の目を見ない料簡りょうけんでいる人間が——人間の器械で、器械けだものの獣とも云うべきこの獐猛組どうもうぐみが、かほどに未来の事を気にしていようとは、まことに予想外であつた。して見ると、世間には、未来の保証をしてくれる宗教というものが入い用ようのはずだ。実際自分が眼を上げて、囲炉裏いろりのぐるりに胡坐あぐらをかいて並んだ連中を見渡した時には、遠慮に畏縮いしゆくが手伝てつて、七分方しちぶがたでき上つた笑いを急に崩くずしたと云う自覚は無論なかつた。ただ寄席よせを聞いてるつもりで眼を開けて見たら鼻の先に毘沙門様びしゃもんさまが大勢いて、これはと威儀を正さなければならぬ氣持であつた。一口に云うと、自分はこの時始めて、真面目な宗教心の種を見て、半獸半人の前にも嚴格の念を起したんだろう。その癖自分はいまだに宗教心と云うものを持つていない。

この時さっきの病人が、向うの隅でううんと唸うなり出した。その唸り声には無論特別の

意味はない。単に普通の病人の唸り声に過ぎんのだが、ジャンボの未来に屈託している連中には、一種のあやしい響のよう思われたんだろう。みんな眼と眼を見合した。

「金公きんこう苦しいのか」

と一人が大きな声で聞いた。病人は、ただ、

「ううん」

と云う。唸ってるのか、返事をしているのか判然しない。するとまた一人の坑夫が、

「そんなに鼻かみの事ばかり気にするなよ。どうせ取られちまったんだ。今更唸いまきったってどうなるもんか。質に入れた鼻だ。受出さなけりや流れるなあ当り前だ」

と、やっぱり囲炉裏いろりの傍そばへ坐ったまま、大きな声で慰なぐさめている。慰めてるんだか、悪口あくぐちを吐ついているんだか疑わしいくらいである。坑夫から云うと、どっちも同じ事なんだろう。病人はただうんと挨拶あいさつ——挨拶にもならない声を微かすかに出すばかりであった。そこで大勢は懸合かけあいにならない慰藉いしやをやめて、囲炉裏いろりの周囲まわりだけで舌したの用を弁じていた。しかし話題はまだ金さんを離れない。

「なあに、病気さえしなけりや、金公だって鼻を取られずに済むんだあな。元を云やあ、やっぱり自分が悪いからよ」

と一人が、金さんの病気をさも罪惡のように評するや否や、

「全くだ。自分が病氣をして金を借りて、その金が返せねえから、鼻を抵当に取られちまったんだから、正直のところ文句の附けようがねえ」  
と賛成したものがある。

「若干で抵当に入れたんだ」

と聞くと、向側から、

「五両だ」

と誰だか、簡潔に教えた。

「それで市の野郎が長屋へ下がって、金しゅうと入れ代った訳か。ハハハハ」

自分は囲炉裏の側に坐ってるのが苦痛であつた。背中の方がぞくぞくするほど寒いのに、腋の下から汗が出る。

「金しゅうも早く癒って、鼻を受け出したら好かろう」

「また、市と入れ代りか。世話あねえ」

「それよりか、うんと稼いで、もっと価に踏める抵当でも取った方が、氣が利いてらあ」

「違ねえ」  
ちげえ

と一人が云い出すのを相図に、みんなどつと笑った。自分はこの笑の中に包まれながら、どうしても笑い切れずに下を向いてしまった。見ると膝を並べて畏まつていた。馬鹿らしいと気がついて、胡坐に組み直して見た。しかし腹の中はけっして胡坐をかくほど悠長ではなかった。  
ゆうちよう

その内だんだん日暮に近くなつて来る。時間が移るばかりじゃない、天氣の具合と、山が囲んでるせいで早く暗くなる。黙つて聞いていると、雨垂の音もしないようだから、ことによると、雨はもう歇んだのかも知れない。しかしこの暗さでは、やつぱり降つてると云う方が当るだろう。窓は固り締め切つてある。戸外の模様は分りようがない。しかし暗くつて湿っぽい空氣が障子の紙を透して、一面に囲炉裏の周囲を襲つて来た。並んでゐる十四五人の顔がしだいしだいに漠然する。同時に囲炉裏の真中に山のようにくべた炭の色が、ほてり返つて、少しずつ赤く浮き出すように思われた。まるで、自分は坑の底へ滅入込んで行く、火はこれに反して坑からだんだん競り上がつて来る、——ざつと、そんな氣分がした。時にぱつと部屋中が明るくなった。見ると電氣灯が点いた。

「飯でも食うべえ」

と一人が云うと、みんな忘れものを思い出したように、

「飯を食って、また交替か」

「今日は少し寒いぞ」

「雨はまだ降ってるのか」

「どうだか、表へ出て仰向あおむいて見な」

などと、口々に罵ののりながら、立って、階下段はしごだんを下りて行つた。自分は広い部屋にたつた

一人残された。自分のほかにいるものは病人の金さんきんばかりである。この金さんがやつ

ぱり微かすかな声を出して唸うなってるようだ。自分は囲炉裏の前に手を翳かきして胡坐を組みなが

ら、横を向いて、金さんの方を見た。頭は出ていない。足も引つ込まっている。金さん

の身体からだは一枚の布団ふとんの中で、小さく平つたくなっている。気の毒なほど小さく平つたく

見えた。その内唸うちうなり声こえも、どうにか、こうにかやんだようだから、また顔の向むきを易かえ

て、囲炉裏の中を見詰めた。ところがなんだか金さんが氣に掛かつてたまらないから、

また横を向いた。すると金さんはやつぱり一枚の布団の中で、小さく平つたくなってい

る。そうして、森しんとしてゐる。生きてるのか、死んでるのか、ただ森しんとしてゐる。唸ら

れるのも、あんまり気味の好いもんじゃないが、こう静かにしていられるとなお心配になる。心配の極は怖くなつて、ちよつと立ち懸けたが、まあ大丈夫だろう、人間はそう急に死ぬもんじやないと、度胸を据えてまた尻を落ちつけた。

ところへ二三人、下からどやどやと階下段を上がつて来た。もう飯を済ましたんだろ  
うか、それにしては非常に早いかと、心持上がり段の方を眺めていると、思も寄らない  
ものが、現れた。――黒か紺か色の判然しない筒服を着ている。足は職人の穿くような  
細い股引で、色はやはり同じ紺である。それでカンテラを提げている。のみならず二人  
が二人とも泥だらけになつて、濡れてる。そうして、口を利かない。突つ立つたまま自  
分の方をぎろりと見た。まるで強盗としきやあ思えない。やがて、カンテラを抛り出す  
と、釦を外して、筒袖を脱いだ。股引も脱いだ。壁に掛けてある広袖を、めりやすの上  
から着て、尻の先に三尺帯をぐるりと回しながら、やつぱり無言のまま、二人してずし  
りずしりと降りて行つた。するとまた上がつて来た。今度のも濡れている。泥だらけで  
ある。カンテラを抛り出す。着物を着換える。ずしんずしんと降りて行く。とまた上  
がつて来る。こう云う風に入代り、入代りして、何でもよほど来た。いずれも底の方か  
ら眼球を光らして、一遍だけはきつと自分を見た。中には、

「手前は新前だな」  
てめえ しんめえ

と云ったものもある。自分はただ、

「ええ」

と答えて置いた。さいわ幸い今度はさっきのようにむやみには冷やかされずに、まあ無難に済んだ。上がって来るものも、来るものも、みんな急いで降りて行くんで、調戲う暇がなかったんだらう。その代り一人に一度ずつは必ず睨まれた。にらそうこうしている内に、上がって来るものがようやく絶えたから、自分はようやく寛容いだ思ひをして、囲炉裏の炭の赤くなつたのを見詰めて、いろいろ考え出した。もちろん纏まりようのない、かつ考えれば考えるほど馬鹿になる考えだが、火を見詰ていると、炭の中にそう云う妄想がちらちらちら燃えてくるんだから仕方がない。とうとう自分の魂が赤い炭の中へ拔出して、火気に煽られながら、むやみに踊をおどつてゐるような変な心持になつた時に、突然、

「草臥れたらうから、もう御休みなさい」  
くたび

と云われた。

見ると、さっきの婆さんが、立っている。やっぱり襷掛のままである。いつの間に上



がつて来たものか、ちつとも気がつかなかった。自分の魂が遠慮なく火の中を馳け廻つて、艶子さんになったり、澄江さんになったり、親爺になったり、金さんになったり、――被布やら、廂髪やら、赤毛布やら、唸り声やら、揚饅頭やら、華嚴の滝やら――幾多無数の幻影が、囲炉裏の中に躍り狂つて、立ち騰る火の気の裏に追いつ追われつ、日向に浮かぶ塵と思われるまで夥しく出て来た最中に、はつと気がついたんだから、眼前にいる婆さんが、不思議なくらい変であつた。しかし寝ろと云う注意だけは明かに耳に聞えたに違ないから、自分はただ、

「ええ」

と答えた。すると婆さんは後ろの戸棚を指して、

「布団は、あすこに這入つてゐるから、独で出して御掛けなさい。一枚三錢ずつだ。寒いから二枚はいるでしょう」

と聞くから、また

「ええ」

と答えたら、婆さんは、それ限何にも云わずに、降りて行つた。これで、自分は寝てもいいと云う許可を得たから、正式に横になつても剣突を食う恐れはあるまいと思つて、

婆さんの指図さしずど通り戸棚を明けて見ると、あった。布団がたくさんあった。しかしいづれも薄汚いものばかりである。自宅うちで敷いていたのとはまるで比較にならない。自分は一番上に乗ってるのを二枚、そつとおろした。そうして、電気灯の光で見た。地は浅黄あさぎである。模様は白である。その上に垢あかが一面に塗りつけてあるから、六分方色変りがして、白い所などは、通例なら我慢のできにくいほどろんと、化けている。その上すこぶる堅い。搗つき立ての伸のし餅もちを、金巾かなきんに包んだように、綿は綿でかたまつて、表布かわとはまるで縁故がないほどの、こちこちしたものである。

自分はこの布団を畳の上へ平く敷いた。それから残る一枚を平く掛けた。そうして、襯衣シャツだけになって、その間に潜もぐり込んだ。湿しめっぽい中を割り込んで、両足をうんと伸ばしたら踵かかとが畳の上へ出たから、また心持引つ込ました。延ばす時も曲げる時も、不斷のように軽くしなやかには行かない。みしりと音がするほど、関節が窮屈こわばに硬張こわばつて、動きたがらない。じつとして、布団の中に膝頭ひざがしらを横たえていると、倦怠だるいのを通り越して重い。腿ももから下を切り取つて、その代りに筋金入りの義足をつけられたように重い。まるで感覚のある二本の棒である。自分は冷たくって重たい足を苦くに病やんで、頭を布団の中に突つ込んだ。せめて頭だけでも暖あったかにしたら、足の方でも折れ合つてくれるだろうと

の、はかない望みから出た窮策であつた。

しかしさすがに疲れている。寒さよりも、足よりも、布団の臭いよりも、煩悶よりも、厭世よりも――疲れている。実に死ぬ方が楽なほど疲れ切っていた。それで、横になるとすぐ――畳から足を引つ込まして、頭を布団に入れるだけの所作を仕遂げたと思うが早いかな、眠てしまった。ぐうぐう正体なく眠てしまった。これから先きは自分の事ながらとうてい書けない。……

すると、突然針で背中を刺された。夢に刺されたのか、起きていて、刺されたのか、感じはすこぶる曖昧であつた。だからそれだけの事ならば、針だろうが刺だろうが、頓着はなかつたろう。正気の針を夢の中に引摺り込んで、夢の中の刺を前後不覚の床の下に埋めてしまう分の事である。ところがそうは行かなかつた。と云うものは、刺されたなど思いながらも、針の事を忘れるほどにうつとりとなると、また一つ、ちくりとやられた。

今度は大きな眼を開いた。ところへまたちくりと来た。おやと驚く途端にまたちくりと刺した。これは大変だとうやうや気がつきがけに、飛び上るほど劇しく股の辺をやられた。自分はこの時始めて、普通の人間に歸つた。そうして身体中至る所がちくちくし

ているのを発見した。そこでそつと襯衣シヤツの間から手を入れて、背中を撫なでて見ると、一面にざらざらする。最初指先が肌に触れた時は、てつきり劇烈な皮膚病に罹かかつたんだと思つた。ところが指を肌に着けたまま、二三寸引いて見ると、何だか、ばらばらと落ちた。これはただ事でないとたちまち跳ね起きて、襯衣一枚の見苦しい姿ながら囲炉裏いろりの傍そばへ行つて、親指と人差指の間に押えた、米粒ほどのものを、検査して見ると、異様の虫であつた。実はこの時分には、まだ南京虫ナンキンむしを見た事がないんだから、はたしてこれがそうだと断言出来なかつたが——何だか直覺的に南京虫らしいと思つた。こう云う下卑ひた所に直覺の二字を濫用らんようしては濟まんが、ほかに言葉がないから、やむを得ず高尚な術語を使った。さてその虫を検査しているうちに、非常に悪にくらしくなつて來た。囲炉裏の縁ふちへ乗せて、ぴちりと親指の爪で押し潰つぶしたら、云うに云われぬ青臭い虫であつた。この青臭い臭氣においを嗅かぐと、何となく好い心持になる。——自分はこんな醜い事を真面目まじめにかかねばならぬほど狂きちがい違じ染みていた。実を云うと、この青臭い臭氣を嗅ぐまでは、恨うらみを霽はらしたような氣がしなかつたのである。それだから捕とつては潰し、捕つては潰し、潰すたんびに親指の爪を鼻へあてがって嗅いでいた。すると鼻の奥へ詰はつて來た。今にも涙が出そうになる。非常に情なさけない。それなのに、爪を嗅ぐと愉快である。この時二階

下で大勢が一度にどつと笑う声をした。自分は急に虫を潰すのをやめた。広間を見渡すと誰もいない。金さんだけが、平たくなつて静かに寝ている。頭も足も見えない。そのほかにたった一人いた。もつとも始めて気がついた時は人間とは思わなかった。向うの柱の中途から、窓の敷居へかけて、帆木綿ほもめんのようなものを白く渡して、その幅のなかに包まっていたから、何だか気味が悪かった。しかしよく見ると、白い中から黒いものが斜はすに出ている。そうしてそれが人間の毬栗頭いかりあたまであつた。——広い部屋には、自分とこの二人を除のぞいて、誰もいない。ただ電氣灯がかんかん点つついている。大変静かだ、と思うとまた下座敷でわつと笑つた。さっきの連中か、または作業を済まして歸つて来たものが、大勢寄つてふざけ散らしているに違ない。自分はぼんやりして布団のある所まで歸つて来た。そうして裸体はだかになつて、襯衣ていねいを振るつて、枕元にある着物を着て、帯を締めて、一番しまいに敷いてある布団を叮嚀ていねいに畳んで戸棚へ入れた。それから後はどうして好いか分らない。時間は何時なんじだか、夜はとうていまだ明けそうにしない。腕組あむをして立って考えていると、足の甲がまたむずむずする。自分は堪こらえ切れずに、

「えっ畜生」

と云いながら二三度小踊をした。それから、右の足の甲で、左の上を擦こすつて、左の足の

甲で右の上を擦って、これでもかと齒軋はぎしりをした。しかし表へ飛び出す訳にも行かず、寝る勇氣はなし、と云って、下へ降りて、車座の中へ割り込んで見る元氣は固かたりない。さつき毒突どくつかれた事を思い出すと、南京虫よりよっぽど厭いやだ。夜が明ければいい、夜が明ければいいと思ひながら、自分は表へ向いた窓の方へ歩いて行つた。するとそこに柱があつた。自分は立ちながら、この柱に倚よつ掛つた。背中をつけて腰を浮かして、足の裏で身体を持たしていると、両足がずるずるの目めを滑すべつてだんだん遠くへ行つちまう。それからまた真直まっすぐに立つ。またずるずる滑すべる。また立つ。まずこんな事をしてゐた。幸い南京虫ナンキンむしは出て来なかつた。下では時々どつと笑う。

いても立つてもと云うのは喩たとへだが、そのいても立つてもを、實際に経験したのはこの時である。だから坐るとも立つとも方かたのつかない運動をして、中途半端まぎに紛まぎらかしてゐた。ところがその運動をいつまで根氣こんきにやつたものか覚えていない。いとど疲れてゐる上に、なお手足を疲らして、いかな南京虫でも応こたえないほど疲れ切つたんで、始めて寝たもんだらう。夜が明けたら、自分が摺ずり落ちた柱の下に、足だけ延ばして、背を丸く蹲うすくま居まつてゐた。

これほど苦しめられた南京虫も、二日三日と過たつにつれて、だんだん痛くなくなつた

のは妙である。その実、一箇月ばかりしたら、いくら南京虫がいようと、まるで米粒でも、ぞろぞろ転がってゐるくらいに思つて、夜はいつでも、ぐっすり安眠した。もつとも南京虫の方でも日数ひかずを積むに従つて遠慮してくるそうである。その証拠には新来きたてのお客には、べた一面にたかつて、夜通し苛いじめるが、少し辛抱していると、向うから、愛想あいそをつかして、あまり寄りつかなくなるもんだと云う。毎日食つてゐる人間の肉は自然鼻につくからだとも教えたものがあるし、いや肉の方にそれだけの品格が出来て、シキ臭きくさくなるから、虫も恐れ入るんだとも説明したものである。そうして見るとこの南京虫と坑夫とは、性質たちがよく似ている。おそらく坑夫ばかりじゃあるまい、一般の人類の傾向と、この南京虫とはやはり同様の心理に支配されてゐるんだろう。だからこの解釈は人間と虫けらを概括がいかつするところに面白味があつて、哲学者の喜びそうな、美しいものであるが、自分の考えを云うと全くそうじゃないらしい。虫の方で気兼きがねをしたり、贅沢ぜいたくを云つたりするんじゃないかって、食われる人間の方で習慣の結果、無神経になるんだろうと思う。虫は依然として食つてゐるが、食われても平氣でゐるに違ひない、もつとも食われて感じないのも、食われなくて感じないのも、趣おもむきこそ違ひ、結果は同じ事であるから、これは實際上議論をしても、あまり役に立たない話である。

そんな無用の弁は、どうでもいいとして、自分が眼を開けて見たら、夜は全く明け放れていた。下ではもうがやがや云っている。嬉しかった。窓から首を出して見ると、また雨だ。もつとも判然とは降っていない。雲の濃いのが糸になり損なつて、なつただけが、細く地へ落ちる気色だ。だからむやみに濛々とはいしていない。しだいしだいに雨の方に片づいて、片づくに従つて糸の間が透いて見える。と云つても見えるものは山ばかりである。しかも草も木も至つて乏しい、潤のない山である。これが夏の日に照りつけられたら、山の奥でもさぞ暑かろうと思われるほど赤く禿げてぐるりと自分を取り捲いている。そうして残らず雨に濡れている。潤い気のないものが、濡れているんだから、土器に霧を吹いたように、いくら濡れても濡れ足りない。その癖寒い氣持がする。それで自分は首を引つ込めようとしたら、ちよつと眼についた。——手拭を被つて、藁を腰に当てて、筒服を着た男が二三人、向うの石垣の下にあらわれた。ちようど昨日ジャンボーの通つた路を逆に歩いて来る。遠くから見ると、いかにもしよぼしよぼして氣の毒なほど憐れである。自分も今朝からあなるんだなど、ふと氣がついて見ると、人事とは思われないほど、向へ行く手拭の影——雨に濡れた手拭の影が情なかつた。すると雨の間からまた古帽子が出て来た。その後からまた筒袖姿があらわれた。何でも朝の番に



當つた坑夫がシキへ這入る時間に相違ない。自分はようやく窓から首を引き込めた。すると、下から五六人一度にどやどやと階下段を上つて来る。来たなと思つたが仕方がないから懷手をして、柱にもたれていた。五六人は見る間に、同じ出立に着更えて下りて行つた。後からまた上がってくる。また筒袖になつて下りて行く。とうとう飯場にいる当番はことごとく出払つたようだ

こう飯場中活動して来ると、自分も安閑としちゃられない。と云つて誰も顔を御洗いなさいとも、御飯を御上がんなさいとも云いに来てくれない。いかな坊っちゃんも、あまり手持無沙汰過ぎて困つちまつたから、思い切つて、のこのこ下りて行つた。心は無論落ついちゃいないが、態度だけはまるで宿屋へ泊つて、茶代を置いた御客のようであつた。いくら恐縮しても自分には、これより以外の態度が出来ないんだから全くの生息子である。下りて見ると例の婆さんが、襷がけをして、草鞋を一足ぶら下げて奥から駆けて来たところへ、ばったり出逢つた。

「顔はどこで洗うんですか」

と聞くと、婆さんは、ちよつと自分を見たなりで、

「あつち」

と云い捨てて門口かどぐちの方へ行つた。まるで相手にしちやいない。自分にはあつちの見当けんとうがわからなかったが、とにかく婆さんの出て来た方角だろうと思つて、奥の方へ歩いて行つたら、大きな台所へ出た。真中に四斗樽しとだるを輪切にしたようなお櫃はちが据すえてある。あの中に南京米ナンキンまいの炊たいたのがいっぱい詰つてるのかと思つたら、——何しろ自分が三度三度一箇月食つても食い切れないほどの南京米なんだから、食わない前からうんざりしちまつた。——顔を洗う所も見つけた。台所を下りて長い流の前へ立つて、冷たい水で、申し訳のために頬辺ほつべたを撫なでて置いた。こうなると叮嚀ていねいに顔なんか洗うのは馬鹿馬鹿しくなる。これが一步進むと、顔は洗わなくても宜いいものと度胸が坐すつてくるんだろう。昨日きのうの赤毛布あかげつとや小僧は全くこう云う順序を踏んで進化したものに違ちがない。

顔はようやく自力で洗つた。飯はどうなる事かと、またのそのそ台所へ上あがつた。ところへ幸さいわい婆さんが表から歸つて来て膳立ぜんだてをしてくれた。ありがたい事に味噌汁みそじるがついていたんで、こいつを南京米の上から、ざつと掛けて、ざくざくと掻かき込んだんで、今度こんだは壁土の味を噛かみ分わけないで済んだ。すると婆さんが、

「御飯おまんまが済んだら、初はつさんがシキへ連れて行くつて待つてるから、早くおいでなさい」と、箸はしも置かない先から急せき立てる。実はもう一杯くらい食わないと身体からだが持つまいと

思つてたところだが、こう催促されて見ると、無論御代りなんか盛よそう必要はない。自分は、

「はあ、そうですか」

と立ち上がった。表へ出て見ると、なるほど上あがり口くちに一人掛けている。自分の顔を見て、

「御前おめえか、シキへ行くなあ」

と、石でもぶつ欠くような勢いで聞いた。

「ええ」

と素直に答えたら、

「じゃ、いっしょに来ねえ」

と云う。

「この服装なりでも好いんですか」

と叮嚀ていねいに聞き返すと、

「いけねえ、いけねえ。そんな服装で這へ入れるもんか。ここへ親分とこれから一枚いちめえ借りて来てやったから、此服こいつを着るがいい」

と云いながら、例の筒袖つつそでを抛ほうり出した。

「そいつが上だ。こいつが股引ももひきだ。そら」

とまた股引なを抛なげつけた。取りあげて見ると、じめじめする。所々に泥が着いている。地じは小倉こくららしい。自分もとうとうこの御仕着おしきせを着る始末になつたんだなと思ひながら、緋かすりを脱いで上下うへしたとも紺揃こんぞろいになつた。ちよつと見ると内閣の大使のようだが、心持から云うと、小使を拝命した時よりも遙はるかに不景氣であつた。これで支度したくは出来たものと思込んで土間へ下りると、

「おつと待った」

と、初さんがまた勇み肌の声を掛けた。

「これを尻けつの所へ当てるんだ」

初さんが出してくれたものを見ると、三斗俵さんだらぼ坊つちのような藁布団わらぶとんに紐ひもをつけた変挺へんていなものだ。自分は初さんの云う通り、これを臀部でんぶへ縛しばりつけた。

「それが、アテシコだ。好よしか。それから鑿のみだ。こいつを腰こし所へ差してと……」

初さんの出した鑿とがを受け取つて見ると、長さ一尺四五寸もあると云う鉄の棒で、先が少し尖とがっている。これを腰へ差す。

「ついでにこれも差すんだ。少し重いぜ。大丈夫か。しつかり受け取らねえと怪我をする」

なるほど重い。こんな槌つちを差してよく坑あなの中が歩けるもんだと思う。

「どうだ重いか」

「ええ」

「それでも軽いうちだ。重いになると五斤ある。——いいか、差せたか、そこでちよつと腰を振って見な。大丈夫か。大丈夫ならこれを提さげるんだ」

とカンテラを出しかけたが、

「待ったり。カンテラの前に一つ草鞋わらじを穿はいちまいねえ」

草鞋わらじの新しいのが、上り口にある。さつき婆さんが振ぶら下げたのは、大方これだろう。自分は素足すあしの上へ草鞋を穿はいた。緒おを踵かかとへ通してぐつと引くと、

「驚癡どじだなあ。そんなに締める奴があるかい。もつと指いびの股を寛ゆるめろい」

と叱られた。叱られながら、どうにか、こうにか穿はいてしまう。

「さあ、これでいよいよおしまいだ」

と初さんは饅頭笠まんじゅうがさとカンテラを渡した。饅頭笠と云うのか筭笠たけのこがさというのか知らないが、

何でも懲役人の被るような笠であつた。その笠を神妙に被る。それからカンテラを提げる。このカンテラは提げるようにできている。恰好は二合入りの石油缶とも云うべきもので、そこへ油を注す口と、心を出す孔が開いてる上に、細長い管が食つついて、その管の先がちよつと横へ曲がると、すぐ膨らんだカップになる。このカップへ親指を突っ込んで、その親指の力で提げるんだから、指五本の代りに一本で事を済ますはなはだ実用的ものである。

「こう、穿めるんだ」

と初さんが、勝栗のような親指を、カンテラの孔の中へ突込んだ。旨い具合にはまる。

「そうら」

初さんは指一本で、カンテラを柱時計の振子のように、二三度振つて見せた。なかなか落ちない。そこで自分も、同じように、調子をとつて揺して見たがやつぱり落ちなかった。

「そうだ。なかなか器用だ。じゃ行くぜ、いいか」

「ええ、好ござんす」

自分は初さんに連れられて表へ出た。所が降っている。一番先へ笠へあたたつた。仰向

いて、空模様を見ようとしたら、顎と、口と、鼻へぽつぽつとあたった。それからあとは、肩へもあたる。足へもあたる。少し歩くうちには、身体中じめじめして、肌へ抜けた湿気が、皮膚の活気で蒸し返される。しかし雨の方が寒いんで、身体のはとぼりがだんだん冷めて行くような心持であったが、坂へかかると初さんがむやみに急ぎ出したんで、濡れながらも、毛穴から、雨を弾き出す勢いで、とうとうスキの入口まで来た。

入口はまず汽車の隧道トンネルの大きいものと云って宜しい。蒲鉾形かまぼこなりの天辺てっぺんは二間くらいの高さはあるだろう。中から軌道が出て来るところも汽車の隧道トンネルに似ている。これは電車が通う路なんだそうだ。自分は入口の前に立って、奥の方を透かして見た。奥は暗かった。

「どうだここが地獄の入口だ。這入れるか」

と初さんが聞いた。何だか嘲弄ちやうろうの語気を帯びている。さつき飯場はんばを出て、ここまで来る途中でも、方々の長屋の窓から首を出して、

「昨日きのうのだ」

「新来しんきだ」

と口々に罵ののっていたが、その様子を見ると単に山の中に閉じ込められて物珍らしさの好

奇心とは思えなかった。その言葉の奥底にはきつと愚弄の意味がある。これを布衍して云うと、一つには貴様もとうとうこんな所へ転げ込んで来た、いい気味だ、ざまあ見ろと云う事になる。もう一つは御氣の毒だが来たつて駄目だよ。そんな脂っこい身体で何が勤まるものかと云う事にもなる。だから「昨日のだ」「新来だ」と騒ぐうちには、自分が彼らと同様の苦痛を嘗めなければならぬほど墮落したのを快く感ずると共に、とうていこの苦痛には堪えがたい奴だとの輕蔑さえ加わっている。彼らは他人を彼らと同程度に引き摺り落して喝采するのみか、ひとたび引き摺り落したものを、もう一返足の下まで蹴落して、墮落は同程度だが、墮落に堪える力は彼らの方がかえって上だとの自信をほのめかして満足するらしい。自分は途上「昨日のだ」と聞きたんびに、懲役笠で顔を半分隠しながら通り抜けて、シキの入口まで来た。そこで初さんがまた愚弄したんだから、自分は少しむっとして、

「這入れますとも。電車さえ通つてるじゃありませんか」

と答えた。すると初さんが、

「なに這入れる？ 豪義な事を云うない」

と云った。ここで「這入れません」と恐れ入ったら、「それ見ろ」と直こなされるにき



まってる。どっちへ転んでも駄目なんだから別に後悔もしなかった。初さんは、いきなり、シキの中へ飛び込んだ。自分も続いて這入った。這入って見ると、思ったよりも急に暗くなる。何だか足元がおっかなくなり出したには降参した。雨が降っていても外は明かるいものだ。その上軌道レールの上はとにかく、両側はすこぶる泥ぬかっている。それなのに初さんは中ちゆう腹ぽうでずんずん行く。自分も負けない気でずんずん行く。

「シキの中でおとなしくしねえと、すすのすの中へ抛ほうり込まれるから、用心しなくっちゃあいけねえ」

と云いながら初さんは突然暗い中で立ち留どまった。初さんの腰には鑿のみがある。五斤の槌つちがある。自分は暗い中で小さくなって、

「はい」

と返事をした。

「よし、分ったか。生きて出る料簡りようけんなら生意気にシキなんかへ這入らねえ方が増しだ」

これは向うむきになって、初さんが歩き出した時に、半分は独り言ひとりごとのように話した言葉である。自分は少からず驚いた。坑あなの中は反響が強いので、初さんの言葉がわんわん

わんと自分の耳へ跳ねつ返つて来る。はたして初さんの言う通りなら、飛んだ所へ這入つたもんだ。実は死ぬのも同然な職業であればこそ坑夫になろうと云う氣も起して見たんだが、本当に死ぬなら——こんな怖い商売なら——殺されるんなら——すのこの中へ抛げ込まれるなら——すのことは全体どんなもんだろうと思ひ出した。

「すのことはどんなもんですか」

「なに？」

と初さんが後を振り向いた。

「すのことはどんなもんですか」

「穴だ」

「え？」

「穴だよ。——あらがね鋤を抛り込んで、纏めて下へ降げる穴だ。鋤といつしよに抛り込まれて見ねえ……」

で言葉を切つてまたずんずん行く。

自分はちよつと立ち留つた。振り返ると、入口が小さい月のように見える。這入るときは、これがシキならと思つた。聞いたほどでもないと思つた。ところが初さんに威嚇

かされてから、いかな平凡な隧道<sup>トンネル</sup>も、大いに容子<sup>ようす</sup>が變つて来た。懲役笠<sup>ちようえきかさ</sup>をたたく冷たい雨が恋しくなつた。そこで振り返ると、入口が小さい月のように見える。小さい月のように見えるほど奥へ這入つたなど、振り返つて始めて気がついた。いくら曇つていてもやっぱり外が懐<sup>なつ</sup>かしい。真黒な天井<sup>てんじよう</sup>が上から抑<sup>おさ</sup>えつけてるのは心持のわるいものだ。しかもこの天井がだんだん低くなつて来るように感ぜられる。と思うと、軌道<sup>レール</sup>を横へ切れ、右へ曲つた。だらだら坂の下りになる。もう入口は見えない。振返つても真暗だ。小さい月のような浮世の窓は遠慮なくぴしやりと閉つて、初さんと自分はだんだん下の方へ降りて行く。降りながら手を延ばして壁へ触<sup>さわ</sup>つて見ると、雨が降つたように濡<sup>ぬ</sup>れている。

「どうだ、尾<sup>つ</sup>いて来るか」

と、初さんが聞いた。

「ええ」

とおとなしく答えたら、

「もう少しで地獄の三丁目へ来る」

と云つたなり、また二人とも無言になつた。この時行く手<sup>かた</sup>の方に一点の灯<sup>あかり</sup>が見えた。暗<sup>くら</sup>

闇やみの中の黒猫の片眼のように光ってる。カンテラの灯ひなら散らつくはずだが、ちつとも動かない。距離もよく分らない。方角も真直まっすぐじゃないが、とにかく見える。もし坑あなの中が一本道だとすれば、この灯を目懸めがけて、初さんも自分も進んで行くに違ない。自分は何にも聞かなかったが、大方これが地獄の三丁目なんだろうと思つて、這入つて行つた。すると、だらだら坂がようやく尽きた。路は平らに向うへ廻り込む。その突き当りに例の灯ひが点ついている。さつきは鼻の下に見えたが、今では眼と擦すれ々の所まで来た。距離も間近くなった。

「いよいよ三丁目へ着いた」

と、初さんが云う。着いて見ると、坑あなが四五畳ほどの大おおさに広がつて、そこに交番くらいな小屋がある。そうしてその中に電気灯が点ついている。洋服を着た役人が二人ほど、椅子の対むかい合あひに洋卓テーブルを隔へて腰を掛けていた。表おもてには第一見張所とあつた。これは坑夫でいりの出入だの労働の時間だのを検査する所だと後から聞いて、始めて分つたんだが、その当時には何のための設備だか知らなかったもんだから、六七人の坑夫が、どす黒い顔を揃そろえて無言のまま、見張所の前に立つていたのを不審に思つた。これは時間を待ち合あわして交替するためである。自分は腰に鑿のみと槌つちを差してカンテラさえ提さげてはいるが、

坑夫志願というんで、シキの様子を見に這入っただけだから、まだ見習にさえ採用されていないと云う訳で、待ち合わす必要もないものと見えて、すぐこの溜たまりを通り越した。その時初さんが見張所の硝子窓ガラスまどへ首を突っ込んで、ちよいと役人に断ことわつたが、役人は別に自分の方を見向もしなかった。その代り立っていた坑夫はみんな見た。しかし役人の前を憚はばかつてだろう、全く一言も口を利きいたものはなかった。

溜たまりを出るや否や坑あなの様子が突然変った。今までは立ってあるいても、背延せいびをしても届きそうにもしなかった天井が急に落ちて来て、真直まっすぐに歩くと時々頭へ触さわるような気がする。これがものの二寸も低かろうものなら、岩へぶつかって眉間みけんから血が出るに違ちがないと思うと、松原をあるくように、ありつたけの背で、野風のふう雑ざうにややって行けない。おっかないから、なるべく首を肩の中へ縮め込んで、初さんに食くつついて行つた。もつともカンテラはさつき点つつけた。

すると三尺ばかり前にいる初さんが急に四よつん這ばいになった。おや、滑すべつて転んだ。と思つて、後うしろから突うつ掛かかりそうなところを、ぐつと足を踏ん張つた。このくらいにして喰くい留とどめないと、坂だから、前へのめる恐おそれがある。心持腰から上を反そらすようにして、初さんの起きるのを待ち合あわしていると、初さんはなかなか起きない。やつぱり這はつて

いる。

「どうか、しましたか」

と後から聞いた。初さんは返事もしない。——はてな——怪我でもしやしないかしら——もう一遍聞いて見ようか——すると初さんはこのこ歩き出した。

「何ともなかったですか」

「這うんだ」

「え？」

「這うのだてえ事よ」

と初さんの声はだんだん遠くなってしまう。その声で自分は不審を打った。いくら向うむきでも、普通なら明かに聞きとられべき距離から出るのに、急に潜もぐってしまう。声が細いんじゃない。当り前の初さんの声が袋のなかに閉じ込められたように曖昧あいまいになる。こりやただ事じゃないと気がついたから、透すかして見るとようやく分った。今までは尋常に歩けた坑が、ここでたちまち狭せまくなつて、這わなくつちや抜けられなくなっている。その狭い入口から、初さんの足が二本出ている。初さんは今胴を入れたばかりである。やがて出ていた足が一本這入った。見ているうちにまた一本這入った。これで自分も四

つん這いにならなくっちゃ仕方がないと諦めをつけた。<sup>あきら</sup>「這うんだ」と初さんの教えたのもけっして無理じゃないんだから、教えられた通り這った。ところが右にはカン・テラを提<sup>さ</sup>げている。左の手の平<sup>ひら</sup>だけを惜<sup>おし</sup>気もなく氷のような泥だか岩だかへな土だか分らない上へぐしゃりと突いた時は、寒さが二の腕を伝わって肩口から心臓へ飛び込んだような氣持がした。それでカン・テラを下へ着けまいとすると、右の手が顔とすれすれになつて、はなはだ不便である。どうしたもんだろうと、この姿勢のままじつとしていた。そうして、右の手で宙に釣っているカン・テラを見た。ところへぼたりと天井<sup>てんじやう</sup>からしずくが垂れた。カン・テラの灯<sup>ひ</sup>がじいと鳴った。油煙が顎<sup>あご</sup>から頬へかかる。眼<sup>は</sup>へも這<sup>はい</sup>入った。それでもこの灯を見詰めていた。すると遠くの方でかあん、かあん、と云う音がする。坑夫が作業をしているに違ないが、どのくらい距離があるんだか、どの見<sup>けん</sup>当<sup>とう</sup>にあたるんだか、いっとう分らない。東西南北のある浮世の音じゃない。自分はこの姿勢でともかくも二三歩歩き出した。不便は無論不便だが、歩けない事はない。ただ時々しずくが落ちてカン・テラのじいと鳴るのが氣にかかる。初さんは先へ行ってしまった。頼<sup>たより</sup>はカン・テラ一つである。そのカン・テラがじいと鳴って水のために消えそうになる。かと思ふとまた明かるくなる。まあよかったと安心する時分に、またぼたりと落ちて来る。じいと鳴

る。消えそうになる。非常に心細い。実は今までも、しずくは始終垂れていたんだが、灯が腰から下にあるんで、いっこう気がつかなかったんだろう。灯が耳の近くへ来て、じいと云う音が聞えるようになってから急に神経が起つて来た。だから這う方はなお遅くなる。しかもまだ三足しか歩いちゃいない。ところへ突然初さんの声がした。

「やい、好い加減に出て来ねえか。何をぐずぐずしているんだ。——早くしないと日が暮れちまうよ」

暗いなかで初さんはたしかに日が暮れちまうと云った。

自分は這いながら、咽喉仏の角を尖らすほどに顎を突き出して、初さんの方を見た。すると一間ばかり向うに熊の穴見たようなものがあつて、その穴から、初さんの顔が——顔らしいものが出ている。自分があまり手間取るんで、初さんが屈んでこつちを覗き込んでるところであつた。この一間をどうして抜け出したか、今じゃ善く覚えていない。何しろできるだけ早く穴まで来て、首だけ出すと、もう初さんは顔を引つ込まして穴の外に立っている。その足が二本自分の鼻の先に見えた。自分はやれ嬉しやと狭い所を潜り抜けた。

「何をしていたんだ」



「あんまり狭いもんだから」

「狭いんで驚いちゃ、シ・キへは一足だつて踏ん込めつこはねえ。陸のように地面はねえ所とこだから、どんな頓珍漢とんちんかんだつて知つてゐるはずだ」

初さんはたしかに坑あなの中は陸のように地面のない所だと云つた。この人は時々思い掛けない事を云うから、今度もたしかにとただし書がきをつけて、その確実な事を保証して置くんである。自分は何か云い訳をするたんびに、初さんから容赦なくやつつけられるんで、大抵は黙っていたが、この時はつい、

「でもカンテラが消えそうで、心配したもんですから」

と云つちまつた。すると初さんは、自分の鼻の先へカンテラを差しつけて、徐おもむろに自分の顔を検査し始めた。そうして、命令を下した。

「消して見ねえ」

「どうしてですか」

「どうしても好いから、消して見ねえ」

「吹くんですか」

初さんはこの時大きな声を出して笑つた。

自分は喫驚びっくりして稀有けうな顔かおをしていた。

「冗談じやうだんじゃねえ。何が這入へってると思う。種油たねあぶらだよ、しづくぐらいで消けえてたまるもんか」

自分はこれでやっと安心した。

「安心したか。ハハハハ」

と初さんがまた笑った。初さんが笑うたんびに、坑あなの中がみんな響き出す。その響が収まると前よりも倍静かになる。ところへかあん、かあんどこかで鑿のみと槌つちを使つて音が伝つたわつて来る。

「聞えるか」

と、初さんが頤あごで相図あひづをした。

「聞えます」

と耳みみを峙たててしていると、たちまち催促そそぐを受けた。

「さあ行こう。今度こんだあ後おくれないように跟ついて来な」

初さんはなかなか機嫌きげんがいい。これは自分が一も二もなく初さんにやられているせいだろうと思った。いくら手苛てひどくきめつけられても、初さんの機嫌きげんがいろいろは結構であつた。こうなると得になる事がすなわち結構という意味になる。自分はこれほど墮落

して、おめおめ初さんの尻を嗅いで行ったら、路が左の方に曲り込んでまた峻しい坂になった。

「おい下りるよ」

と初さんが、後うしろも向かず声を掛けた。その時自分は何となく東京の車夫を思い出して苦しいうちにもおかしかった。が初さんはそれとも気がつかず下り出した。自分も負けずに降りる。路は地面を刻んで段々になっている。四五間ずつに折れてはいるが、勘定したら愛宕あたご様の高さぐらいはあるだろう。これは一生懸命になって、いっしょに降りた。降りた時にほっと息を吐くと、その息が何となく苦しかった。しかしこれは深い坑あなのなかで、空気の流通が悪いからとばかり考えた。実はこの時すでに身体からだも冒おかされていたのである。この苦しい息で二三十間来るとまた模様が変わった。

今度は初さんが仰向けあおむに手を突いて、腰から先を入れる。腰から入れるような芸をしなければ通れないほど、坑あなの幅も高さも逼せまつて来たのである。

「こうして抜けるんだ。好く見て置きねえ」

と初さんが云ったと思ったら、胴も頭もずる、ずると抜けて見えなくなった。さすが熟練の功はえらいもんだと思いながら、自分もまず足だけ前へ出して、草鞋わらじで探さぐりを入れ

た。ところが全く宙に浮いてるようで足掛りがちつともない。何でも穴の向うは、がっくり落<sup>おち</sup>か、それでなくても、よほど勾配<sup>こうばい</sup>の急な坂に違ないと見当<sup>けんとう</sup>をつけた。だから頭から先へ突つ込めばのめって怪我をするばかり、また足をむやみに出せば引つ繰り返るだけと覺つたから、足を棒のように前へ寝かして、そうして後<sup>うしろ</sup>へ手を突いた。ところがこの所作<sup>しよさ</sup>がはなはだ不味<sup>まず</sup>かつたので、手を突くと同時に、尻もべったり突いてしまった。ぴちやりと云つた。ア・テ・シ・コを伝わって臀部<sup>でんぶ</sup>へ少々感じがあつた。それほど強く尻餅<sup>しりもち</sup>を搗<sup>つ</sup>いたと見える。自分はしまったと思ひながらも直<sup>すく</sup>両足を前の方へ出した。ずるりと一尺ばかり振<sup>ぶ</sup>ら下げたが、まだどこへも届かない。仕方がないから、今度は手の方を前へ運ばせて、腰を押し出すように足を伸ばした。すると腿<sup>もも</sup>の所まで摺<sup>ず</sup>り落ちて、草鞋<sup>わらじ</sup>の裏がようやく堅いものに乗つた。自分は念のためこの堅いものをぴちやぴちや足の裏で敲<sup>たた</sup>いて見た。大丈夫なら手を離してこの堅いものの上へ立とうと云う料簡<sup>りようけん</sup>であつた。

「何で足ばかり、ばたばたやってるんだ。大丈夫だから、うんと踏ん張つて立ちねえな。意久<sup>いく</sup>地のねえ」

と、下から初さんの声がする。自分の胴から上は叱られると同時に、穴を抜けて真直に立つた。

「まるで傘<sup>からかさ</sup>の化物<sup>ばけもの</sup>のようだよ」

と初さんが、自分の顔を見て云った。自分は傘の化物とは何の意味だか分らなかったから、別に笑う気にもならなかった。ただ

「そうですか」

と真面目に答えた。妙な事にこの返事が面白かったと見えて、初さんは、また大きな声を出して笑った。そうして、この時から態度が変わって、前よりは幾分<sup>いくぶん</sup>か親切になった。偶然の事がどんな拍子<sup>ひょうし</sup>で他の気<sup>ひと</sup>に入らないとも限らない。かえって、気に入ってやろうと思って仕出<sup>しで</sup>かす芸術は大抵駄目なようだ。天巧<sup>てんこう</sup>を奪うような御世辞使はいまだかつて見た事がない。自分も我が身が可愛さに、その後<sup>ご</sup>いろいろ人の御機嫌を取って見たが、どうも旨い結果<sup>うま</sup>が出て来ない。相手がいくら馬鹿でも、いつか露見するから怖いものだ。用意をして置いた挨拶<sup>あいさつ</sup>で、この傘の化物に対する返事くらいに成功した場合はほとんどない。骨を折って失敗するのは愚<sup>ぐ</sup>だど悟ったから、近頃では宿命論者の立脚地から人と交際をしている。ただ困るのは演舌<sup>えんぜつ</sup>と文章である。あいつは骨を折って準備をしないと失敗する。その代りいくら骨を折ってもやっぱり失敗する。つまりは同じ事なんだが、骨を折った失敗は、人の気に入らないでも、自分の弱点<sup>ぼろ</sup>が出ないから、まあ準備を

してからやる事にしている。いつかは初さんの氣に入つたような演説をしたり、文章を書いて見たいが、——どうも馬鹿にされそうでいけないから、いまだにやらずにいる。——それはここには余計な事だから、このくらいでやめてまた初さんの話を続けて行く。

その時初さんは、笑いながら、下から、自分に向つて、

「おい、そう真面目くさらねえで、早く下りて来ねえな。日は短えやな」  
みじけ

と云つた。坑あなの中でカンテラを点けた、初さんはたしかに日は短えやなど云つた。

自分が土の段を一二間下りて、初さんの立つてゐる所まで行くと、初さんは、右へ曲つた。また段々が四五間続いている。それを降り切ると、今度は初さんが左へ折れる。そうしてまた段々がある。右へ折れたり左へ折れたり稲妻いなずまのように歩いて、段々を——さあ何町降りたか分らない。始めての道ではあるし、ことに暗い坑あなの中の事であるから自分には非常に長く思われた。ようやく段々を降り切つて、だいぶ浮世とは縁が遠くなつたと思つたら急に五六畳の部屋に出た。部屋と云つても坑を切り広げたもので、上と下がすぼまって、腹の所が膨ふくらんでいるから、まるで酒甕さかがめの中へでも落込んだ有様である。あとから分つた話だが、これは作事場さくじばと云うんで、技師の鑑定で、ここには鉾脈が

あるとなると、そこを掘り<sup>ひろ</sup>掘げて作事場にするのである。だから通り路よりは自然広い訳で、この作事場を坑夫が三人一組で、請負<sup>うけおい</sup>仕事に引受ける。二週間と見積つたのが、四日で済む事もあり、高が五日くらいと踏んだ作事に半月以上食い込む事もある。こう云う訳で、シキのなかに路ができて、路のはたに銅脈さえ見つければ、御構<sup>おかまい</sup>なくそこだけを掘り抜いて行くんだから、電車の通るシキの入口こそ、平らでもあり、また一条<sup>ひとすじ</sup>でもあるが、下へ折れて第一見張所のあたりからは、右へも左へも条路<sup>えだみち</sup>ができて、方々に作事場が建つ。その作事をしまうと、また銅脈を見つけては掘り抜いて行くんだから、シキの中は細い路だらけで、また暗い坑だらけである。ちょうど蟻<sup>あり</sup>が地面を縦横に抜いて歩くようなものだろう。または書蠹<sup>のむし</sup>が本を食<sup>くら</sup>うと見立てても差し支<sup>さ</sup>ない。つまり人間が土の中で、銅<sup>あかがね</sup>を食<sup>くら</sup>って、食い尽すと、また銅を探し出して食いにゆくんでむやみに路がたくさんできてしまったのである。だから、いくらシキの中を通っても、ただ通るだけで作事場へ出なければ坑夫には逢<sup>あ</sup>わない。かあなかあんという音はするが、音だけでは極めて淋<sup>さみ</sup>しいものである。自分は初さんに連れられて、シキへ這<sup>はい</sup>入ったが、ただシキの様子を見るのが第一の目的であつたためか、廻り道をして作事場へは寄らなかつたと見えて、坑夫の仕事をしているところは、この段々の下へ来て、初めて見た。――稻妻<sup>いなずま</sup>

形に段々を下りるときは、むやみに下りるばかりで、いくら下りても尽きないのみか、人っ子一人に逢わ<sup>あ</sup>ないものだから、はなはだ心細かったが、はじめて作事場へ出て、人間に逢<sup>あ</sup>ったら、大いに嬉しかった。

見ると丸太の上に腰をかけている。数は三人だった。丸太は四つや丸太で、軌道の枕木くらいなものだから、随分の重さである。どうして、ここまで運んで来たかどうている想像がつかない。これは天井の陥落を防ぐため、少し広い所になると突っかい棒に張るために、シ・チュウが必要<sup>ふたあり</sup>な作事場へ置いて行くんだそうだ。その上に二人腰を掛けて、残る一人が屈<sup>しゃが</sup>んで丸太へ向いている。そうして三人の間には小さな木の壺<sup>つぼ</sup>がある。伏せである。一人がこの壺を上から抑<sup>おさ</sup>えている。三人が妙な叫び声を出した。抑えた壺をたちまち挙げた。下から賽<sup>さい</sup>が出た。——ところへ自分と初さんが這入った。

三人はひとしく眼を上げて、自分と初さんを見た。カンテラが土の壁に突き刺してある。暗い灯<sup>ひ</sup>が、ぎろりと光る三人の眼球<sup>めだま</sup>を照らした。光ったものは實際眼球<sup>けぶり</sup>だけである。坑は固<sup>も</sup>より暗い。明かるくなくつちやならない灯も暗い。どす黒く燃えて煙を吹いている所は、濁った液体が動いてるように見えた。濁った先が黒くなって、煙と変化するや否や、この煙が暗いものの中に吸い込まれてしまふ。だから坑の中がぼうとしてい



る。そうして動いている。

カン・テラは三人の頭の上に刺さっていた。だから三人のうちで比較的判然見えたのは、頭だけである。ところが三人共頭が黒いので、つまりは、見えないのと同じ事である。しかも三つとも集<sup>かたま</sup>っていたから、なおさら変であつたが、自分が這<sup>はい</sup>入るや否や、三つの頭はたちまち離れた。その間から、壺<sup>つぼ</sup>が見えたのである。壺の下から賽<sup>さい</sup>が見えたのである。壺と、賽と、三人の異<sup>い</sup>な叫び声を聞いた自分は、次に三人の顔を見たんである。よくはわからない顔であつた。一人の男は頬骨<sup>ほおぼね</sup>の一点と、小鼻の片傍<sup>かたわき</sup>だけが、灯<sup>ひ</sup>に映つた。次の男は額<sup>まゆ</sup>と眉の半分に光が落ちた。残る一人は総体にぼんやりしている。ただ自分の持つていた、カン・テラを四五尺手前から真向<sup>まっこう</sup>に浴びただけである。——三人はこの姿勢で、ぎろりと眼を据<sup>す</sup>えた。自分の方に。

ようやく人間に逢<sup>あ</sup>つて、やれ嬉<sup>うれ</sup>しやと思つた自分は、この三対<sup>つゝい</sup>の眼球<sup>めだま</sup>を見るや否や、思わずびたりと立ち留<sup>とど</sup>つた。

「手前<sup>てまえ</sup>は……」

と云い掛けて、一人が言葉を切つた。残る二人はまだ口を開<sup>ひら</sup>かない。自分も立ち留<sup>とど</sup>まつたなり、答えなかつた。——答えられなかつた。すると

「新めえだ」

と、初さんが、威勢のいい返事をしてくれた。本当のところを白状すると、三人の眼球が光って、「手前は……」と聞かれた時は、初さんの傍そばにいる事も忘れて、ただおやつと思った。立すくむと云うのはこれだろう。立ちすくんで、硬かたくこわ張り掛けたところへ「新めえだ」と云う声がした。この声が自分の左の耳の、つい後うしろから出て、向うへ通り抜けた時、なるほど初さんがついてたなと思ひ出した。それがため、こわ張りかけた手足も、中途でもとへ引き返した。自分は一步傍わきへ退のいた。初さんに前へ出てもらうつもりであつた。初さんは注文通り出た。

「相変らずやつてゐるな」

とカン・テラを提さげたまま、上から三人の真中に転がつてゐる、壺と賽を眺ながめた。

「どうだ仲間入は」

「まあよそう。今日は案内だから」

と初さんは取り合ひなかつた。やがて、四よつや丸太まるたの上へうんとこしよと腰をおろして、

「少し休んで行くかな」

と自分の方を見た。立ちすくむまで恐ろしかった、自分は急に嬉しくなつて元氣が出て来た。初さんの側へ腰をおろす。ア・テ・シ・コ・の利目は、ここで始めて分つた。旨い具合に尻が乗つて、柔らかに局部へ応える。かつ冷えないで、結構だ。実はさつきから、眼が少し眩らんで——眩らんだか、眩らまないんだか、坑の中ではよく分らないが、何しろ好い氣持ではなかったが、こう尻を掛けて落ちつくと、大きに樂になる。四人がいろいろな話をしている。

「広本へは新しい玉が来たが知つてるか」

「うん、知つてる」

「まだ、買わねえか」

「買わねえ、お前は」

「おれか。おれは——ハハハハ」

と笑つた。これは這入つて来た時、顔中ぼんやり見えた男である。今でもぼんやり見える。その証拠には、笑つても笑わなくつても、顔の輪廓がほとんど同じである。

「随分手廻しがいいな」

と初さんもいささか笑っている。

「シキへ這入ると、いつ死ぬか分らねえからな。だれだって、そうだろう」と云う答があつた。この時、

「御互に死なねえうちの事だなあ」

と一人が云つた。その語調には妙に咏嘆の意が寓してあつた。自分はあまり突然のよう感じた。

そうしているうちに、一間置いて隣りの男が突然自分に話しかけた。

「御前はどこから来た」

「東京です」

「ここへ来て儲けようたつて駄目だぜ」

と他のが、すぐ教えてくれた。自分は長蔵さんに逢うや否や儲かる儲かるを何遍となく聞かせられて驚いたが、飯場へ着くが早いか、今度は反対に、儲からない儲からないで立てつづけに責められるんで、大いに辟易した。しかし地の底ではよもやそんな話も出まいと思つてここまで降りて来たが、人に逢えばまた儲からないを繰り返された。あんまり馬鹿馬鹿しいんで何とか答弁をしようかとも考えたが、滅多な事を云えば擲りつけられるだけだから、まあやめにして置いた。さればと云つて返事をしなければまたやり

つけられる。そこで、こう云った。

「なぜ儲からないんです」

「この銅山には神様がいます。いくら金を蓄めて出ようとしたって駄目だ。金は必ず戻ってくる」

「何の神様ですか」

と聞いて見たら、

「達磨だ」

と云って、四人ながら面白そうに笑った。自分は黙っていた。すると四人は自分を措いてしきりに達磨の話を始めた。約十分余りも続いたろう。その間自分はほかの事を考えていた。いろいろ考えたうちに一番感じたのは、自分がこんな泥だらけの服を着て、真暗な坑のなかに屈んでるところを、艶子さんと澄江さんに見せたらばと云う問題であった。気の毒がるだろうか、泣くだろうか、それともあさましいと云って愛想を尽かすだろうかと疑って見たが、これは難なく気の毒がつて、泣くに違ないと結論してしまつた。それで一目くらはこの姿を二人に見せたいような気がした。それから昨夜囲炉裏の傍でさんざん馬鹿にされた事を思い出して、あの有様を二人に見せたらばと考えた。

ところが今度は正反対で、二人共傍<sup>そば</sup>にいてくれないで仕合せだと思った。もし見られたらと想像して眼前に、意気<sup>いき</sup>地のない、大いに苛<sup>いら</sup>められている自分の風体<sup>ふうてい</sup>と、ハイカラの女を二人描<sup>えが</sup>き出したら、はなはだ気恥<sup>きぢ</sup>ずかしくなつて腋<sup>わき</sup>の下から汗が出そうになつた。これで見ると、坑夫に墮落すると云う事実その物はさほど苦にならぬのみか、少しは得意の気味で、ただ坑夫になりたての幅<sup>はば</sup>の利<sup>き</sup>かないところだけを、女に見せたくなかつた訳になる。自分の器量を下げるところは、誰にも隠したいが、ことに女には隠したい。女は自分を頼るほどの弱いものだから、頼られるだけに、自分は器量のある男だと云う証拠をどこまでも見せたいものと思われる。結婚前の男はことにこの感じが深いようだ。人間はいくら窮した場合でも、時々芝居<sup>しばい</sup>気を出す。自分がアテシコ<sup>アテシコ</sup>を臀<sup>しり</sup>に敷いて、深い坑のなかで、カンテラ<sup>カンテラ</sup>を提<sup>ひ</sup>げたまま、休んだ時の考えは、全く芝居じみていた。ある意味から云うと、これが苦痛の骨休めである。公然の骨休めとも云うべき芝居は全くここから発達したものだと思う。自分は発達しない芝居の主人公を腹の中で演じて、落胆しながら得意がつていた。

ところへ突然肺臓を打ち抜かれたと思うくらい大きな音がした。その音は自分の足の下で起つたのか、頭の上で起つたのか、尻<sup>か</sup>を懸<sup>か</sup>けた丸太<sup>まるた</sup>も、黒い天井<sup>てんじやう</sup>も一度に躍<sup>おど</sup>り

上ったから、分らない。自分の頸くびと手と足が一度に動いた。縁側えんがわに脛はぎをぶらさげて、膝頭ひざがしらを丁ちようと叩たたくと、膝から下がぴくんと跳ねる事がある。この時自分の身体からだの動き方は全くこれに似ている。しかしこれよりも倍以上劇烈に來たような気がした。身体ばかりじゃない、精神がその通りである。一人芝居の真最中でとんぼ返りを打って、たちまち我れに歸った。音はまだつづいている。落雷を、土中どちゆうに埋めて、自由の響きを束縛そくばくしたように、洪しふって、焦いらって、陰いんに籠こもって、抑おさえられて、岩にあたつて、包まれて、激して、跳ね返されて、出端でを失つて、ごうと吼ほえている。

「驚いちゃいけねえ」

と初さんが云った。そうして立ち上がった。自分も立ち上がった。三人の坑夫も立ち上がった。

「もう少しだ。やつちまうかな」

と、鑿のみを取り上げた。初さんと自分は作事場さくじばを出る。ところへ煙けむが來た。煙硝えんしやうの臭においが、眼へも鼻へも口へも這入はいった。噎むせつぽくつて苦しいから、後うしろを向いたら、作事場ではかあん、かあんともう仕事を始めだした。

「なんですか」

と苦しい中で、初さんに聞いて見た。実はさっきの音が耳に聴えた時、こりや坑内で大破裂が起つたに違ないから、逃げないと生命が危ないとまで思い詰めたくらいなのに、初さんはますます深く這入る気色だから、気味が悪いとは思ったが、何しろ自由行動のとれる身体ではなし、精神は無論独立の気象を具えていないんだから、いかに先輩だつて逃げていい時分には、逃げてくれるだろうと安心して、後をつけて出ると、むっとするほどの煙が向うから吹いて来たんで、こりや迂濶深入はできないわと云う腹もあつて、かたがた後を向く途端に、さっきの連中がもう、煙の中であん、かあん、鉤を叩いているのが聞えたんで、それじゃやっぱり安心なのかと、不審のあまりこの質問を起して見たのである。すると初さんは、煙の中で、咳を二つ三つしながら、  
「驚かなくつてもいい。ダイナマイトだ」  
と教えてくれた。

「大丈夫ですか」

「大丈夫でねえかも知れねえが、シキへ這入った以上、仕方がねえ。ダイナマイトが恐ろしくつちや一日だつて、シキへは這入れねえんだから」

自分は黙っていた。初さんは煙の中を押し分けるようにずんずん潜つて行く。満更苦



しくない事もないんだろうが、一つは新参の自分に対して、景気を見せるためじゃないかと思った。それとも煙は坑あなから坑へ抜け切つて、陸おかの上なら、大抵晴れ渡つた時分なのに、路が暗いんでいつまでも煙が這はつてるように感じたり噎むせつぽく思つたのかも知れない。そうすると自分の方が悪くなる。

いずれにしても苦いところを我慢して尾ついて行つた。また胎内たないくぐ潜りのような穴を抜けて、三四間ずつの段々を、右へ左へ折れ尽すと、路が二股ふたまたになつてゐる。その条路えだみちの突き当りで、カラカラランと云う音がした。深い井戸へ石片いしころを抛なげ込んだ時と調子は似てゐるが、普通の井戸よりも、遙はるかに深いように思われた。と云うものは、落ちて行く間まに、側がわへ当つて鳴る音が、冴さえている。ばかりか、よほど長くつづく。最後のカラランは底の底から出て、出るにはよほど手間てまがかかる。けれども一本道を、真直まっすぐに上へ抜けるだけで、ほかに逃道がないから、どんなに暇取つても、きつと出てくる。途中で消えそうになると、壁の反響が手伝つて、底で出ただけの響は、いかに微かすかな遠くであつても、洩もらすところなく上まで送り出す。——ざつとこんな音である。カラララン。カカラアン。……

初さんが留とまつた。

「聞えるか」

「聞えます」

「スノコへ鉋を落してる」

「はああ……」

「ついでだからスノコを見せてやろう」

と、急に思いついたような調子で、勢いよく初さんが、一足後へ引いて草鞋わらじの踵かかとを向け直した。自分が耳の方へ気を取られて、返事もしないうちに、初さんは右へ切れた。自分も続いて暗いなかへ這入る。

折れた路はわずか四尺ほどで行き当る。ところをまた右へ廻り込むと、一間ばかり先が急に薄明るく、縦にも横にも広がっている。その中に黒い影が二つあった。自分達がその傍そばまで近づいた時、黒い影の一つが、左の足と共に、精一杯前へ出した力を後うしろへ抜く拍子ひょうしに、大きな箕みを、斜はすに抛なげ返した。箕は足掛りの板の上に落ちた。カカン、カラカランと云う音が遠くへ落ちて行く。一尺前は大きな穴である。広さは畳二畳にじようじき敷ぐらいはあるだろう。箕に入れたばらの鉋あらがねを、掘子ほりこが抛なげ込んだばかりである。突き当りの壁は突立つったっている。微かすかなカンテラに照らされて、色さえしつかり分らない上が、一面に濡ぬ

れて、濡れた所だけがきらきら光っている。

「覗のぞいて見ろ」

初さんが云った。穴の手前が三尺ばかり板で張り詰めてある。自分は板の三分の一ほどまで踏み出した。

「もつと、出ろ」

と初さんが後から催促する。自分は躊躇ちゅうちよした。これでさえ踏板はすが外れれば、どこまで落ちて行くか分らない。ましてもう一尺前へ出れば、いざと云う時、土の上へ飛び退く手間まが一尺だけ遅くなる。一尺は何でもないようだが、ここでは平地ひらちの十間にも当る。自分は何分なにぶんにも躊躇ちゅうちよした。

「出ろやい。吝けちな野郎やだな。そんな事で掘子が勤まるかい」

と云われた。これは初さんの声ではなかった。黒い影の一人が云ったんだろう。自分は振り返って見なかった。しかし依然として足は前へ出なかった。ただ眼だけが、露で光った薄暗い向うの壁を伝わって、下の方へ、しだいに落ちて行くと、約一間ばかりは、どうにか見えるが、それから先は真暗だ。真暗だからどこまで視線に這入はいるんだか分らない。ただ深いと思えば際限もなく深い。落ちちゃ大変だと神経を起すと、後から

背中を突かれるような気がする。足は依然としてもとの位地を持ち応えていた。すると、

「おい邪魔だ。ちよつと退きな」

と声を掛けられたんで、振り向くと、一人の掘子が重そうに俵を抱えて立っている。俵の大きさは米俵の半分ぐらいしかない。しかし両手で底を受けて、幾分か腰で支えながら、うんと気合を入れているところは、全く重そうだ。自分はこの体を見て、すぐ傍へ避けた。そうして比較的安全な、板が折れても差支なく地面へ飛び退けるほどの距離まで退いた。掘子は、俵で眼先がつかえてるから定めし剣呑がるだろうと思いのほか、容赦なく重い足を運ばして前へ出る。縁から二尺ばかり手前まで出て、足を揃えたから、もう留まるだろうと見ていると、また出した。余る所は一尺しきやあない。その一尺へまた五寸ほど切り込んだ。そうして行儀よく右左を揃えた。そうして、うんと云った。胸と腰が同時に前へ出た。危ない。のめったと思う途端に、重い俵は、とんぼ返りを打って、掘子の手を離れた。掘子はもとの所へ突っ立っている。落ちた俵はしばらく音沙汰もない。と思うと遠くでどさつと云った。俵は底まで落切ったと見える。

「どうだ、あの芸が出来るか」

と初さんが聞いた。自分は、

「そうですね」

と首を曲げて、恐れ入ってた。すると初さんも掘子ほりこもみんな笑い出した。自分は笑われなくても全く致し方がないと思つて、依然として恐れ入ってた。その時初さんがこんな事を云つて聞かした。

「何になつても修業は要いるもんだ。やつて見ねえうちは、馬鹿にや出来ねえ。お前めえが掘子になるにしたつて、おっかながつて、手先ばかりで抛なげ込んで見ねえ。みんな板の上へ落ちちまつて、肝心かんじんの穴けんのへは這はい入りやしねえ。そうして、鉾あらがねの重みで引つ張り込まれるから、かえつて剣呑けんおんだ。ああ思い切つて胸から突き出してかからにや……」

と云い掛けると、ほかの男が、

「二三度スノコへ落ちて見なくつちや駄目だ。ハハハハ」

と笑つた。

後戻あとまたりをして元の路みちへ出て、半町ほど行くと、掘子は右へ折れた。初さんと自分は真直に坂を下りる。下り切ると、四五間平らな路を縫うように突き当つた所で、初さんが留まつた。

「おい。まだ下りられるか」

と聞く。実はよほど前から下りられない。しかし中途で降参したら、落第するにきまつてから、我慢に我慢を重ねて、ここまで来たようなものの、内心ではその内もうどん底へ行き着くだろうくらいの目算はあった。そこへ持つて来て、相手がぴたりと留まつて、一段落つけた上、さて改めて、まだ下りる気かと正式に尋ねられると、まだ下りるべき道程はけつして一丁や二丁でないと云う意味になる。——自分は暗いながら初さんの顔を見て考えた。御免蒙ろうかしらと考えた。こう云う時の出処進退は、全く相手の思わく一つできまる。いかな馬鹿でも、いかな利口でも同じ事である。だから自分の胸に相談するよりも、初さんの顔色で判断する方が早く片がつく。つまり自分の性格よりも周囲の事情が運命を決する場合である。性格が水準以下に下落する場合である。平生築き上げたと自信している性格が、めちやくちやに崩れる場合のうちでもっとも顕著なる例である。——自分の無性格論はここからも出ている。

前申す通り自分は初さんの顔を見た。すると、下りようじゃないかと云う親密な情合も見えない。下りなくつちや御前のためにならないと云う忠告の意も見えない。是非下ろして見せると云う威嚇もあらわれていない。下りたかろうと焦らす気色は無論ない。

ただ下りられまいと云う侮辱の色で持ち切っている。それは何ともなかった。しかしその色の裏面には落第と云う切実な問題が潜んでいる。この場合における落第は、名誉より、品性より、何よりも大事件である。自分は窒息しても下りなければならぬ。

「下りましょう」

と思ひ切つて、云つた。初さんは案に相違の様子であつたが、

「じゃ、下りよう。その代り少し危ないよ」

と穏かに同意の意を表した。なるほど危ないはずだ。九十度の角度で切つ立つた、屏風のような穴を真直に下りるんだから、猿の仕事である。梯子が懸つてゐる。勾配も何にもない。こちらの壁にぴったり食つついて、棒を空にぶら下げたように、覗くと端が見えかねる。どこまで続いてるんだか、どこで縛りつけてあるんだか、まるで分らない。

「じゃ、己が先へ下りるからね。氣をつけて来たまえ」

と初さんが云つた。初さんがこれほど叮嚀な言葉を使おうとは思ひも寄らなかつた。おおかた神妙に下りましようと思つたんで、幾分か憐愍の念を起したんだろう。やがて初さんは、ぐるりと引つ繰り返つて、正式に穴の方へ尻を向けた。そうして屈んだ。と思うと、足からだんだん這入って行く。しまいには顔だけが残つた。やがてその顔も消え

た。顔が出ている間は、多少の安心もあつたが、黒い頭の先までが、ずぼりと穴へはまった時は、さすがに心配なのと心細いので、じつとしていられなくなつて、足をつま立てるようにして、上から見下した。初さんは下りて行く。黒い頭とカンテラの灯だけが見える。その時自分は気味の悪いうちにも、こう考えた。初さんの姿が見えるうちに下りてしまわないと、下り損なうかも知れない。面目ない事が出来る。早くするに越した分別はないと決心して、いきなり後ろ向になつて初さんのように、膝を地につけて、手で摺り下りながら、草鞋の底で段々を探った。

両手で第一段目を握つて、足を好加減な所へ掛けると、背中が海老のように曲つた。それから、そろそろ足を伸ばし出した。真直に立つと、カンテラの灯が胸の所へ来る。じつとしていると燻されてしまう。仕方がないから、片足下げる。手もこれに応じて握り更えなくつちやならない。おろそうとすると、指で掲げてるカンテラが、とんだところで、始末の悪いように動く。滅多に振ると、着物が焼けそうになる。大事を取ると壁へぶつかつて灯が揉み潰されそうになる。親指へカップを差し込んで、振子のように動かした時は、はなはだ軽便な器械だと思つたが、こうなると非常に邪魔になる。その上梯子の幅は狭い。段と段の間がすこぶる長い。一段さがるに、普通の倍は骨が折れる。



そこへもつて来て恐怖が手伝う。そうして握り直したんびに、段木だんぎがぬらぬらする。鼻を押しつけるようにして、乏しい灯で透すかして見ると、へな土が一面に粘ついている。上のぼり下りの草鞋で踏つけたものと思われる。自分は梯子の途中で、首を横へ出して、下を覗のぞいた。よせば善かったが、つい覗いた。すると急にぐらぐらと頭が廻まわつて、かた握った手がゆるんで来た。これは死ぬかも知れない。死んじゃ大變だと、噛かりついたなり、いきなり眼を閉ねむった。石鹼球シャボンだまの大きなのが、ぐるぐる散らついているうちに、初さんが降りて行く。本當を云うと、下を覗いた時にこそ、初さんの姿が見えれば見えるんで、ねぶった眼の前に湧わいて出る石鹼球の中に、初さんがいる訳がない。しかし現にいる。そうして降りて行く。いかにも不思議であつた。今考えると、目舞めまいのする前に、ちらりと初さんを見たに違ないんだが、ぐらぐらと咄癡とつちて、死ぬ方が怖こわくなつたもんだから、初さんの影は網膜に映じたなり忘れちまつたのが、段木に噛りついて眼を閉るや否や生き返つたんだらう。ただしそう云う事が学理上あり得るものか、どうか知らない。その当時は夢中である。坑あなは暗い、命は惜しい、頭は乱れている。生きてるか死んでるか判然しない。そこへ初さんが降りて行く。眼の中で降りて行くんだか、足の下で降りて行くんだかめちやくちやであつた。が不思議な事に、眼を開けるや否やまた下を見

た。するとやはり初さんが降りている。しかも切つ立つた壁の向う側を降りているようだ。今度は二度目のせいか、落ちるほど眩暈めまいもしなかつたんで、よくよく眸ひとみを据すえて見ると、まさに向う側を降りて行く。はてなと思った。ところへカンテラがまたじいと鳴った。保証つきの灯火あかりだが、こうなるとまた心細い。初さんはずんずん行くようだ。自分もここに至れば、全速力で降りるのが得策だと考えついた。そこでぬるぬるする段木ぎを握り更かえ、握り更かえてようやく三間ばかり下がると、足が土の上へ落ちた。踏んで見たがやッぱり土だ。念のため、手を離さずに足元の様子を見ると、梯子はしは全く尽きている。踏んでいる土も幅一尺で切れている。あとは筒拔つつぬけの穴だ。その代り今度は向側むこうがわに別の梯子がついている。手を延ばすと届くように懸かけてある。仕方がないから、自分はまだこの梯子へ移った。そうして出来るだけ早く降りた。長さは前のと同様である。するとまた逆の方向に、依然として梯子が懸かけてある。どうも是非に及ばない。また移った。やつとの思いでこれも片づけると、新しい梯子はもとのごとく向側に懸かつている。ほとんど際限がない。自分が六つめの梯子まで来た時は、手が怠だるくなつて、足が悸ふるえ出して、妙な息が出て来た。下を見ると初さんの姿はとくの昔に消えている。見れば見るほど真闇まつくらだ。自分のカンテラへはじいじいと点滴しずくが垂れる。草鞋わらじの中へは清水しみずがしみ込

んで来る。

しばらく休んでいたら、手が抜けそうになった。下り出すと足を踏み外しかねぬ。けれども下りるだけ下りなければ、のめって逆さに頭を割るばかりだと思ふと、どうか、段々を下り切る力が、どこから出て来る。あの力の出所はどうてい分らない。しかしこの時は一度に出ないで、少しずつ、腕と腹と足へ煮染み出すように来たから、自分でも、ちゃんと自覚していた。ちょうど試験の前の晩徹夜をして、疲労の結果、うつとりして急に眼が覚めると、また五六頁は読めると同じ具合だと思う。こう云う勉強に限って、何を読んだか分らない癖に、とにかく読む事は読み通すものだが、それと同じく自分もたしかに降りたとは断言しにくい、何しろ降りた事はたしかである。下読をする書物の内容は忘れても、頁の数は覚えているごとく、梯子段の数だけは明かに記憶していた。ちょうど十五あった。十五下り尽しても、まだ初さんが見えないには驚いた。しかし幸い一本道だったから、どぎまぎしながらも、細い穴を這い出すと、ようやく初さんがいた。しかも、例のように無敵な文句は並べずに、

「どうだ苦しかったか」

と聞いてくれた。自分は全く苦しいんだから、

「苦しいです」

と答えた。次に初さんが、

「もう少しだ我慢しちゃ、どうだ」

と奨励した。次に自分は、

「また梯子があるんですか」

と聞いた。すると初さんが、

「ハハハハもう梯子はないよ。大丈夫だ」

と好意的の笑を洩らした。そこで自分も我慢のしついでだと観念して、また初さんの尻について行くと、また下りる。そうして下りるに従って路へ水が溜って来た。ぴちゃぴちやと云う音がする。カン・テラひの灯で照らして見ると、下谷辺したやの溝渠どぶが溢あふれたように、薄鼠うすねずみになってだぶだぶしている。その泥水がまた馬鹿に冷たい。指の股が切られるようである。けれども一面の水だから、せつかく水を抜いた足を、また無惨むざんにも水の中へ落さなくっちゃならない。片足を揚げると、五位鷺ごいさぎのようにそのまま立っていたくなる。それでも仕方なしに草鞋わらじの裏を着けるとぴちやりと云うが早いか、水際から、魚の鰭ひれのような波が立つ。その片側がカン・テラひの灯できらきらと光るかと思うと、すぐ落ち

ついてもとに帰る。せつかく平<sup>たいら</sup>になつた上をまたぴちやりと踏み荒らす。魚の鰭がまた光る。こう云う風にして、奥へ奥へと這<sup>はい</sup>入つて行くと、水はだんだん深くなる。ここを潜<sup>くぐ</sup>り抜けたら、乾いた所へ出られる事かと、受け合われない行先をあてにして、ぐるりと廻ると、足の甲でとまつた水が急に脛<sup>すね</sup>まで来た。この次にはと、辛抱して、右に折れると、がっくり落ちがして膝<sup>ひざ</sup>まで漬<sup>つ</sup>かつちまう。こうなると、動きたんびにざぶざぶ云う。膝で切る波が渦<sup>うず</sup>を捲<sup>ま</sup>いて流れる。その渦がだんだん股<sup>もも</sup>の方へ押し寄せてくる。全く危険だと思つた。ことによれば、何かの原因で水が出たんだから、今に坑<sup>あな</sup>のなかが、いっぱいになりやしないかと思うと急に腰から腹の中までが冷たくなって来た。しかるに初さんは辟<sup>へき</sup>易<sup>えき</sup>した体<sup>てい</sup>もなく、さつさと泥水を分けて行く。

「大丈夫なんですか」

と後<sup>うしろ</sup>から聞いて見たが、初さんは別に返事もせずに、依然として、ざぶりざぶりと水を押し分けて行く。自分の考えるところによると、いくら銅山でも水に漬<sup>つ</sup>かつていては、仕事ができるはずがない。こうどぶつく以上は、何か変事でもあるか、または廢坑へでも連れ込まれたに違いない。いずれにしても災難だと、不安の念に冒<sup>おか</sup>されながら、もう一遍初さんに聞こうかしらと思つてゐるうち、水はどうとう腰まで来てしまった。

「まだ這入るんですか」

と、自分はたまらなくなつたから、後から初さんと呼び留めた。この声は普通の質問の声ではない。吾身を思うの余り、命が口から飛び出したようなものである。だから、いざと云う間際には単音の叫声となつてあらわれるところを、まだ初さんの手前を憚るだけの余裕があるから、しばらく恐怖の質問と姿を変じたまでである。この声を聞きつけた時は、さすがの初さんも水の中で留まつたなり、振り返つた。カン・テラを高く差し上げる。眸を据えると初さんの眉の間に八の字が寄つて来た。しかも口元は笑っている。「どうした。降参したか」

「いえ、この水が……」

と自分は、腰の辺を、物凄そうに眺めた。初さんは毫も感心しない。やつぱりにここにしている。出水の往来を、通行人が尻をまくつて面白そうに渉る時のように見えた。自分もこれで疑いは晴れたが、根が臆病だから、念のため、もう一度、

「大丈夫でしょうか」

を繰返した。この時初さんはますます愉快そうな顔つきだったが、やがて真面目になつて、

「八番坑だ。これがどん底だ。水ぐらいあるなあ当前だ。そんなに、おっかながるにや当らねえ。まあ好いからこつちへ来ねえ」

となかなか承知しないから、仕方なしに、股<sup>また</sup>まで濡<sup>ぬ</sup>らしてついて行つた。たださえ暗い坑<sup>あな</sup>の中だから、思い切つた喩<sup>たとえ</sup>を云えば、頭<sup>あたま</sup>から暗闇<sup>くらやみ</sup>に濡<sup>ぬ</sup>れてると形容しても差支<sup>さしつかえ</sup>ない。その上本当の水、しかも坑と同じ色の水に濡れるんだから、心持の悪い所が、倍悪くなる。その上水は踝<sup>くるぶし</sup>からだんだん競<sup>せ</sup>り上がつて来る。今では腰まで漬<sup>つ</sup>かっている。しかも動<sup>うご</sup>くたんびに、波が立つから、實際の水際以上までが濡れてくる。そうして、濡れた所は乾かないのに、波はことによると、濡れた所よりも高く上がるから、つまりは一寸二寸と身体<sup>からだ</sup>が腹まで冷えてくる。坑で頭から冷えて、水で腹まで冷えて、二重に冷え切つて、不知案内<sup>ふちあんない</sup>の所を海鼠<sup>なまこ</sup>のようについて行つた。すると、右の方に穴があつて、洞<sup>ほら</sup>のよう<sup>ひら</sup>に深く開<sup>ひら</sup>いてる中から、水が流れて来る。そうしてその中であんかあん<sup>さくじば</sup>と云う音がする。作事<sup>さくじ</sup>場に違<sup>ちが</sup>いない。初さんは、穴の前に立つたまま、

「そうら。こんな底でも働<sup>はたら</sup>いてるものがあるぜ。真似<sup>まね</sup>ができるか」

と聞いた。自分は、胸が水に浸<sup>ひた</sup>るまで、屈<sup>こ</sup>んで洞の中を覗<sup>のぞ</sup>き込んだ。すると奥の方が一面に薄明るく——明るくと云うが、締りのない、取り留めのつかない、微<sup>かすか</sup>な灯<sup>ひ</sup>を無理に

広い間へ使つて、引つ張り足りないから、せつかくの光が暗闇に圧倒されて、茫然と濁っている体であつた。その中に一段と黒いものが、斜めに岩へ吸いついている辺から、かあんかあんと云う音が出た。洞の四面へ響いて、行き所のない苦しまぎれに、水に跳ね返ったものが、纏まつて穴の口から出て来る。水も出てくる。天井の暗い割には水の方に光がある。

「這入つて見るか」

と云う。自分はぞつと寒気がした。

「這入らないでも好いです」

と答えた。すると初さんが、

「じや止めにして置こう。しかし止めるなあ今日だけだよ」

と但し書をつけて、一応自分の顔をとくと見た。自分は案の定釣り出された。

「明日つから、ここで働くんでしょうか。働くとすれば、何時間水に漬かつてる——漬かつてれば義務が済むんですか」

「そうさなあ」

と考えていた初さんは、



「一昼夜に三回の交替だからな」

と説明してくれた。一昼夜に三回の交替ならひとくぎり八時間になる。自分は黒い水の上へ眼を落した。

「大丈夫だ。心配しなくってもいい」

初さんは突然慰めてくれた。気の毒になったんだろう。

「だって八時間は働かなくっちゃならないんですよ」

「そりゃきまりの時間だけは働かせられるのは知れ切ってらあ。だが心配しなくってもいい」

「どうしてですか」

「好いてえ事よ」

と初さんは歩き出した。自分も黙って歩き出した。二三歩水をざぶざぶ云わせた時、初さんは急に振り返った。

「新前は大抵二番坑か三番坑で働くんだ。よっぽど様子が分らなくっちゃ、ここまで下りちゃ来られねえ」

と云いながら、にやにやと笑った。自分もにやにやと笑った。

「安心したか」

と初さんがまた聞いた。仕方がないから、

「ええ」

と返事をして置いた。初さんは大得意であつた。時にどぶどぶ動く水が、急に膝まで減つた。爪先で探ると段々がある。一つ、二つと勘定すると三つ目で、水は踝くるぶしまで落ちた。それで平らに続いている。意外に早く高い所へ出たんで、非常に嬉うれしかった。それから先は、とんとん拍子びょうしに嬉しくなつて、曲れば曲るほど地面が乾いて来る。しまいはびちやりとも音のしない所へ出た。時に初さんが器械を見る気があるかと尋ねたが、これは諸方のスノコすのこから落ちて来た鉤あづねを聚めて、第一坑へ揚げて、それから電車でシキしきの外へ運び出す仕掛を云うんだと聞いて、頭から御免蒙ごめんこうぶつた。いくら面白く運転する器械でも、明日の自分あすに用のない所は見る気にならなかつた。器械を見ないとするとこれで、まあ坑内の模様を一応見物した訳になる。そこで案内の初さんが帰るんだと云う通知を与えてくれた。腰きり水に漬つかるのは、いかな初さんも一度でたくさんだと見えて、帰りには比較的濡ぬれないで済む路を通つてくれた。それでも十間ほどは腫ふくら脛はざまで水が押し寄せた。この十間を通るときに、様子を知らない自分はまた例の所へ来たなど

感づいて、往きに臍へその近所が氷りつきそうであつた事を思い出しつつ、今か今かと冷たい足を運んで行つたが、鵜いすかの嘴はしと善い方へばかり、食い違つて、行けば行くほど、水が浅くなる。足が軽くなる。ついにはまた乾いた路へ出てしまった。初さんに、

「もう済んだでしようか」

と聞いて見ると、初さんはただ笑つていた。その時は自分も愉快だったが、しばらくすると、例の梯子はしこの下へ出た。水は胸までくらい我慢するがこの梯子には、――せめて帰り路だけでも好いから、遁のがれたかつたが、やつぱりちようどその下へ出て来た。自分は蜀しょくの栈道と云う事を人から聞いて覚えていた。この梯子は、栈道を逆さかに釣せるして、未練なく傾斜の角度を抜きにしたものである。自分はそこへ来ると急に足が出なくなつた。突然脚氣かっけに罹かかつたような心持になると、思わず、腰こしを後へ引つ張られた。引つ張られたのは初さんに引つ張られたのかと思う読者もあるかもしれないが、そうじゃない。そう云う気分が起つたんで、強いて形容すれば、疝氣せんきに引つ張られたとでも叙じよしたら善からう。何しろ腰が伸のせない。もつともこれは逆栈道さかさんどうの祟たたりだと一概に断言する気でもない、さつきから案内の初さんの方で、だいぶ御機嫌ごきげんが好いので、相手の寛大な御情おなさけにつけ上つて、奮発たかの箍かがしだいに緩ゆるんだのもたしかな事実である。何しろ歩けなく

なつた。この腰附を見ていた初さんは、

「どうだ歩けそうもねえな。まるで屁<sup>へ</sup>っぴり腰だ。ちつと休むが好い。おれは遊びに行つて来るから」

と云つたぎり、暗い所を潜<sup>くぐ</sup>つて、どこへか出て行つた。

あとは云うまでもなく一人になる。自分はべつとりと、尻を地びたへ着けた。ア・テ・シ・コはこう云うときに非常に便利になる。御蔭<sup>おかげ</sup>で、岩で骨が痛んだり、泥で着物が汚<sup>よご</sup>れたりする憂いがないだけ、惨憺<sup>みじめ</sup>なうちにも、まだ嬉しいところがあつた。そうして、硬く曲つた背中を壁へ倚<sup>も</sup>たせた。これより以上は横のものを豎<sup>たて</sup>にする気もなかつた。ただそのままの姿勢で向うの壁を見詰めていた。身体<sup>からだ</sup>が動かないから、心も働かないのか、心が居坐りだから、身体が怠けるのか、とにかく、双方<sup>あい</sup>相ひ合つて、生死<sup>せいし</sup>の間に彷徨<sup>ほうこう</sup>していたと見えて、しばらくは万事が不明瞭<sup>ふめいりょう</sup>であつた。始めは、どうか一尺立方でもいいから、明かるい空気が吸つて見たいような気がしたが、だんだん心が昏<sup>くら</sup>くなる。と坑<sup>あな</sup>のなかの暗いのも忘れてしまう。どつちがどつちだか分らなくなつて朦朧<sup>もうろう</sup>のうちに合<sup>が</sup>体<sup>たい</sup>稠<sup>ちゅう</sup>和<sup>わ</sup>して来た。しかしけつして寝たんじやない。しんとして、意識が稀薄<sup>しやばつき</sup>になつたまでである。しかしその稀薄な意識は、十倍の水に溶いた娑婆<sup>しやば</sup>氣であるから、いくら不透明でも

正気は失わない。ちょうど差し向いの代りに、電話で話しをするくらいの程度——もしくはこれよりも少しく不明瞭な程度である。かように水平以下に意識が沈んでくるのは、浮世の日が烈し過ぎて困る自分には——東京にも田舎にもおり終せない自分には——煩悶の解熱剤を頓服しなければならぬ自分には——神経繊維の端の端まで寄つて来た過度の刺激を散らさなければならぬ自分には——必要であり、願望であり、理想である。長蔵さんに引張られながら、道々空想に描いた坑夫生活よりも、たしかに上等の天国である。もし駆落が自滅の第一着なら、この境界は自滅の——第何着か知らないが、とにかく終局地を去る事遠からざる停車場である。自分は初さんに置いて行かれた少時の休憩時間内に、図らずもこの自滅の手前まで、突然釣り込まれて、——まあ、どんな心持がしたと思う。正直に云えば嬉しかった。しかし嬉しいと云う自覚は十倍の水に溶き交ぜられた正気の中に遊離しているんだから、ほかの娑婆気と同じく、劇烈には来ない。やっぱり稀薄である。けれど自覚はたしかにあった。正気を失わないものが、嬉しいと云う自覚だけを取り落す訳がない。自分の精神状態は活動の区域を狭められた片輪の心的現象とは違う。一般の活動を恣にする自由の天地はものとごとくに存在して、活動その物の強度が滅却して来たのみだから、平常の我とこの時の我との差はただ

濃淡の差である。その最も淡い生涯しょうがいの中に、淡い喜びがあった。

もしこの状態が一時間続いたら、自分は一時間の間満足していたろう。一日続いたら一日の間満足したに違ない。もし百年続いたにしても、やっぱり嬉しかったろう。ところが——ここでまた新しい心の活作用に現参げんざんした。

というのはあいにく、この状態が自分の希望通同じ所に留っていてくれなかった。動いて来た。油の尽きかかったランプの灯ひのように動いて来た。意識を数字であらわすと、平生へいぜい十のものが、今は五になつて留まつていた。それがしばらくすると四になる。三になる。推して行けばいつか一度は零れいにならなければならない。自分はこの経過に連れて淡くなりつつ変化する嬉うれしさを自覚していた。この経過に連れて淡く変化する自覚の度において自覚していた。嬉しさはどこまで行つても嬉しいに違ない。だから理窟りくつから云うと、意識がどこまで降さがつて行こうとも、自分は嬉しいとのみ思つて、満足するよりほかに道はないはずである。ところがだんだんと競せりおろして来て、いよいよ零に近くなつた時、突然として暗中あんちゆうから躍おどり出した。こいつは死ぬぞと云う考えが躍り出した。すぐに続いて、死んじや大變だと云う考えが躍り出した。自分は同時に、かつと眼を開あいた。

足の先が切れそうである。膝から腰までが血が通つて氷りついている。腹は水でも詰めたようである。胸から上は人間らしい。眼を開けた時に、眼を開けない前の事を思うと、「死ぬぞ、死んじゃ大変だ」までが順々につながって来て、そこで、ぷつりと切れている。切れた次ぎは、すぐ眼を開いた所作になる。つまり「死ぬぞ」で命の方向転換をやつて、やつてからの第一所作が眼を開いた訳になるから、二つのものは全く離れている。それで全く続いている。続いている証拠には、眼を開いて、身の周囲を見た時に、「死ぬぞ……」と云う声が、まだ耳に残つていた。たしかに残つていた。自分は声だの耳だのと云う字を使うが、ほかには形容しようがないからである。形容どころではない、実際に「死ぬぞ……」と注意してくれた人間があつたときや受け取れなかった。けれども、人間は無論いるはずはなし。と云つて、神——神は大嫌だ。やつぱり自分が自分の心に、あわてて思い浮べたまでであろうが、それほど人間が死ぬのを苦に病んでいようとは夢にも思い浮べなかつた。これだから自殺などではできないはずである。こう云う時は、魂の段取が平生と違ふから、自分で自分の本能に支配されながら、まるで自覚しないものだ。気をつけべき事と思う。この例なども、解釈のしようでは、神が助けてくれたともなる。自分の影身につき添っている——まあ恋人が多いようだが——

そう云う人々の魂が救ったんだともなる。年の若い割に、自分がこの声を艶子さんとも澄江さんとも解釈しなかったのは、己惚うねぼれの強い割には感心である。自分は生れつきそれほど詩的でなかったんだらう。

そこへ初さんがひょつくり帰つて来た。初さんを見るが早い、自分の意識はいよいよ明瞭めいりょうになった。これから例の逆棧道さかさんどうに登らなくっちゃならない事も、明日あしたから、鑿のみと槌つちでかあんかあんやらなくっちゃならない事も、南京米ナンキンまいも、南京虫ナンキンむしも、ジャン・ボーも達磨だるまも一時に残らず分つてしまい、そうして最後に自分の墮落まがもつとも明かに分つた。

「ちったあ気分は好いか」

「ええ少しは好いようです」

「じゃ、そろそろ登つてやろう」

と云うから、礼を云つて立っていると、初さんは景氣だんぎよく段木つかまを捕えて片足踏ふん掛かけながら、

「登りは少し骨が折れるよ。そのつもりで尾ついて来ねえ」

と振り返つて、注意しながら登り出した。自分は何となく寒々しい心持になつて、下から見上げると、初さんは登つて行く。猿のように登つて行く。そろそろ登つてくれる様



子も何もありやしない。早くしないとまた置いてきぼりを食う恐れがある。自分も思い切つて登り出した。すると二三段足を運ぶか運ばないうちになるほどと感心した。初さんの云う通り非常に骨が折れる。全く疲れているばかりじゃない。下りる時には、胸から上が比較的前へ出るんで、幾分か背の重みを梯子に託する事ができる。しかし上りになると、全く反対で、ややともすると、身体が後へ反れる。反れた重みは、両手で持ち応えなければならぬから、二の腕から肩へかけて一段ごとに余分の税がかかる。のみならず、手の平と五本の指で、この<sup>しめだか</sup>高を握らなければならない。それが前に云つた通りぬるぬるする。梯子を一つ片づけるのは容易の事ではない。しかもそれが十五ある。初さんは、とつくの昔に消えてなくなつた。手を離しさえすれば真暗闇に逆落しになる。離すまいとすれば肩が抜けるばかりだ。自分は七番目の梯子の途中で火焰のような息を吹きながら、つくづく労働の困難を感じた。そうして熱い涙で眼がいつぱいになった。

二三度上<sup>うわまつた</sup>瞼と下瞼を打ち合して見たが、依然として、視覚はぼうつとしてゐる。五寸と離れない壁さえたしには分らない。手の甲で擦ろうと思ふが、あやにく両方とも塞<sup>ふさ</sup>がつている。自分は口惜<sup>くやし</sup>くなつた。なぜこんな猿の真似をするように零落<sup>おちぶ</sup>れたのかと

思った。倒れそうになる身体からだを、できるだけ前の方にのめらして、梯子に倚もたれるだけ倚たれて考えた。休んだと註釈する方が適當かも知れない。ただ中途で留まったと云い切つてもよろしい。何しろ動かなくなった。また動けなくなった。じつとして立つていた。カン・テ・ラのじいと鳴るのも、足の底へ清水しみずが沁み込むのも、全く気がつかなかった。したがって何分過なんぶんつたのかとんと感じに乘らない。するとまた熱い涙が出て来た。心が存外たしかであるのに、眼だけが霞かすんでくる。いくら瞬まばたきをしても駄目だ。湯の中に眸ひとみを漬つけてるようだ。くしゃくしゃする。焦心じれつたくなる。痼かんが起る。奮興ふんこうの度が烈はげしくなる。そうして、身体は思うように利きかない。自分は齒を食い締しめて、両手で握った段木を二度度揺り動かした。無論動きやしない。いつその事、手を離しまおうかしらん。逆さに落ちて頭から先へ砕ける方が、早く片がついていい。とむらむらと死ぬ気が起った。――梯子の下では、死んじゃ大変だと飛び起きたものが、梯子の途中へ来ると、急に太い短い無分別を起して、全く死ぬ気になったのは、自分の生涯しょうがいのにおける心理推移の現象のうちで、もっとも記憶すべき事実である。自分は心理学者でないから、こう云う変化を、どう説明したら適切であるか知らないけれども、心理学者はかえって、實際の経験に乏しいようにも思うから、杜撰ずさんながら、一応自分の愚見だけを述べて、参考にした

い。

ア・テ・シ・コを尻に敷いて、休息した時は、始めから休息する覚悟であつた。から心に落ちつきが有る。刺激が少い。そう云う状態で壁へ倚りかかっていると、その状態がなだらかに進行するから、自然の勢いとしてだんだん気が遠くなる。魂が沈んで行く。こう云う場合における精神運動の方向は、いつもきまつたもので、必ず積極から出立してしだいに消極に近づく径路を取るのが普通である。ところがその普通の径路を行き尽くして、もうこれがどん詰だと云う間際になると、魂が割れて二様の所作をする。第一は順風に帆を上げる勢いで、このどん底まで流れ込んでしまう。するとそれぎり死ぬ。でなければ、大切の手前まで行つて、急に反対の方角に飛び出してくる。消極へ向いて進んだものが、突如として、逆さまに、積極の頭へ戻る。すると、命がたちまち確實になる。自分が梯子の下で経験したのはこの第二に当る。だから死に近づきながら好い心持に、三途のこちら側まで行つたものが、順路をてくてく引き返す手数を省いて、急に、娑婆の真中に出現したのである。自分はこれを死を転じて活に帰す経験と名づけている。

ところが梯子の中途では、全くこれと反対の現象に逢つた。自分は初さんの後を追つ

懸けて登らなければならぬ。その初さんは、とつくに見えなくなつてしまつた。心は焦る、氣は揉める、手は離せない。自分は猿よりも下等である。情ない。苦しい。――万事が痛切である。自覺の強度がしだいに劇しくなるばかりである。だからこの場合における精神運動の方向は、消極より積極に向つて登り詰める状態である。さてその状態がいつまでも進行して、奮興の極度に達すると、やはり二様の作用が出る訳だが、とくに面白いと思うのはその一つ、――すなわち積極の頂点からとんぼ返りを打つて、魂が消極の末端にひよつくり現われる奇特である。平たく云うと、生きてる事実が明瞭になり切つた途端に、命を棄てようと決心する現象を云うのである。自分はこれを活上より死に入る作用と名けている。この作用は矛盾のごとく思われるが實際から云うと、矛盾でも何でも、魂の持前だから存外自然に行われるものである。論より証拠發奮して死ぬものは奇麗に死ぬが、いじけて殺されるものは、どうも旨く死に切れないようだ。人の身の上はとにかく、こう云う自分が好い証拠である。梯子の途中で、ええ忌々しい、死んじまえと思つた時は、手を離すのが怖くも何ともなかった。無論例のごとくどきんなどとはけつしてしなかつた。ところがいざ死のうとして、手を離しかけた時に、また妙な精神作用を承当した。

自分は元來が小説的の人間じゃないんだが、まだ年が若かったから、今まで浮氣に自殺を計画した時は、いつでも花々しくやつて見せたいと云う念があつた。短銃ピストルでも九寸くすん五分ごぶでも立派に——つまり人が賞めてくれるように死んでみたいと考えていた。できるならば、華嚴けげんの瀑たきまででも出向きたいなどと思つた事もある。しかしどうしても便所や物置で首を縊くるのは下等だと断念していた。その虚栄心が、この際突然首を出した。どこから出したか分らないが、出した。つまり出すだけの余地があつたから出したに相違あるまいから、自分の決心はいかに真面目まじめであつたにしても、さほど差し逼せまつてはいなかつたんだらう。しかしこのくらい断乎だんことして、現に梯子段はしごだんから手を離しかけた、最中に首を出すくらいだから、相手もなかなか深い勢力を張つていたに違ない。もつともこれは死んで銅像になりたがる精神と大した懸隔けんかくもあるまいから、普通の人間としては別に怪しむべき願望とも思わないが、何しろこの際の自分には、ちと贅沢ぜいたく過ぎたようだ。しかしこの贅沢心のために、自分は発作性ほつさせいの急往生を思いとまつて、不束ふつつかながら今日まで生きている。全く今はの際きわにも弱点を引張つていた御蔭である。

話すところなる。——いよいよ死んじまえと思つて、体を心持後あとへ引いて、手の握にぎりをゆるめかけた時に、どうせ死ぬなら、ここで死んだつて冴さえない。待て待て、出てから

華嚴けじんの瀑たきへ行けと云う号令——号令は変だが、全く号令のようなものが頭の中に響き渡った。ゆるめかけた手が自然と緊しまった。曇った眼が、急に明かるくなった。カン・テラが燃えている。仰向あおむくと、泥で濡れた梯子段が、暗い中まで続いている。是非共登らなければならぬ。もし途中で挫折ざせつすれば犬死になる。暗い坑あなで、誰も人のいない所で、日の目も見ないで、鉋あらがねと同じようにころげ落ちて、それっきり忘れられるのは——案内の初さんにさえ忘れられるのは——よし見つかつてても半獸半人の坑夫共に輕蔑けいべつされるのは無念である。是非共登り切っちまわなければならぬ。カン・テラは燃えている。梯子は続いている。梯子の先には坑が続いている。坑の先には太陽が照り渡っている。広い野がある、高い山がある。野と山を越して行けば華嚴の瀑がある。——どうあつても登らなければならぬ。

左の手を頭の上まで伸ばした。ぬらつく段木を指の痕あとのつくほど強く握った。濡れた腰をうんと立てた。同時に右の足を一尺上げた。カン・テラの灯ひは暗い中を豎たてに動いて行く。坑は層そう一層いっそうと明かるくなる。踏み棄すてて去る段々はしだいに暗い中に落ちて行く。吐く息が黒い壁へ当る。熱い息である。そうして時々は白く見えた。次には口を結んだ。すると鼻の奥が鳴った。梯子はまだ尽きない。懸崖けんがいからは水が垂れる。ひらり

とカン・テラを翻えすと、崖の面を掠めて弓形にじいと、消えかかつて、手の運動の止まる所へ落ちついた時に、また真直に油煙を立てる。また翻えす。灯は斜めに動く。梯子の通る一尺幅を外れて、がんがらがんの壁が眼に映る。ぞつとする。眼が眩む。眼を閉つて、登る。灯も見えない、壁も見えない。ただ暗い。手と足が動いている。動く手も動く足も見えない。手障足障だけで生きて行く。生きて登って行く。生きると云うのは登る事で、登ると云うのは生きる事であつた。それでも——梯子はまだある。

それから先はほとんど夢中だ。自分で登つたのか、天佑で登つたのかほとんど判然しない。ただ登り切つて、もう一段も握る梯子がないと云う事を覺つた時に、坑の中へぴたりと坐つた。

「どうした。上がつて来たか。途中で死にやしねえかと思つて、——あんまり長えから。見に行こうかと思つたが、一人じゃ気味がわるいからな。だけでも、好く上がつて来たな。えらいや」

と待ちかねて、もじもじしていた初さんが大いに喜んでくれた。何でも梯子の上でよっぽど心配していたらしい。自分はただ、

「少し気分が悪るかつたから途中で休んでいました」

と答えた。

「気分が悪い？ そいつあ困ったろう。途中って、梯子の途中か」

「ええ、まあそうです」

「ふうん。じゃ明日は作業もできめえ」

この一言を聞いた時、自分は糞でも食えと思った。誰が土竜の真似なんかするものかと思った。これでも美しい女に惚れられたんだと思った。坑を出れば、すぐ華嚴の瀑まで行くんだと思った。そうして立派に死ぬんだと思った。最後に半時もこんな獣を相手にしていられるものかと思った。そこで、自分は初さんに向って、簡単に、

「よければ上がりましょう」

と云った。初さんは怪訝な顔をした。

「上がる？ 元気だなあ」

自分は「馬鹿にするねえ、この明盲目め。人を見損なやがって」と云いたかった。しかし口だけは叮嚀に、一言、

「ええ」

と返事をして置いた。初さんはまだぐずぐずしている。驚いたと云うよりも、やっぱり



馬鹿にしたぐずつき方である。

「おい大丈夫かい。冗談じゃねえ。顔色が悪いぜ」

「じゃ僕が先へ行きましょう」

と自分はむっとして歩き出した。

「いけねえ、いけねえ。先へ行っちゃいけねえ、後から尾いて来ねえ」

「そうですか」

「当前だあな。人つけ。誰が案内を置き去にして、先へ行く奴があるかい、何でい」

と初さんは、自分を払い退けないばかりにして、先へ出た。出たと思うと急に速力を増した。腰を折ったり、四つに這ったり、背中を横つ丁にしたり、頭だけ曲げたり、坑の恰好しだいいろいろなに変化する。そうして非常に急ぐ。まるで土の中で生れて、銅脈の奥で教育を受けた人間のようである。畜生中つ腹で急ぎやがるなど、こっちも負けないう気で歩き出したが、そこへ行くと、いくら氣ばかり張っていても駄目だ。五つ六つ角を曲って、下りたり上ったり、がたつかせているうちに、初さんは見えなくなった。と思うと、何とかして、何とか、ててててと云う歌を唄う。初さんの姿が見えないのに、初さんの声だけは、坑の四方へ反響して、籠ったように打ち返してくる。意地の悪

い野郎だと思った。始めのうちこそ、追つついてやるから今に見ていろと云う勢で、根限り這ったり屈んだりしたが、残念な事には初さんの歌がだんだん遠くへ行つてしまふ。そこで自分は追いつく事はひとまず断念して、初さんのでてててを道案内にして進む事にした。当分はそれで大概の見当がついたが、しまいにはそのでててても怪しくなつて、とうとうまるで聞えなくなつた時には、さすがに茫然とした。一本道なら初さんなどを頼りにしなくつても、自力で日の当る所まで歩いて出て見せるが、何しろ、長年掘荒した坑だから、まるで土蜘蛛の根拠地みたようにいろいろな穴が、とんでもない所に開いている。滅多な穴へ這入るとまた腰きり水に漬る所か、でなければ、例の逆さの栈道へ出そうで容易に踏み込めない。

そこで自分は暗い中に立ち留つて、カンテラの灯を見詰めながら考えた。往きには八番坑まで下りて行つたんだから帰りには是非共電車の通る所まで登らなければならぬ。どんな穴でも上りならば好いとする。その代り下りなら引返して、また出直す事にする。そうして迂路ついていたら、どこかの作事場へ出るだろう。出たら坑夫に聞くとしよう。こう決心をして、東西南北の判然しない所を好い加減に迷つていた。非常に気が急いて息が切れたが、めちやめちやに歩いたために足の冷たいのだけは癒つた。し

かしなかなか出られない。何だか同じ路を往ったり来たりするような案排で、あんまり、もどかしものだから、壁へ頭をぶつけて割っちまいたくなった。どっちを割るんだと云えば無論頭を割るんだが、幾分か壁の方も割れるだろうくらいの疳癬が起った。どうも歩けば歩くほど天井が邪魔になる、左右の壁が邪魔になる。草鞋の底で踏む段々が邪魔になる。坑総体が自分を閉じ込めて、いつまで立っても出してくれないのがもっとも邪魔になる。この邪魔ものの一局部へ頭を擲きつけて、せめて罅でも入らしてやろうと——やらないまでも時々思うのは、早く華嚴の瀑へ行きたいからであつた。そうこうしているうちに、向うから一人の掘子が来た。ばらの銅をスノコへ運ぶ途中と見えて例の箕を抱いてよちよちカンテラを揺りながら近づいた。この灯を見つけた時は、嬉しくって胸がどきりと飛び上がった。もう大丈夫と勇んで近寄って行くと、近寄るがものはない、向うでもこつちへ歩いて来る。二つのカンテラが一間ばかりの距離に近寄つた時、待ち受けたように、自分は掘子の顔を見た。するとその顔が非常な蒼ん蔵であつた。この坑のなかですら、只事とは受取れない蒼ん蔵である。あかるみへ出して、青い空の下で見たら、大変な蒼ん蔵に違ない。それで口を利くのが厭になった。こんな奴の癖に人に調戲つたり、嘲つたり、辱めたりするのかと思つたら、なおなお道を聞くの

が厭いやになった。死んだつて一人で出て見せると云う氣になった。手前共に口を聞くよう  
な安やすつぽい男じゃないと、腹の中でたしかに申し渡して擦すれ違ちがった。向うは何にも知ら  
ないから、これは無論だまつて擦れ違ちがった。行く先は暗くくなった。カンテラは一つに  
なった。氣はますます焦い慮らつて來た。けれどもなかなか出ない。ただ道はどこまでもあ  
る。右にも左にもある。自分は右にも這入はいつた、また左にも這入はいつた、また真直にも歩  
いて見た。しかし出られない。いよいよ出られないのかと、少しく途方に暮れている鼻  
の先で、かあんかあんと鳴り出した。五六歩で突き當あたつて、折れ込むと、小さな作事場  
があつて、一人の坑夫がしきりに槌つちを振り上げて鑿のみを敲たたいている。敲たたくたんびに鉋あらがねが壁  
から落ちて來る。その傍そばに俵はりこがある。これはさつきスノコへ投げ込んだ俵と同じ大き  
さで、もういっぱい詰はまっている。掘ほり子こが來て担かついで行くばかりだ。自分は今度こそいつ  
に聞いてやろうと思つた。が肝心かんじんの本人が一生懸命にかあんかあん鳴らしている。おま  
けに顔もよく見えない。ちようどいいから少し休んで行こうと云う氣が起つた。幸い俵  
がある。この上へ尻をおろせば、持つて來いの腰掛になる。自分はどさつとア・テ・シ・コを  
俵の上に落した。すると突然かあんかあんがやんだ。坑夫の影が急に長く高くなつた。  
鑿のみを持つたままである。

「何をしやがるんでい」

鋭い声が穴いっぱいに響いた。自分の耳にはたた敲き込まれるように響いた。高い影は大腿に歩いて来る。

見ると、足の長い、胸の張った、体格の逞しい男であつた。顔は背の割に小さい。その輪廓がやや判然する所まで来て、男は留まつた。そうして自分を見下した。口を結んでいる。二重瞼の大きな眼を見張っている。鼻筋が真直に通っている。色があかぐろ赭黒い。ただの坑夫ではない。突然として云つた。

「貴様は新前しんめえだな」

「そうです」

自分の腰はこの時すでに俵を離れていた。何となく、向うから近づいてくる坑夫が恐ろしかった。今まで一万余人の坑夫を畜生のように軽蔑していたのに、――誓つて死んでしまおうと覚悟をしていたのに、――大股に歩いて来た坑夫がたちまち恐ろしくなつた。しかし、

「何でこんな所を迷子まじついてるんだ」

と聞き返された時には、やや安心した。自分の様子を見て、故意に俵の上へ腰をおろし

たんでないと見極めた語調である。

「実は昨夕飯場へ着いて、様子を見に坑へ這入ったばかりです」

「一人でか」

「いいえ、飯場頭から人をつけてくれたんですが……」

「そうだろう、一人で這入れる所じゃねえ。どうしたその案内は」

「先へ出ちまいしました」

「先へ出た？ 手前を置き去りにしてか」

「まあ、そうです」

「太え野郎だ。よしよし今に己が送り出してやるから待つてろ」

と云ったなり、また鑿と槌をかあんかあん鳴らし始めた。自分は命令の通り待つていた。この男に逢ったら、もう一人で出る気がなくなった。死んでも一人で出て見せると威張った決心が、急にどこへか行ってしまった。自分はこの変化に気がついていて、それでも別に恥かしいとも思わなかった。人に公言した事でないから構わないと思った。その後人に公言したために、やらないでも済む事、やってはならない事を毎度やった。人に公言すると、しないのとは大變な違があるもんだ。その内かあんかあんがやんだ。

坑夫はまた自分の前まで来て、胡坐をかきながら、

「ちよつと待ちねえ。一服やるから」

と、煙草入を取り出した。茶色の、皮か紙か判然しないもので、股引に差し込んである上から筒袖が被さっていた。坑夫は旨そうに腹の底まで吸った煙を、鼻から吹き出している間に、短い羅宇の中途を、煙草入の筒でほんと払いた。小さい火球が雁首から勢よく飛び出したと思つたら、坑夫の草鞋の爪先へ落ちてじゅうと消えた。坑夫は殻になつた煙管をふつと吹く。羅宇の中に籠つた煙が、一度に雁首から出た。坑夫はその時始めて口を利いた。

「御前はどこだ。こんな所へ全体何しに來た。身体つきは、すらりとしているようだが。今まで働いた事はねえんだらう。どうして來た」

「実は働いた事はないんです。が少し事情があつて、來たんです。……」

とまでは云つたが、坑夫には愛想が尽きたから、もう、歸るんだとは云わなかつた。死ぬんだとはなおさら云わなかつた。しかし今までのように、腹の内で畜生あつかいにし、口先ばかり叮嚀にしていたのとはだいぶん趣が違ふ。自分はただ洗い攫い自分の思わくを話してしまわないだけで、話しただけは真面目に話したのである。すこしも裏表

はない。腹から叮嚀<sup>ていねい</sup>に答えた。坑夫はしばらくの間黙って雁首<sup>なづか</sup>を眺めていた。それからまた煙草を詰めた。煙が鼻から出だした真最中に口を開いた。

自分がその時この坑夫の言葉を聞いて、第一に驚いたのは、彼の教育である。教育から生ずる、上品な感情である。見識である。熱誠である。最後に彼の使った漢語である。——彼<sup>か</sup>れは坑夫などの夢にも知りようはずがない漢語を安々と、あたかも家庭の間で昨日<sup>きのう</sup>まで常住坐臥<sup>じょうじゅうざが</sup>使っていたかのごとく、使った。自分はその時の有様をいまだに眼の前に浮べる事がある。彼れは大きな眼を見張ったなり、自分の顔を熟視<sup>じくし</sup>したまま、心持頸<sup>くび</sup>を前の方に出して、胡坐<sup>こざ</sup>の膝<sup>ひざ</sup>へ片手を逆<sup>さか</sup>に突いて、左の肩を少し聳<sup>そび</sup>して、右の指で煙管を握<sup>く</sup>って、薄い唇<sup>くちびる</sup>の間から奇麗<sup>きれい</sup>な齒<sup>き</sup>を時々あらわして、——こんな事を云った。句の順序や、単語の使い方は、たしかな記憶をそのまま写したものである。ただ語声だけはどうしようもない。——

「亀の甲より年の功と云うことがあるだろう。こんな賤<sup>いや</sup>しい商売はしているが、まあ年長者の云う事だから、参考に聞くがいい。青年<sup>しょうねん</sup>は情<sup>じょう</sup>の時代だ。おれも覚<sup>おぼ</sup>えがある。情の時代には失敗するもんだ。君もそうだろう。己<sup>おれ</sup>もそうだ。誰でもそうにきまつてる。だから、察<sup>おれ</sup>している。君の事情と己<sup>おれ</sup>の事情とは、どのくらい違うか知らないが、何しろ察し



ている。咎めやしない。同情する。深い事故もあるだろう。聞いて相談になれる身体なら聞きもするが、シキから出られない人間じゃ聞いたって、仕方なし、君も話してくれない方がいい。おれも……」

と云い掛けた時、自分はこの男の眼つきが多少異様にかがやいていたと云う事に気がついた。何だか大変感じている。これが当人の云うごとくシキを出られないためか、または今云い掛けたおれもの後へ出て来る話のためか、ちよつと分りにくいが、何しろ妙な眼だった。しかもこの眼が鋭く自分をも見詰めている。そうしてその鋭いうちに、懐旧と云うのか、沈吟と云うのか、何だか、人を引きつけるなつかしみがあつた。この黒い坑の中で、人気はこの坑夫だけで、この坑夫は今や眼だけである。自分の精神の全部はたちまちこの眼球に吸いつけられた。そうして彼の云う事を、とつくり聞いた。彼はおれをも二遍繰り返した。

「おれも、元は学校へ行つた。中等以上の教育を受けた事もある。ところが二十三の時に、ある女と親しくなつて——詳しい話はしないが、それが基で容易ならん罪を犯した。罪を犯して気がついて見ると、もう社会に容れられない身体になつていた。もとより酔興でした事じゃない、やむを得ない事情から、やむを得ない罪を犯したんだが、社

会は冷刻なものだ。内部の罪はいくらでも許すが、表面の罪はけつして見逃さない。おれは正しい人間だ、曲った事が嫌だから、つまりは罪を犯すようにもなつたんだが、さして犯した以上は、どうする事もできない。学問も棄てなければならぬ。功名も抛たなければならぬ。万事が駄目だ。口惜しいけれども仕方がない。その上制裁の手に捕えられなければならぬ。（故意か偶然か、彼はとくに制裁の手と云う言語を使用した。）しかし自分が悪い覚がないのに、むやみに罪を着るなあ、どうしても己の性質としないでできない。そこで突つ走つた。逃げられるだけ逃げて、ここまで来て、とうとうシキの中へ潜り込んだ。それから六年というもの、ついに日光を見た事がない。毎日毎日坑の中でかんかん敲いているばかりだ。丸六年敲いた。来年になればもうシキを出たつて構わない、七年目だからな。しかし出ない、また出られない。制裁の手には捕まらないうが、出ない。こうなりや出たつて仕方がない。娑婆へ帰れたつて、娑婆でした所業は消えやしない。昔は今でも腹ん中にある。なあ君昔は今でも腹ん中にあるだろう。君はどうだ……」

と途中で、いきなり自分に質問を掛けた。

自分は藪から棒の質問に、用意の返事を持ち合せなかつたから、はつと思つた。自分

の腹ん中にあるのは、昔むかしどころではない。一二年前から一昨日おとといまで持ち越した現在に等しい過去である。自分はいつその事自分の心事をこの男の前に打ち明けてしまおうかと思つた。すると相手は、さも打ち明けさせまいと自分を遮さへぎるごとくに、話の続きを始めた。

「六年ここに住んでいるうちに人間の汚ないところは太抵みづく見悉した。でも出る氣にならない。いくら腹が立つても、いくら嘔吐おうとを催もよおしそうでも、出る氣にならない。しかし社会には、——日の当る社会には——ここよりまだ苦しい所がある。それを思うと、辛抱も出来る。ただ暗くつて狭い所だと思えばそれで済む。身体も今じゃ銅臭あかがねくさくなつて、一日もカンテラの油を嗅かがなくなつちやいらなくなつた。しかし——しかしそりやおれの事だ。君の事じゃない。君がそうなつちや大變だ。生きてる人間が銅臭くなつちや大變だ。いや、どんな決心でどんな目的を持つて来ても駄目だ。決心も目的もたつた二三日にさんちで突ツつき殺されてしまう。それが氣の毒だ。いかにも可哀想かわいそうだ。理想も何にもない鑿のみと槌つちよりほかに使う術すべを知らない野郎なら、それで結構だが。しかし君のような——君は学校へ行つたらう。——どこへ行つた。——ええ？ まあどこでもいい。それに若いよ。シキシキへ抛ほうり込まれるには若過ぎるよ。ここは人間の屑くずが抛り込まれる所だ。全く人

間の墓所だ。はかしよ生きて葬ほうそうられる所だ。一度踏ふん込こんだが最後、どんな立派な人間でも、出られつこのない陷穽だ。おとしあなそんな事とは知らずに、大方ポン引びきの言いなりしだいになつて、引張られて来たんだらう。それを君のために悲しむんだ。一人人を墮落させるのは大事件だ。殺しちまう方がまだ罪が浅い。墮落した奴はそれだけ害をする。他人に迷惑を掛ける。——実はおれもその一人だ。いちにんが、こうなつちや墮落しているよりほかに道はない。いくら泣いたつて、悔くやんだつて墮落しているよりほかに道はない。だから君は今のうち早く帰るがいい。君が墮落すれば、君のためにならないばかりじゃない。——君は親があるか……」

自分はただ一言あると答えた。

「あればなおさらだ。それから君は日本人だらう……」

自分は黙っていた。

「日本人なら、日本のためになるような職業についたらよからう。学問のあるものが坑夫になるのは日本の損だ。だから早く帰るがよからう。東京なら東京へ帰るさ。そうして正當な——君に適當な——日本の損にならないような事をやるさ。何と云つてもここはいけない。旅費がなければ、おれが出してやる。だから帰れ。分つたらう。おれは山

中組にいる。山中組へ来て安さんと聞きやあすぐ分る。尋ねて来るが好い。旅費はどうでも都合してやる」

安さんの言葉はこれで終った。坑夫の数は一万人と聞いていた。その一万人はことごとく理非人情を解しない畜類の發達した化物とのみ思い詰めたこの時、この人に逢ったのは全くの小説である。夏の土用に雪が降ったよりも、坑の中で安さんに説諭された方が、よほどの奇蹟のように思われた。大晦日を越すとお正月が来るくらいは承知していたが、地獄で仏と云う諺も記憶していたが、窮まれば通ずという熟語も習った事があるが、困った時は誰か来て助けてくれそうなものだくらいに思つて、芝居気を起しては困つていた事もたびたびあるが、——この時はまるで違ふ。真から一万人を畜生と思ひ込んで、その畜生がまたことごとく自分の敵だと考え詰めた最強度の断案を、忘るべからざる痛忿の焰で、胸に焼きつけた折柄だから、なおさらこの安さんに驚かされた。同時に安さんの訓戒が、自分の初志を一度に翻えし得るほどの力をもつて、自分の耳に応えた。

しばらくは二人して黙つていた。安さんは一応云うだけの事を云つてしまつたんだから、口を利かないはずであるが、自分は先方に対して、何とか返事をする義務がある。

義務をかいでは安さんに済まない。心底しんぞこから感謝の意を表ひょうした上で、自分の考えも少し聞いてもらいたいのには山々であったが、何分にも鼻の奥が詰つって不自由である。しかも強しいて言葉を出そうとすると、口へ出ないで鼻へ抜けそうになる。それを我慢すると、唇りょうはじの両端がむずむずして、小鼻がぴくついて来る。やがて鼻と口を塞せかれた感動が、出で端を失はつて、眼の中にたまって来た。睫まつげが重くなる。瞼まぶたが熱くなる。大に困おこった。安さんあさんも妙な顔をしている。二人ともばつが悪くなつて、差し向いで胡坐あぐらをかいたまま、黙もくっていた。その時次の作事場さくじばで鉦あらがねを敲たたく音がかあなかあん鳴なった。今考えると、自分と安さんが黙然もくねんと顔を見合せていた場所は、地面の下何百尺くらいな深さだか、それを正確に知しつて置きたかつた。都会でも、こんな奇遇は少い。銅山やまの中では有ろうはずがない。日の照らない坑あなの底で、世から、人から、歴史から、太陽からも、忘れられた二人が、ありがたい誨おしえを垂たれて、尊たつとい涙を流した舞台があるうとは、胡坐をかいで、黙然と互に顔を見守ももつていた本人よりほかに知るものはあるまい。

安さんはまた煙草たばこを呑のみ出した。ぷかりぷかりと煙けむが出た。その煙が濃く出では暗がりに消え、濃く出では暗がりに消える間に、自分はようやく声こゑが自由になつた。

「ありがたいです。なるほどあなたのおっしゃる通り人間のいる所じやないでしょう。

僕もあなたに逢うまでは、今日限り銅山を出ようかと思つてたんです。……」

さすが山を出て死ぬつもりだったとは云いかねたから、ここでちよつと句を切つたら、

「そりやなおさらだ。さつそく帰るがいい」

と、安さんが勢いをつけてくれた。自分はやつぱり黙っていた。すると、

「だから旅費はおれが拵えてやるから」

と云う。自分はさつきから旅費旅費と聞かされるのを、ただ善意に解釈していたが、さればと云つて毫も貰う氣は起らなかった。昨日飯場頭の合力を断つた時の料簡と同じかと云うと、それとも違う。昨日は是非貰いたかった、地平へ手を突いてまで貰いたかった。しかし草鞋錢を貰うよりも、坑夫になる方が得だと勘定したから、手を出して頂きたいところを、無理に断つたのである。安さんの旅費は始めから貰いたくない。好意を空しくすると云う点から見れば、貰わなければ済まないし、坑夫をやめるとすれば貰う方が便利だが、それにもかかわらず貰いたくなかった。これは今から考えると、全く向うの人格に対して、貰つては恥ずべき事だ、こちらの人格が下がるという念から萌したものらしい。先方がいかにも立派だから、こつちも出来るだけ立派にしたい、立派にし

なければ、自分の体面を損う虞がある。向うの好意を享けて、相当の満足を先方に与えるのは、こちらにも悦ばしいが、受けるべき理由がないのに、濫りに自己の利得のみを標準に置くのは、乞食と同程度の人間である。自分はこの尊敬すべき安さんの前で、自分は乞食である、乞食以上の人物でないと云う事実上の証明を与えるに忍びなかった。年が若いと馬鹿な代りに存外奇麗なものである。自分は

「旅費は頂きません」

と断った。

この時安さんは、煙草を二三ぶく吸して、煙管を筒へ入れかけていたが、自分の顔をひよいと見て

「こりや失敬した」

と云ったんで、自分は非常に氣の毒になった。もしやるから貰って置けとでも強いられなければと受けたに違ない。その後氣をつけて、人が金を貰うところを見てみると、始めは一応辞退して、後では大抵懐へ入れるようだが、これは全くこの心理状態の発達した形式に過ぎないんだと思う。幸い安さんがえらい男で、「こりや失敬した」と云ってくれたんで、自分はこの形式に陥らずに済んだのはありがたかった。



安さんはすぐさま旅費の件を撤回して

「だが東京へは帰るだろうね」

と聞き直した。自分は、死ぬ決心が少々鈍った際だから、ことによれば、旅費だけでも溜めた上、帰る事にしようと言ふ腹もあったんで、

「よく考えて見ましょう。いずれその中また御相談に参りますから」と答えた。

「そうか。それじゃ、とにかく路の分る所まで送ってやろう」

と煙草入を股引へ差し込んで、上から筒服の胴を被せた。自分はカンテラを提げて腰を上げた。安さんが先へ立つ。坑は存外登り安かった。例の段々を四五遍通り抜けて、二度ほど四つん這いになったら、かなり天井の高い、真直に立つて歩けるような路へ出た。それをだらだらと廻り込んで、右の方へ登り詰めると、突然第一見張所の手前へ出た。安さんは電気灯の見える所で留った。

「じゃ、これで別れよう。あれが見張所だ。あすこの前を右へついて上がると、軌道の敷いてある所へ出る。それから先は一本道だ。おれはまだ時間が早いから、もう少し働いてからでなくつつちゃあ出られない。晩には帰る。五時過ならいるから、暇があったら

来るがいい。気をつけて行きたまえ。さようなら」

安さんの影はたちまち暗い中へ這入った。振り向いて、一口礼を云った時は、もうカ・テラが角を曲っていた。自分は一人でシキの入口を出た。ふらふら長屋まで帰って来る。途中でいろいろ考えた。あの安さんと云う男が、順当に社会の中で伸びて行ったら、今頃は何に成っているか知らないが、どうしたって坑夫より出世しているに違ない。社会が安さんを殺したのか、安さんが社会に対して済まない事をしたのか——あんな男らしい、すっきりした人が、そうむやみに乱暴を働く訳がないから、ことによると、安さんが悪いんでなくて、社会が悪いのかも知れない。自分は若年であつたら、社会とはどんなものか、その当時明瞭に分らなかつたが、何しろ、安さんを追い出すような社会だから碌なもんじゃなからうと考えた。安さんを鼯鼠にするせいか、どうも安さんが逃げなければならぬ罪を犯したとは思われない。社会の方で安さんを殺したとしてしまわなければ気が済まない。その癖今云う通り社会とは何者だか要領を得ない。ただ人間だと思つていた。その人間がなぜ安さんのような好い人を殺したのかなおさら分らなかつた。だから社会が悪いんだと断定はして見たが、いっこう社会が憎らしくならなかつた。ただ安さんが可哀想であつた。できるなら自分と代つてやりたかつ

た。自分は自分の勝手に、自分を殺しにここまで来たのである。厭いやになれば帰つても差支かえない。安さんは人間から殺されて、仕方なしにここに生きているのである。帰ろうたつて、帰る所はない。どうしても安さんの方が気の毒だ。

安さんは墮落したと云つた。高等教育を受けたものが坑夫になつたんだから、なるほど墮落に違ない。けれどもその墮落がただ自分の墮落ばかりでなくつて、品性の墮落も意味しているようだから痛ましい。安さんも達磨だるまに金を注つぎ込むのかしら、坑あなの中で一六勝負ろくしょうぶをやるのかしら、ジャン・ポージャン・ポーを病人に見せて調戯からかうのかしら、女房を抵当に――まさか、そんな事もあるまい。昨日きのう着き立たての自分を見て愚弄ぐろうしないものがないうちで、安さんだけは暗い穴の底ながら、十分自分の人格を認めてくれた。安さんは坑夫の仕事はしているが、心しんまでの坑夫じゃない。それでも墮落したと云つた。しかもこの墮落から生涯しよがいの出る事ができないと云つた。墮落の底に死んで活いきてるんだと云つた。それほど墮落したと自覺じかくしていながら、生きて働いている。生きてかかん敲たたいている。生きて――自分を救おうとしている。安さんが生きてる以上は自分も死んではならない。死ぬのは弱い。……

こう決心をして、何でも構わないから、ひとまず坑夫になつた上として、できるだけ

急ぎ足で帰って来ると、長屋の半丁ばかり手前に初さんが石へ腰を掛けて待っている。雨は歇んだ。空はまだ曇っているが、濡れる氣遣はない。山から風が吹いて来る。寒くても、世界の明かるいのが、非常に嬉しい。自分が嬉しさの余り、疲れた足を擦りながら、いそいそ近づいてくると、初さんは奇怪な顔をして、

「やあ出て来たな。よく路が分ったな」

と云った。自分が案内につけられながら、他を置き去りにして、何とかして何とか、てててと云う唄をうたつて、大いに焦して置いて、他が大迷つきに、迷つて、穴の角へ頭をぶつつけて割つて見ようとまで思ったあげく、やつとの事で安さんの御情で出て来れば、「よく路が分ったな」と空とぼけている。その癖親方が怖いものだから、途中で待ち合せて、いっしょに連れて帰ろうと云う目算である。自分は石へ腰を掛けて薄笑いをしているこの案内の頭の上へ唾液を吐きかけてやろうかと思った。しかし自分は死ぬのを断念したばかりである。当分はここに留まらなくっちゃならない身体である。唾液を吐きかければ、喧嘩になるだけである。喧嘩をすれば負けるだけである。負けた上にスノコの中へぶちこまれてはせつかく死ぬのを断念した甲斐がない。そこで、こう云う答をした。

「どうか、どうか出て来ました」

すると初さんはなおさら不思議な顔をして、

「へえ。感心だね。一人で出て来たのか」

と聞いた。その時自分は年の割にはうまくやった。旨くやったと云うくらいだから、ただ自分の損にならないようにと云うだけで、それより以外に賞める価値のある所作じやないが、とにかく十九にしては、なかなか複雑な曲者だと思う。と云うのは、こう聞かれた時に、安さんの名前がつい咽喉の先まで出たのである。ところをとうとう云わずにしまったのが自慢なのだ。随分くだらない自慢だが訳を話せば、こんな料簡であった。山中組の安さんは勢力のある坑夫に違ない。この安さんがわざわざ第一見張所の傍まで見ず知らずの自分を親切に連れて来てくれたと云う事が知れ渡れば、この案内者は面目を失うにきまっている。責任のある自分が、責任を抛り出して、先へ坑を飛び出してしまったと分る以上は——しかもそれが悪意から出たと明瞭に証拠だてられる以上は、こいつは親方に対して済ましちやいられない。となると後できつと敵を打つだろう。無責任が露見るのは痛快だが——自分はけつして寛大の念に制せられたなんて耶蘇教流の嘘はつかない。——そこまでは痛快だが、敵打は大に迷惑する。実のところ自分はこの迷

惑の念に制せられた。それで、

「ええ、いろいろ路を聞いて出て来ました」

とおとなしい返事をして置いた。

初さんは半分失望したような、半分安心したような顔つきをしたが、やがて石から腰を上げて、

「親方の所へ行こう」

とまた歩き出した。自分は黙って尾いて行つた。昨日親方に逢つたのは飯場だが、親方の住んでる所は別にある。長屋の横を半丁ほど上ると、石垣で二方の角を取つて平した地面の上に二階建がある。家はさほど見苦しくもないが、家のほかに木も庭もない。相変らず二階の窓から悪魔が首を出している。入口まで来て、初さんが外から声を掛けると、窓をがらりと開けて、飯場頭が顔を出した。米利安の襯衣の上へどてらを着たままである。

「帰ったか。御苦労だった。まああっちへ行つて休みねえ」

と云うが早いか初さんは消えてなくなった。後は二人になる。親方は窓の中から、自分は表に立ったまま、談話をした。

「どうです」

「大概見て来ました」

「どこまで降りました」

「八番坑まで降りました」

「八番坑まで。そりゃ大変だ。随分ひどかったでしょう。それで……」  
と心持首を前の方へ出した。

「それで——やっぱりいるつもりです」

「やっぱり」

と繰り返したなり、飯場頭はじつと自分の顔を見ていた。自分も黙って立っていた。二階からは依然として首が出ている。おまけに二つばかり殖ふえた。この顔を見ると、厭いやでたまらない。飯場へ帰ってから、この顔に取り巻かれる事を思い出すと、ぞつとする。それでもいる気である。どんな辛抱をしてもいる気である。しかし「やっぱりいるつもりです」と断然答えて置いて、一階の顔を不意に見上げた時には、さすがに情なかった。こんな奴といつしよに置いてくれと、手を合せて拝まなければ始末がつかないようになり下がったのかと思うと、身体からだも魂も塩かを懸なまこけた海鼠なまこのようにたわいなくなつ

た。その時飯場頭はようやく口を利いた。奇麗さっぱりと利いた。

「じゃ置く事にしよう。だが規則だから、医者に一遍見て貰つてね。健康の証明書を  
持つて来なくっちゃいけない。——今日と——今日は、もう遅いから、明日の朝、行つ  
て見て貰つたらよかろう。——診察場かい。診察場はこれから南の方だ。上がつて来る  
時、見えたろう。あの青いペンキ塗りの家だ。じゃ今日は疲れたらうから、飯場へ帰つ  
て緩くり御休み」

と云つて窓を閉てた。窓を閉てる前に自分はちよつと頭を下げ、飯場へ引返した。緩  
くり御休と云つてくれた飯場頭の親切はありがたいが、緩くり寝られるくらいなら、こ  
んなに苦しみはしない。起きていれば獐猛組、寝れば南京虫に責められるばかりだ。た  
またま飯の蓋を取れば咽喉へ通らない壁土が出て来る。——しかしいる。いるときめた  
以上は、どうしてもいて見せる。少くとも安さんが生きてるうちにはいる。シキの人間が  
みんな南京虫になつても、安さんさえ生きて働いてるうちは、自分も生きて働く考えで  
ある。こう考えながら半丁ほどの路を降りて飯場へ歸つて、二階へ上がった。上がると  
案のじよう大勢囲炉裏の傍に待ち構えている。自分はくさくさしたが、できるだけ何喰  
わぬ顔をして、邪魔にならないような所へ坐つた。すると始まつた。皮肉だか、冷評だ



か、罵詈ばりだか、滑稽こっけいだか、のべつに始まった。

一々覚えている。生涯しょうがい忘れられないほどに、自分の柔らかい頭を刺激したから、よく覚えている。しかし一々繰返す必要はない。まず大体昨日きのうと同じ事と思えば好い。自分は急に安さんに逢あいたくなつた。例の夕食ゆうめしを我慢して二杯食つて、みんなの眼につかないようにそつと飯場を抜け出した。

山中組はジャン・ボーの通つた石垣の間を抜けて、だらだら坂の降り際ぎわを、右へ上ると斜はすに頭の上に被かぶさつてゐる大きな槐えんじゅの奥にある。夕暮の門口かどぐちを覗のぞいたら、一人の掘子ほりこがカンテラの灯ひで筒服つつぽうの掃除をしていた。中は存外静かである。

「安さんは、もうお帰りになりましたか」

と叮嚀ていねいに聞くと、掘子は顔を上げてちよいと自分を見たまま、奥を向いて、

「おい、安さん、誰か尋ねて来たよ」

と呼び出しにかかるや否や、安さんは待つてたと云わんばかりに足音をさせて出て来た。

「やあ来たな。さあ上あがれ」

見ると安さんは唐棧とうざんの着物まめしぼりに豆絞なか何にかの三尺を締めて立っている。まるで東京の

馬丁べっとうのような服装なつりである。これには少し驚いた。安さんも自分の様子を眺ながめて首を傾かしげて、

「なるほど東京を走ったまんまの服装なつりだね。おれも昔はそう云う着物を着たこともあったつけ。今じゃこれだ」

と両袖りょうそでの裾ゆきを引っ張って見せる。

「何と見える。車引かな」

と云うから、自分は遠慮してにやにや笑っていた。安さんは、

「ハハハハ根性こんじょうはこれよりまだ墮落だらくしているんだ。驚いちゃいけない」

自分は何と答えていいか分らないから、やはりにやにや笑って立っていた。この時分は手持無沙汰てもちぶさたでさえあればにやにやして済すましたもんだ。そこへ行くと安さんは自分より遙はるか世馴よなれている。この体ていを見て、

「さつきから来るだろうと思って待っていた。さあ上あがれ」

と向うから始末をつけてくれた。この人は世馴れた知識を応用して、世馴れない人を救たすける方の側がわだと感心した。こいつを逆にして馬鹿にされつけていたから特別に感心したんだろう。そこで安さんの云う通り長屋へ上って見た。部屋はやっぱり広いが、自分の

泊った所ほどでもない。電気灯は点いている。囲炉裏もある。ただ人数が少い、しめて五六人しかない。しかも、それが向うに塊かたまりってるから、こっちはたった二人である。そこでまた話を始めた。

「いつ帰る」

「帰らない事にしました」

安さんは馬鹿だなあと云わないばかりの顔をして呆あきれている。

「あなたのおっしゃった事は、よく分つています。しかし僕だつて、酔興すいきようにここまで来た訳じゃないんですから、帰るつたつて帰る所はありません」

「じゃやっぱり世の中へ顔が出せないような事でもしたのか」

と安さんは鋭い口調で聞いた。何だか向うの方がぎよつとしたらしい。

「そうでもないんですが——世の中へ顔が出したくないんです」

と答えると、自分の態度と、自分の顔つきと、自分の語勢を注意していた安さんが急に噴ふき出した。

「冗談云つちやいけねえ。そんな酔狂があるもんか。世の中へ顔が出したくないた何の事だ。贅沢ぜいたくじゃねえか。そんな身分に一日でも好いからなつて見てえくらいだ」

「代れば代って上げたいと思います」

と至極真面目に云うと、安さんは、また嘖き出した。

「どうも手のつけようがないね。考えて御覧な。世の中へ顔が出したくないものがさ、このシキへ顔が出したくなれるかい」

「ちつとも出したくはありません。仕方がないから——仕方がないんです。昨夕も今日も散々苛責られました」

安さんはまた笑い出した。

「太え野郎だ。誰が苛責た。年の若いものつらまえて。よしよしおれが今に敵を打つてやるから。その代り帰るんだぜ」

自分はこの時大変心丈夫になった。なおなお留まる気になった。あんな獯猛もこつちさえ強くなりやちつとも恐ろしくないんだ、十把一束に罵倒するくらいの勇氣がだんだん出てくるんだと思った。そこで安さんに敵は取ってくれないでも好いから、どうか帰さずに当分置いて貰えまいかと頼んだ。安さんは、あまりの馬鹿らしさに、気の毒そうな顔をして、呆れ返っていたが、

「それじゃ、いるさ。——何も頼むの頼まないのつて、そりや君の勝手だあね。相談す

るがものはないや」

「でも、あなたが承知して下さらないと、いにくいですから」

「せっかくそう云うんなら、当分にするがいい。長くいちやいけない」

自分は謹つつしんで安さんの旨むねを領りようした。実際自分もその考えでいたんだから、これはけつして御交際おつきあいの挨拶あいさつではなかった。それからいろいろな話をしたがシキの中の述懐と大した変りはなかった。ただ安さんの兄あにさんが高等官になつて長崎にいと云う事を聞いて、大いに感動した。安さんの身になつても、兄さんの身になつても、定めし苦しいだろうと思うにつけ、自分と自分の親と結びつけて考え出したら何となく悲しくなつた。帰る時に安さんが出口まで送つて来て、相談でもあるならいつでも来るが好いと云つてくれた。

表へ出ると、いつの間にか曇まつた空が晴れて、細い月が出ている。路は存外明るい、その代り大変寒い。袷あわせを通して、襯衣シャツを通して、蒲鉾かまぼこ形の月の光が肌まで浸しみ込んで来るようだ。両袖を胸の前へ合せて、その中へ鼻から下を突込んで肩をできるだけ聳そびやかして歩行あるき出した。身体からだはいじけているが腹の中はさつきよりだいぶん豊かになつた。何の当分のうちだ。馴なれればそう苦にする事はない。何しろ一万余人もかたまつて、毎

日毎日いっしょに働いて、いっしょに飯を食って、いっしょに寝ているんだから、自分だつて七日も練習すれば、一人前に墮落する事はできるに違ない。——この時自分の頭の中には、墮落の二字がこの通りに出て来た。しかしただこの場合に都合のいい文字として湧いて出たまでで、墮落の内容を明かに代表していなかったから、別に恐ろしいとも思わなかった。それで、比較的元氣づいて飯場へ歸つて来た。五六間手前まで来ると、何だかわいいわい云っている。外は淋しい月である。自分は家の騒ぎを聞いて、淋しい月を見上げて、しばらく立っていた。そうしたら、どうも這入るのが厭になった。月を浴びて外に立っているのも、つらくなつた。安さんの所へ行つて泊めてもらいたくなつた。一步引き返して見たが、あんまりだと氣を取り直して、のそのそ長屋へ這入つた。横手に広い間があつて、上り口からは障子で立て切つてある。電氣灯が頭の上にあるから影は一つも差さないが、騒ぎはまさにこの中から出る。自分は下駄を脱いで、足音のしないように、障子の傍を通つて、二階へ上がった。段々を登り切つて、大きな部屋を見渡した時、ほつと一息ついた。部屋には誰もいない。

ただ金さんが平たく煎餅のようになって寝ている。それから例の帆布綿にくるまつて、ぶら下がつてゐる男もいる。しかし両方とも極めて静かだ。いてもいないと同じく、

部屋は漠然<sup>ぼくぜん</sup>としてただ広いものだ。自分は部屋の真中まで来て立ちながら考えた。床を敷いて寝たものだろうか、ただしは着のみのままで、ごろりと横になるか、または昨<sup>ゆう</sup>夕<sup>べ</sup>の通り柱<sup>はしら</sup>へ倚<sup>よ</sup>れて夜を明そうか。ごろ寝は寒い、柱<sup>はしら</sup>へ倚<sup>よ</sup>り懸<sup>か</sup>るのは苦しい。どうかして布団<sup>ふとん</sup>を敷きたい。ことによれば今日は疲れ果てているから、南京虫<sup>ナンキンむし</sup>がいても寝られるかも知れない。それに蒲団<sup>ふとん</sup>の奇麗<sup>きれい</sup>なのを選<sup>よ</sup>つたらよからう。ことさら日によつて、南京虫の数が違わないとも限るまい。いろいろな理窟<sup>りくつ</sup>をつけて布団を出して、そうつと潜<sup>もぐ</sup>り込んだ。

この晩の、経験を記憶のまま、ここに書きつけては、自分がお話しにならない馬鹿<sup>ばか</sup>だと吹聴<sup>ふいちょう</sup>する事になるばかりで、ほかに何の利益も興味もないからやめる。一口<sup>ひとくち</sup>に云うと、昨夜<sup>ゆうべ</sup>と同じような苦しみを、昨夜以上に受けて、寝るが早いから、すぐ飛び起きた。起きた後で、あれほど南京虫に螫<sup>さ</sup>されながら、なぜ性懲<sup>しょうてい</sup>もなくまた布団<sup>ふとん</sup>を引張り出して寝たものだろうと後悔した。考えると、全くの自業自得<sup>じごうじとく</sup>で、しかも常識のあるものなら誰でも避<sup>よ</sup>けられる、また避けなければならぬ自業自得だから、我れながら浅ましい馬鹿だと、つくづく自分が厭<sup>いや</sup>になって、布団の上へ胡坐<sup>あぐら</sup>をかいたまま、考え込んでいると、また猛烈にちくりと螫<sup>さ</sup>された。臀<sup>しり</sup>と股<sup>もも</sup>と膝頭<sup>ひざがしら</sup>が一時に飛び上がった。自分

は五位鷺ごいさぎのように布団の上に立った。そうして、四囲あたりを見廻した。そうして泣き出した。仕方がないから、紺こんの兵児帯へこおびを解いて、四つに折つて、裸の身体中所嫌わず、ぴしゃぴしゃたた敲き始めた。それから着物を着了た。そうして昨夜の柱の所へ行つた。柱に倚よりかかった。家うちが恋しくなつた。父よりも母よりも、艶子うちさんよりも澄江さんよりも、家の六畳の間が恋しくなつた。戸棚に這入はいつて更紗さらさの布団と、黒天鷲絨くろびろうどの半襟はんえりの掛かつた中形の搔捲かいまきが恋しくなつた。三十分でも好いから、あの布団を敷いて、あの搔捲あつを懸かけて、暖あつたかにして樂々寝て見たい、今頃は誰があの部屋へ寝ているだろうか。それとも自分がいなくなつてから後のちは、机を据すえたまんま、空からん胴どうにしてあるかしらん。そうすると、あの布団も搔捲のちも、畳だなり戸棚にしまつてあるに違ない。もつたいないもんだ。父も母も澄江さんも艶子さんも南京虫に食われないで仕合せだ。今頃は熟睡しているだろう。羨うらやましい。――それとも寝られないで、のつそつしているかしらん。父は寝られないと疳癪かんしゃくを起して、夜中に灰吹をぼんぼんたた敲くのが癖だ。煙草たばこを吞のむんだと云うが、煙草は仮託かこつけで、実は、腹立紛れに敲きつけるんじゃないかと思う。今頃はしきりに敲いてるかも知れない。苦にがしい倅せがれだと思つて敲いてるか、どうなつたらうと心配の余り眼を覺まして敲いてるか。どっちにしても氣の毒だ。しかしこつちじゃそれほ



どもも思っていないから、先方でもそう苦にしちやまい。母は寝られないと手水に起きる。中庭の小窓を明けて、手を洗って、棧をおろすのを忘れて、翌朝よく父に叱られている。昨夜も今夜もきつと叱られるに違ない。澄江さんはぐうぐう寝ている――どうしても寝ている。自分のいる前では、丸くなったり、四角になつたりいろいろな芸をして、人を釣つてゐるが、いなくなれば、すぐに忘れて、平生の通り御膳をたべて、よく寝る女だから、是非に及ばない。あんな女は、今まで見た新聞小説にはけつして出て来ないから、始めは不思議に思ったが、ちゃんと証拠があるんだから確かである。こう云う女に恋着しなければならぬのは、よッぽどの因果だ。随分憎らしいと思うが、憎らしいと思ひながらもやッぱり惚れ込んでゐるらしい。不都合な事だ。今でも、あの色の白い顔が眼前にちらちらする。怪しからぬ顔だ。艶子さんは起きてる。そうして泣いてるだろう。はなはだ氣の毒だ。しかしこつちで惚れた覚もなければ、また惚れられるような悪戯をした事がないんだから、いくら起きていても、泣いてくれても仕方がない。氣の毒がる事は、いくらでも氣の毒がるが仕方がない。構わない事にする。――そこで最後には、ほかの事はどうともするから、ただ安々と楽寝がさせて貰いたい。不斷の白い飯も虫唾が走るように食いたい、それよりか南京虫のいない床へ這入りたい。三十

分でも好いからぐっすり寝て見たい。その後でなら腹でも切る。……

こう考えているとまた夜が明けた。考えている途中でいつか寝たものと見えて、眼が覚めた時は、何にも考えていなかった。それからあとは、のそのそ下へ降りて行って、顔を洗って、南京米ナンキンまいを食う。万事昨日きのうの通りだから、省はぶいてしまう。九時の例刻を待ちかねて病院へ出掛ける。病院は一昨日山おとといを登って来る時に見た、青いペンキ塗の建物と聞いているから道も家も間違えようがない。飯場はんばを出て二丁ばかり行くと、すぐ道端みちばたにある。木造ではあるがなかなか立派な建築で、広さかなりだけに、獐猛組じょうもうぐみとはまるで不釣合である。野蠻人が病氣をするんでさえすでに不思議なくらいなのに、病氣に罹かかつたものを治療してやるための器械と薬品と医者と建物を具そなえつけたんだから、世の中は妙だと云う感じがすぐに起る。まるで泥棒が金を出し合って、小学校を建てて子弟を通学させてるようなものだ。文明と蒙昧もうまいの両極端がこのペンキ塗の青い家の中で出逢であって、一方が一方へ影響を及ぼすと、蒙昧がますますぴんぴん蒙昧になってくる。下手へたに食い違った結果が起るもんだ。と考えながら歩いて来ると、また鬼共が窓から首を出して眺ながめている。せっかくの考えもこの気味のわるい顔を見上げるとたちまち崩くずれてしまう。あの顔のなかに安さんのようなのが、たった一つでもあれば、生き返るほど嬉しい

だろうに、どれもこれも申し合せたように獐猛の極致を尽している。あれじゃ、どうしたって病院の必要があるはずがないとまで思った。

天気だけは好都合にすっかり晴れた。赤土を劈いたような山の壁へ日が当る。昨日、一昨日の雨を吸込んだ土は、東から差す日を受けて、まだ乾かない。その上照る日はいくらでも吸い込んで行く。景色は晴れがましいうちに湿とりと調子づいて、長屋と長屋の間から、下の方の山を見ると、真蒼な色が笑み割れそうに濃く重なっている。風は全く落ちた。昨夕と今朝とはほとんど十五度以上も違うようである。道傍に、たった一つ蒲公英が咲いている。もったいないほど奇麗な色だ。これも獐猛とはまるで釣り合ない。

病院へ着いた。和土の廊下が地面と擦れ擦れに五六間続いている突き当りに、診察室と云う札が懸って、手前の右手に控所と書いてある。今云った一間幅の廊下を横切つて、控所へ這入ると、下はやはり和土で、ベンチが二脚ほど並べてある。小さい硝子窓には受附と楷書で貼りつけてある。自分はこの窓口へ行つて、自分の姓名を書いた紙片を出す、窓の中に腰を掛けていた二十二三の若い男が、その紙片を受取つて、ありもしない眉へ八の字を寄せて、むずかしそうにとくと眺めた上、

「こりや御前か」

と、さも横風おうふうに云った。あまり好い心持ではなかった。何の必要があつて、こう自分を軽蔑けいべつするんだか不平に堪えない。それで単に、

「ええ」

と出来るだけ愛嬌あいきようのない返事をした。受附は、それじゃ、まだ挨拶あいさつが足りないと云わんばかりに、しばらくは自分を睨にらめていたが、こつちもそれつ切り口を結んで立つていたもんだから、

「少し待っている」

と、ぴしやりと硝子戸ガラスどを締めて出て行つた。草履ぞうりの音がする。あんなにばたばた云わせなくつても好きそうなもんだと思つた。

自分はベンチへ腰を掛けた。受附はなかなか歸つて来ない。ぼんやりしていると、眼の前にジャン・ボーが出て来た。金さんきんがよつしよいよつしよいと担かつがれて来るところが見える。あれでも病院が必要なのかと思つた。何のために薬を盛つて、患者を施療せりようするのか、ほとんど意義をなさない。こんな体裁ていさいのいい偽善はない。病人はいじめるだけいじめる。ジャン・ボーは囁はやしたいだけ囁す。その代り医者にかけてやると云うのか。鄭重ていちょう

の至りである。

「おいあっちへ廻れ」

と突然受附の聲がした。見ると受附は硝子窓の中に威丈高に突立つて、自分を眼下に睥睨している。自分は控所を出た。右へ折れて、廊下伝いに診察場へ上がった。薬の臭がふんとした。この臭を嗅ぐと等しく、自分も、もうやがて死ぬんだなと思ひ出した。死んでこの土になったら不思議なものだ。こう云うのを運命というんだろう。運命の二字は昔から知ってたが、ただ字を知ってるだけで意味は分らなかつた。意味は分つても、納得がむずかしかつた。西洋人が筭を想像するように定義だけを心得て満足していた。けれども人間の一大事たる死と云う實際と、人間の獸類たる坑夫の住んでいるシキとを結びつけて、二三日前まで不足なく生い立った坊っちゃんを突然宙に釣るして、この二つの間に置いたとすると、坊っちゃんは始めてなるほどと首肯する。運命は不思議な魔力で可憐な青年を弄ぶもんだと云う事が分る。すると今までただの山であつたものが、ただの山でなくなる。ただの土であつたものがただの土でなくなる。青いばかりと思つた空が、青いだけでは済まなくなる。この病院の、この診察場の、この薬品の、この臭いまでが夢のような不思議になる。元來この椅子に腰を掛けてゐる本人からして

が、何物だかほとんど要領を得ない。本人以外の世界は明瞭に見えるだけで、どんな意味のある世界かさっぱり見当がつかない。自分は、診察場と薬局とをかねたこの一室の椅子に倚つて、敷物と、洋卓と、薬瓶と、窓と、窓の外の山とを見廻した。もつとも明瞭な視覚で見廻したが、すべてがただ一幅の画と見えるだけで、その他には何物をも認める事ができなかった。

そこへ戸を開けて、医者があらわれた。その顔を見ると、やつぱり坑夫の類型である。黒のモーニングに縞の洋袴を着て、襟の外へ顎を突き出して、

「御前か、健康診断をして貰うのは」

と云った。この語勢には、馬に対しても、犬に対しても、是非腹の内なかで云うべきほどの敬意が籠こもっていた。

「ええ」

と自分は椅子を離れた。

「職業は何だ」

「職業って別に何にもないんです」

「職業がない。じゃ、今まで何をして生きていたのか」

「ただ親の厄介やっかいになっていました」

「親の厄介やっかいになっていた。親の厄介やっかいになって、ごろごろしていたのか」

「まあ、そうです」

「じゃ、ごろつきだな」

自分は答をしなかった。

「裸になれ」

自分は裸になった。医者は聴診器で胸と背中をちよつと視みた上、いきなり自分の鼻を撮つまんだ。

「息をして見ろ」

息が口から出る。医者は口の所へ手をあてがった。

「今度こんだ口を塞ふさぐんだ」

医者は鼻の下へ手をあてた。

「どうでしょう。坑夫こうふになれますか」

「駄目だ」

「どこか悪いですか」

「今書いてやる」

医者は四角な紙片<sup>かみきれ</sup>へ、何か書いて抛<sup>ほう</sup>り出すように自分に渡した。見ると気管支炎とある。

気管支炎と云えば肺病<sup>したじ</sup>の下地である。肺病になれば助かりようがない。なるほどさつき薬<sup>にがい</sup>の臭<sup>か</sup>いで死ぬんだなと虫が知らせたのも無理はない。今度はいよいよ死ぬ事になりそうだ。これから先二三週間もしたら、金<sup>きん</sup>さんのようによつしよいよつしよいでジャン・ボー<sup>ジャン・ボー</sup>を見せられて、そのあげくには自分がとうとうジャン・ボー<sup>ジャン・ボー</sup>になって、それから思う存分<sup>はや</sup>嘸<sup>は</sup>し立てられて、敲<sup>たた</sup>き立てられて、——もつとも新参だから嘸<sup>は</sup>してくれものも、敲<sup>たた</sup>いてくれるものも、ないかも知れないが——とどの詰りは、——どうなる事か自分にも分らない。それは分らなくつてもよろしい。生きて動いている今ですら分らない。ただ世界のべつ、のつぺらぼうに続いているうちに、あざやかな色が幾通りも並んでるばかりである。坑夫は世の中で、もつとも穢<sup>きた</sup>ないものと感じていたが、かように万物を色の変化と見ると、穢<sup>きた</sup>ないも穢<sup>きた</sup>なくないもある段じゃない。どうでも構わないから、どうとも勝手にするがいい、自分が懷<sup>ふし</sup>手<sup>て</sup>をしていたら運命が何とか始末をつけてく



れるだろう。死んでもいい、生きてもいい。華嚴けげんの瀑たきなどへ行くのは面倒になった。東京へ帰る？ 何の必要があつて帰る。どうせ二三度咳せきをせくうちの命だ。ここまで運命が吹きつけてくれたもんだから、運命に吹き払われるまでは、ここにいるのが、一番骨が折れなくて、一番便利で、一番順当な訳だ。ここにいて、ただ墮落の修業さえすれば、死ぬまでは持てるだろう。肺病患者にほかの修業はむずかしいかも知れないが、墮落の修業なら——ふと往きに眼についた蒲公英たんぽぽに出逢であつた。さつきはもつたいないほど美しい色だと思つたが、今見ると何ともない。なぜこれが美しかったんだろうと、しばらく立ち留まつて、見ていたが、やつぱり美しくない。それからまたあるき出した。だから坂を登ると、自然と顔が仰向あおむきになる。すると例の通り長屋から、坑夫が頼杖ほむづえを突いて、自分を見下みおろしている。さつきまではあれほど厭いやに見えた顔がまるで土細工つちざいくの人形の首のように思われる。醜みにくくも、怖こわくも、憎らしくもない。ただの顔である。日本一の美人の顔がただの顔であるごとく、坑夫の顔もただの顔である。そう云う自分も骨と肉で出来ただだの人間である。意味も何もない。

自分はこう云う状態で、無人むにんの境さかいを行くような心持で、親方うちの家までやつて来た。案内を頼むと、うちから十五六の娘が、がらりと障子しょうじをあけて出た。こう云う娘がこんな

所にいようはずがないんだから、平生<sup>へいぜい</sup>ならはつと驚く訳だが、この時はまるで何の感じもなかった。ただ器械のように挨拶<sup>あいさつ</sup>をすると、娘は片手を障子へ掛けたまま、奥を振り向いて、

「御父<sup>おとつ</sup>さん。御客」

と云った。自分はこの時、これが飯場頭<sup>はんばがしら</sup>の娘だなど合点<sup>がてん</sup>したが、ただ合点したまでで、娘がまだそこに立っているのに、娘の事は忘れてしまった。ところへ親方が出て来た。

「どうしたい」

「行つて来ました」

「健康診断を貰つて来たかい。どれ」

自分は右の手に握っていた診断書を、つい忘れて、おやどこへやっatarouかと、始めて気がついた。

「持つてるじゃないか」

と親方が云う。なるほど持っていたから、皺<sup>しわ</sup>を伸<sup>の</sup>して親方に渡した。

「気管支炎。病氣じゃないか」

「ええ駄目です」

「そりゃ困ったな。どうするい」

「やっぱり置いて下さい」

「そいつあ、無理じゃないか」

「ですが、もう帰れないんだから、どうか置いて下さい。小使でも、掃除番でもいいですから。何でもしますから」

「何でもするつたって、病氣じゃ仕方がないじゃないか。困ったな。しかしせつかくだから、まあ考えてみよう。明日までには大概様子が分るだろうからまた来て見るかい」

自分は石のようになって、飯場へ歸つて来た。

その晩は平気で囲炉裏の側に胡坐をかいていた。坑夫共が何と云つても相手にしなかった。相手にする料簡も出なかった。いくら騒いでも、愚弄つても、よしんば踏んだり蹴たりしても、彼らは自分と共に一枚の板に彫りつけられた一団の像のように思われた。寝るときは布団は敷かなかった。やはり囲炉裏の傍に胡坐をかいていた。みんな寝着いてから、自分もその場へ仮寝をした。囲炉裏へ炭を継ぐものがないので、火の気がだんだん弱くなって、寒さがしだいに増して来たら、眼が覚めた。襟の所がぞくぞくす

る。それから起きて表へ出て空を見たら、星がいっぱいあった。あの星は何しに、あんなに光ってるのだろうと思つて、また内へ這入った。金さんは相変らず平たくなつて寢ている。金さんはいつジャンボーになるんだらう。自分と金さんとどっちが早く死ぬだらう。安さんは六年このシキに這入つてると聞いたが、この先何年鉦を敲くだらう。やつぱりしまいには金さんのように平たくなつて、飯場の片隅に寝るんだらう。そうして死ぬだらう。——自分は火のない囲炉裏の傍に坐つて、夜明まで考えつづけていた。その考えはあとから、あとから、仕切りなしに出て来たが、いずれも干枯びていた。涙も、情も、色も香もなかった。怖い事も、恐ろしい事も、未練も、心残りもなかった。夜が明けてから例のごとく飯を済まして、親方の所へ行つた。親方は元氣のいい声をして、

「来たか、ちようど好い口が出来た。実はあれからいろいろ探したがどうも思わしいところがないんでね、——少し困つたんだが。とうとう旨い口を見附けた。飯場の帳附だかね。こりや無ければ、なくつても済む。現に今までは婆さんがやつてたくらいだが、せつかくの御頼みだから。どうだねそれならどうか、おれの方で周旋ができようと思うが」

「はあありがたいです。何でもやります。帳附と云うと、どんな事をするんですか」

「なあに訳はない。ただ帳面をつけるだけさ。飯場にああ多勢いる奴が、やや草鞋だ、やや豆だ、ヒジキだって、毎日いろいろなものを買うからね。そいつを一々帳面へ書き込んでいて貰やあほいんだ。なに品物は婆さんが渡すから、ただ誰が何をいくら取ったと云う事が分るようにして置いてくれればそれで結構だ。そうするとこつちでその帳面を見て勘定日に差し引いて給金を渡すようにする。——なに力業ちからわざじゃないから、誰でもできる仕事だが、知つての通りみんな無筆の寄合よりあひだからね。君がやってくれるとこつちも大變便利だが、どうだい帳附は」

「結構です、やりましょう」

「給金は少くつて、まことに御氣の毒だ。月に四円だが。——食料を別にして」

「それでたくさんです」

と答えた。しかし別段に嬉しいとも思わなかった。ようやく安心したとまでは固もつり行かなかった。自分の鉢山における地位はこれでやつときまつた。

翌日あくるひから自分は台所の片隅に陣取つて、かたのごとく帳附ちようつけを始めた。すると今まであのくらい人を輕蔑けいべつしていた坑夫の態度ががらりと變つて、かえつて向うから御世辞を取

るようになった。自分もさつそく墮落けいこの稽古けいこを始めた。南京米ナンキンまいも食った。南京虫ナンキンむしにも食われた。町からは毎日毎日ポン引びきが椋鳥むくどりを引張ひつて来る。子供も毎日連れられてくる。自分は四円の月給のうちで、菓子を買かつては子供にややつた。しかしその後のち東京へ帰ろうと思おもつてからは断然やめにした。自分はこの帳附を五箇月間無事に勤めた。そうして東京へ歸かへつた。——自分が坑夫くわふについての経験はこれだけである。そうしてみんな事実である。その証拠には小説になつていないんでも分る。

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---